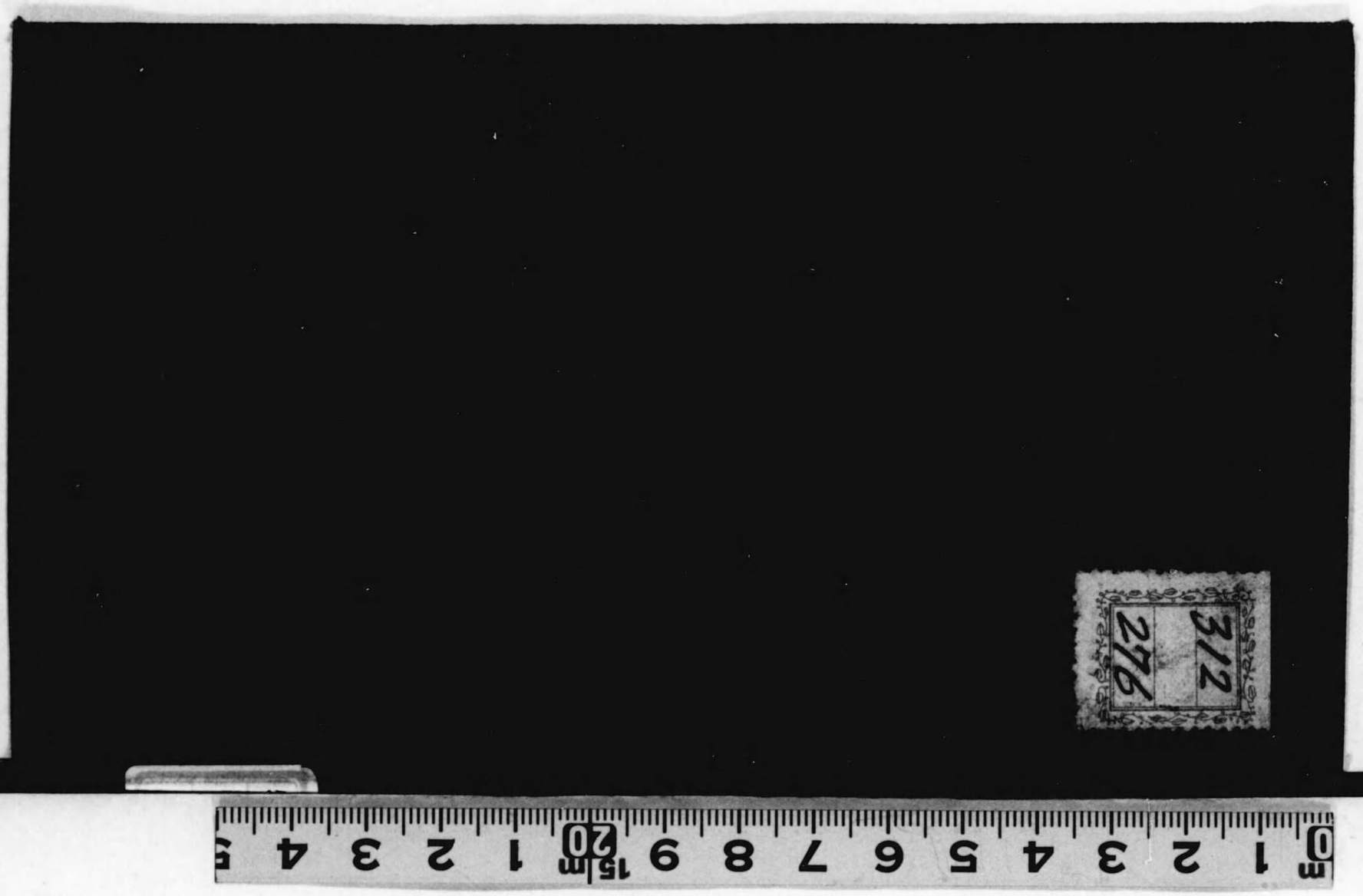

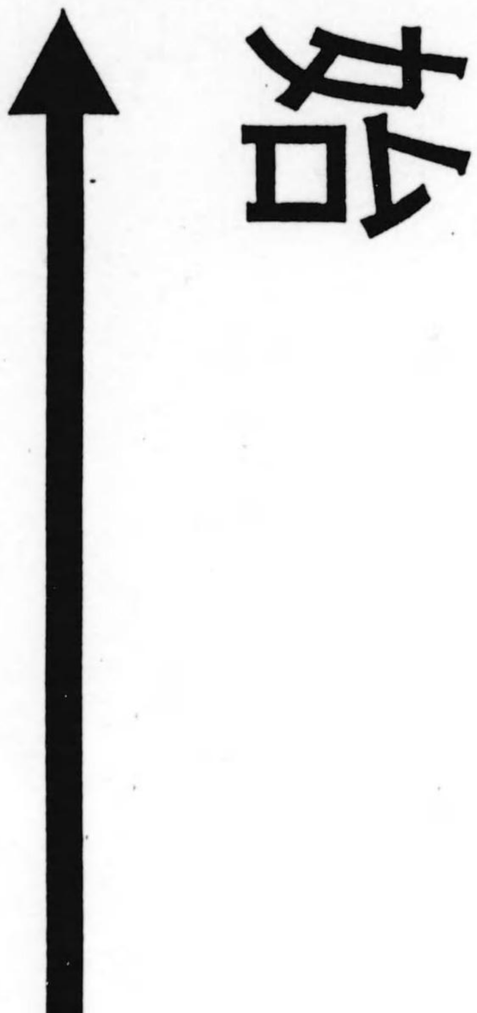
北

312
276

特231
549

早稲田大學
教授
竹野長次
著

新釋 土佐日記

東京
上田泰文堂發行

昭和二

貫之と土佐日記

土佐日記に關して一言する前に、その著者紀貫之について考へて見たい。彼の閲歴は今日詳しく傳つては居らぬ。古今集目錄・三十六人歌仙傳・勅撰作者部類・和歌色葉集・羅山文集・等に見えてゐる所のものは、その補任の點だけであつて、享年については知るべくもない。延喜六年二月越前權少掾・御書所預となつたのを緒(いとぐち)に、內膳典膳・少內記・大內記を經て、延喜七年五月には從五位下に叙せられ、同月加賀介となり、次いで美濃介・大監物・右京亮・土佐守・玄番頭を歴任して、天慶八年三月木工權頭に補せられ、同九年に易簀してゐる。

貫之が古今集を撰進したのは延喜五年四月で――景樹は六年であると云うてゐる。古今集正義に引いてゐる古傳には、此時の貫之の年齢を二十三歳――一說には三十二歳であるとしてゐるのに對し、景樹は之等の說を否定し、當時四十五六歳で、

享年は八十五歳位であつたらうと斷じてゐる。その理由としては、貫之が如何に絶世の才能があつても、二十三歳程の弱年で撰集の魁首たることは覺束なからう、殊に寛平后宮の歌合に貫之も歌人の一人として列してゐた事は古今集に見えてゐる歌によつても明かである。その歌合の年月は明確ではないが、寛平五年頃と推定すると、貫之の八九歳の頃である。僅か八九歳の幼弱の身で歌人の列に加はる筈はない。隨つて撰集の當時を四十五六歳と見るべ。古今集・冬之部に見えてゐる「行く年の惜しくもあるかなます鏡見る影さへにくれぬと思へば」といふ自作の歌の語調にも叶ふし、寛平后宮の歌合の作者であつた事實も首肯せられると云うてゐる。

貫之と云へば古今集が聯想される。萬葉の人麿・古今の貫之といつたやうに肩を並べて、歌聖として尊敬された。殊に崇敬された度に於ては、平安朝以後德川時代に至るまで、人麿を凌駕してゐたやうに思はれる。誰でも詩人と云へば情熱家を思ふ。如何にも人麿は雄大な氣魄と燃えるやうな情熱の持主であつた。然し貫之は情熱家といふよりも寧ろ理智の人である。四十年前後の歳月を官吏で過した彼は、詩的天分に恵まれた人ではなくて、事務家として俗吏として成功すべき常識家であつた。今彼の作歌を少しく拾ひ上げて見るに、

河風の涼しくもあるか打ち寄する波と共にや秋は立つらむ

青柳の糸よりかくる春しもぞ亂れて花の綻びにける

櫻花散りぬる風の名殘には水なき空に波ぞ立ちける

櫻花とく散りぬともおもほえず人の心ぞ風も吹きあへぬ

時鳥人まつ山に鳴くなればわれうちつけに戀ひまさりけり

誰が秋にあらぬものゆゑ女郎花なぞ色に出でゝまだき移ろふ

ちはやぶる神のい垣に這ふ葛も秋にはあへず移ろひにけり

見る人もなくて散りぬる奥山のもみぢは夜の錦なりけり

霞立ち木の芽もはるの雪ふれば花なき里も花ぞ散りける

など、内部に感情の興奮があつて、それが自ら口を衝いて出たといつた、一氣呵成になつたものは見當らない。想を練り句を案じた慘憺たる苦心は認めるが、それだけまた實感から離れた概念的な技巧的なものになつてゐる。もつとも此時代の美的生活のめやすが典雅といふことに在つた。「程よい」ことが彼等の理想であつた。だから露骨を忌み極端を嫌ふ。勢ひ技巧的になる。またならざるを得ない。文字の上の技巧のみでなく、作意の上にも技巧を凝らすやうになる。緣語や懸語を用ゐたり、機智を誇るといふ種類のものの多いのは當然である。「見る人もなくて」の歌のやうに、「夜の錦」といふ支那の故事に基いて、さて奥山の紅葉を當篏めたといつた知的聯想に過ぎないものもある。「青柳の糸よりかくる」の歌のやうに、柳の枝を糸に、花の咲くを衣の綻びる事に譬へ、糸を繕ることゝ綻びることゝの反對の現象を春のなかにとり合せて、さても不思議な事よといつた、驚きの心を表はして、機智を誇りとしてゐるに過ぎないものもある。「ちはやぶる神の」の歌のやうに、永久堅

固な神威のもとにある齋垣の葛を取り上げた點に、着想の新奇を見るだけのものもある。「櫻花とく散りぬとも」の歌のやうに、一語兩義の語に基いて人の心の移るのを花の散るのにたとへ、さて櫻花と人の心とを對比し、風を標準にして、兩者の別を立てゝゐるといつた概念的な理窟がかつたものもある。

君戀ふる涙しなくばから衣胸のあたりは色燃えなまし

わが戀は知らぬ山路にあらなくに惑ふ心ぞわびしかりける

色もなき心を人にそめしより移ろはんとはおもほえなくに

戀の歌でさへ智的技巧を認める以外、何等感情的効果を收めてゐるものがない。戀の思ひに、胸の焦れる事と、涙の流れ落ちる事との、兩者を巧みに取合せて、婉曲に言ひ廻したり、「惑ふ」といふことから「知らぬ山路」に聯想して、説明的な理窟めいた詠みぶりをしたり、「移ろふ」といふ事が色彩の上の事である所から、色もない心であるから、移ろふとは思はないといふ理窟を立てたりしてゐる。技巧的な理窟めいた

ものであることの是非は兎に角、その理窟の筋が首尾の一貫した纒つたものにはなつてゐる。理智の人、常識の人である所以である。土佐日記、二月四日の條にも、

昔の人をのみ戀ひつゝ、船なる人の詠める、

寄する浪うちも寄せなむわが戀ふる人忘貝おりて拾はむ

といへれば、ある人の堪へずして、船の心やりによめる、

忘貝ひろひしもせじ白玉を戀ふるをだにも形見と思はむ

となんいへる。女兒の爲には親をさなくなりぬべし。玉ならずもありけんをと人いはんや。されど死にし子顏よかりきといふやうもあり。

とある。

舟なる人は貫之の妻で、ある人とあるは貫之である。亡兒を白玉に譬へた常識家は、同時に親馬鹿の謗を受けはしまいかといふ事が懸念された。「忘貝」の歌には詩人としての貫之が表れてゐるやうに思はれる。愛兒の追憶それは悲しい事であるにもせよ、また一種甘美な陶醉の境に誘はれるものだ。現實の影が失せてひたすら美しいもの可愛いものへの憧憬である。追憶の世界はやがて詩の世界である。それに引きかへて、「女兒の爲には云々」以下の文字は、何といふ注意深い常識的な言葉であらう。此一節の中に貫之の兩方面、詩人として又常識家としての彼が、よく表はれてゐるやうに思はれる。更に家に歸り着いた時の叙述の中に、

家をあづけたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば望みて預れるなり。さればたより毎に物も絶えず得させたる。今宵かゝる事と聲高にものも言はせず。いとつらくは見ゆれどこしろざしはせんとす。

とある。家を預けた人の薄情な仕打は憤つても餘りある。然かも先方から望んで預かつたのであるに至つては猶更である。然し從者達に家の荒れてゐる不平を聲高にも言はせない。當然すべき謝禮だけはしようといふ。老練な常識家、後で自分だけは笑はれまいと用心する理智の人がゐるではないか。

貫之の文學史上の功績は何と言うても古今集の撰者であつた事がその一で、古今和歌集序・大堰川行幸和歌序・及び土佐日記を殘した事がその二である。奈良朝の淳仁天皇天平寶字三年正月元日の歌を最後にして、和歌は文献の上から跡を絶つた。かくて時代は平安朝に入つた。漢文學の隆盛は目覺ましいもので、凌雲集・文華秀麗集・經國集などいふ勅撰詩集が撰進され、和歌は少しも顧みられなかつた。此沈滯の後をうけて歌道の中興に貢献したものは貫之である。のみならず萬葉の歌とは、その聲調に於てもその着想に於ても、一種異なつた新しい優麗典雅な新體を創始した功は沒すべからざるものがある。彼は或意味に於て文學史上の革新家である。歌では新派の一體を確立して遠く後世まで範を垂れた、――勿論平安朝の典雅な歌風は彼の創始したものではない。六歌仙殊に在原業平小野小町の先輩がある。然しそれら先輩の創めた歌風を繼承して、その歌風を確立した功は、之を認めねばならぬ。古今集序に於ても、始めて國文の序を創始した。よしそれが好んで對句疊語を用ゐて駢麗の體に擬し、艶治流麗、漢文の風格を脱する事は出來なかつたとはいへ、從來の序が皆漢文で作られて居り、殊に假名文は女子の文章として卑下せられ、男子の書く所のものは漢文であつた時勢に在つて、堂々と國文の一體を創始して、之を勅撰集の冒頭に載せた、その識見と、自覺と、慘憺たる苦心とは、炳乎として歴史を照すに足るものがある。

土佐日記は、醍醐天皇の延長八年に土佐國守となつて赴任した彼が、任期が滿ちて、朱雀天皇の承平五年二月に都に歸つた。その歸りがけの旅日記である。冒頭に「男のすなる日記といふものを女もして見むとてするなり」とある如く、男性の日記は漢文を用ゐるのが慣習となつてゐる時に、女に擬して假名文の日記を創始し、爾後踵を接して出てゐる日記隨筆類の魁をなしてゐる。――もつとも紀行文の魁は小品ではあるが伊勢物語の中の「東下り」に見えてゐる。

土佐日記の文章は後世の俳文にも比すべき輕妙な洒脱な筆致である。之を古今集

序に比較すると同人の作とも思はれぬ程の懸隔がある。一は流麗優艶である。一は閑素淡雅である。古今集序は人も知る如く漢文の序に倣うて書いたものであること、勅撰集の冒頭に戴せるべき性質のものであることなどの理由から、自然絢爛莊重の體に書かれたものでもあらうが、貫之壯年の作で自然華麗濃艶を好む時代であつたからででもあらう。それに比してこれは其日々々の出來事を記すといつた極めて肩の凝らぬものでもあるし、老來俗臭を脱して淡雅簡撲を好む時代の作であつたからでもある。兎に角古今和歌集の序が未だ漢文の風格を脱しないのにこれは雅馴な純粹な國文で書かれてある。

之を書いた動機について、景樹は「鍾愛の女子を失はれたる其歎に堪へかねて、ひそかに思ひをやり給へる書なり」、富士谷御杖は「土佐の任に不平を抱き、之を倒語せるものなり」と云うてゐる。本書の所々に亡兒を追憶して思慕の情を寄せることが見えて居り、その單調を破る爲に海賊の恐れのあることを點出し、然かも滑稽的筆致で巧みにかすめてゐるのを見ると、いかにも亡兒への紀念に書いたものであらう。土佐國は貫之にとつては愛兒の墳墓の地である。此世に於ける別は無論悲痛斷腸の極みであるが、遺骸を獨り遠い島國に殘し置いて京都に歸る親の心は更に悲しかつたに相違ない。「昔こそよそにも見しか吾妹子が奥津城と思へば愛しき佐保山」「言問はぬものにはあれど吾妹子が入りにし山をよすがとぞ思ふ」（萬葉）で、いとしい人を葬つた土地に一種の懷かしい情を寄せるのは人情の自然である。殊に「忘貝拾ひしもせじ白玉を戀ふるをだにも形見と思はむ」とあるやうに、せめて亡兒の追憶に慰藉を得ようとした彼にとつては、愛兒の墳墓の地を去ることはいとも悲かつたであらうと想像される。かうした悲痛遣る瀬ない心持から、追慕憐愍の情は凝つて、歸京の紀行文をなりと書いて亡兒に捧げようといふ心持になるのも自然である。「見し人を松の千年に見ましかば遠く悲しき別れせましや」の歌には、此世の別れを悲しむのみではなく、墳墓の地を異にする悲しみをも併せ歌うてゐるではな

いか。舟行は遲々として春日は永い。風浪の爲に妨げられて心ならずも碇泊をつゞける日がつゞく。さうした消閑の心遣りに筆を執つたと解するのも一種の見方である。然らば未だ見ぬ新しい土地へ一種の憧憬と抱負とを持つて輝しく赴任する時の日記をなぜに書かなかつたか。

「男のすなる日記といふものを女もして見むとてするなり」冒頭、女に裝うて此日記の筆を起した理由は何か。女兒の事をあらはに歎く女々しさを恥ぢて、表面女を裝うたのであると眞測は說いてゐる。然しそれは武士道以後の思想から勝手な臆測を下したので一顧の價値もない。事實又貫之が亡兒を追慕する心持は本書の中にあらはに書いてもゐるではないか。それよりも當時假名文を女文といひ、官府の公用文や男子の日錄なども皆漢文であつたのに、特に假名文を用ゐた爲にわざと女を裝うたものであらうと云ふ解釋の方が當つてゐる。想ふにこれは當時男が漢文のみを書いて自國の言葉を輕んじてゐる無自覺な輕薄な態度を揶揄嘲弄して言うたもので、今一つは、女を裝うて貫之自身を第三者の地位に据ゑ、「舟君」「舟の長しける翁」「御舟」などいふ敬語をわざと自己の上に用ゐて、例の滑稽味を添へる準備としたものと、見るべきでは無からうか。貫之自らが既に相當漢文の素養のあつた事は、新撰和歌集の序が漢文で書かれてゐるのを見てもわかるし、次に述べるやうに、此日記の中にも漢詩の句を引いたり、支那の故事を引いてゐるのでもわかる。自ら漢文の素養があつてこそ、他人の自國語を輕じる態度の輕薄さを皮肉ることが出來るのだ。殊に此一篇の中には、召使や童たちの醉うた時の有樣を叙しては、「一文字だに知らぬものしが足は十文字にふみてぞあそぶ」といふ諧謔と皮肉とを、自分の出發を見送りに來た人々のことを叙しては、「守がらにやあらん、國人の常として今はとて見えずなるを心あるものは恥ぢずになん來ける」と云つた、一種の滑稽と皮肉とを、「ゆくさきにたつ白波の聲よりもおくれて泣かんわれやまさらん。」の歌に對しては、「いと大聲なるべし」といつた、不遠慮な皮肉を放つてゐる。また「其歌よめる文字、三十

文字あまり七文字、人みなえあらで笑ふやうなり。歌主いとけしき惡しく笑まず。まねべどもえまねばず、かけりともえよみあへがたかるべし。今日だにいひ難し。まして後には如何ならん」とか、「機取は日もえはからぬかたゐなりけり」といふ惡罵に類したことさへ言うてゐる。「黑鳥のもとに白き浪をよす」と云つた機取の詞に對しては「人の程にあはねば咎むるなり」といひ、同じく機取の「御舟より仰せたぶなり朝北の出でこぬさきに綱手はや引け」と云つたのに對しては「聞く人の怪しく歌めきてもいへるかなとて、書き出せれば、げに三十文字あまりなりけり」といひ、或は「機取の心は神の御心なりけり」と云ふやうな、揶揄飜弄も、口をついて出てゐる。また「京へいくに島坂にて人あるじしたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりくる時ぞ人はとかくありける」と云つて、人々の現金な心持に彼一流の皮肉を浴せてもゐる。もしそれ「ほやのつまのいずし、すしあはびをぞ、心にもあらず脛にあげて見せける」の如きは、老人の老巧な揶揄の言葉でなくて何

んであらう。かうしたやうに此日記には皮肉があり揶揄があり滑稽がある。冒頭の一句はやがて書中の皮肉と揶揄と滑稽とを招牌にかゝげたものでは無からうか。單に國文で書いた爲に女を裝うたのであるといふならば、彼にはその壯年の時既に古今集序といふ立派な堂々たる國文があるではないか。何を苦しんで今更ら女を裝ふ必要があらうぞ。

諧謔もまた隨所に用ゐられてゐる。「いとあやしく潮海のほとりにてあざれあへり」「船路なれど馬のはなむけす」「口網もろもちにて此の海邊にてになひ出せる歌」「たゞ押年魚の口をのみぞすふ。この汲ふ人々の口を、押年魚もし思ふやうあらんや」「春の海に秋の木の葉しも散れるやうにぞありける」「七十八十は海にあるものなりけり」「家をあづけたりつる人の心も荒れたるなりけり」などがそれである。之等は多くは言語上の遊戯で、一種の駄洒落に過ぎない。極めて調子の低いものではあるが、又當時の風尚と貫之の人となりとを知ることが出來よう。

要するに土佐日記には貫之の全人格が現はれてゐる。詩人としての彼、理智の人、常識家としての彼、その他、人民に對して傲慢な官吏としての彼、人を勝手氣まゝに揶揄嘲弄して平氣でゐられる彼、辛辣な皮肉に北庾笑む彼、幼稚な駄洒落に得意がる彼、寂びのある淡雅沖澹の趣味を好む老人の面影が髣髴としてゐる。

最後に土佐日記の註釋書を二三擧げて置く

土佐日記抄　午村季吟著
土佐日記考證　岸本由豆流著
土佐日記創見　香川景樹著
土佐日記舟の直路　橘守部著
土佐日記燈　富士谷御杖著

之等が古註の主なもので明治以後は澤山あるやうであるが、皆古註の說の何れかの範圍を出でない。その中で吉川秀雄氏の校定土佐日記詳釋は出色のものである。

新釋土佐日記目次

十二月二十一日……一
二十二日……六
二十三日……八
二十四日……一〇
二十五日……一一
二十六日……一三
二十七日……一五
二十八日……一四
二十九日……二五
正月　元日……二六
二日……二九
三日……三〇
四日……三一
五日……三三
六日……三三
七日……三三
八日……四七
九日……四九
十日……五八
十一日……五八
十二日……六四
十三日……六五
十四日……六九
十五日……七一
十六日……七三
十七日……七四
十八日……七九
十九日……八三

正月
廿日……八四
二十一日……九一
二十二日……九七
二十三日……九九
二十四日……一〇〇
二十五日……一〇〇
二十六日……一〇一
二十七日……一〇五
二十八日……一〇八
二十九日……一〇八
三十日……一一四
二月
一日……一一六
二日……一一〇
三日……一一〇
四日……一一三
五日……一一八
六日……一一二
七日……一一八
八日……一一〇
九日……一一一
十日……一一九
十一日……一一九
十二日……一一二
十三日……一一二
十四日……一一二
十五日……一一二
十六日……一一五

新釋土佐日記目次　終

新釋土佐日記

竹野長次著

男のすなる日記といふものを、女もして見むとてするなり。それの年、十二月の二十日あまりひとひの日の戌の時にかどです。其の由いさゝか物に書きつく。

【語釋】

○男のすなる日記。男子のしるす日記。「すなる」は「爲るなる」の略。「日記」とは、日々にある事柄を順を追うて書き記した記錄。當時は、人も知る如く、支那文化崇拜の熱が高く、公の文章は漢文であり、男子の學問は漢文學であつた。假名は製作されても、それは女文字として卑しめられた。男の手になる日記は篁日記・平仲日記のやうに漢文で書かれるのが一般の風習であつた。今、

【通釋】

男のしるす日記といふものを、女も書いて見ようと思つて、書くのである。或年の十二月二十一日、午後八時、旅に出かける。その趣をすこし紙にかきつける。

貫之が假名文の日記を記さうとして、女の假面を被つたのも、「男のすなる日記」と冒頭したのも、上述の時代の風習を物語るものである。流布本には「男もすなる」とある。

○女もして見ん。貫之自ら女の假面を被つて、斯う言うたもの。

○それの年。貫之が土佐國から都に歸つたのは、承平四年のことである。この日記を表面上貫之自身の筆としないで、女の筆に見せかけた所から、年號などわざと漠然と言うたもの。

○しはす。奥儀抄「この月は僧を迎へて、經を讀ませ、東西に馳せ走るが故に、師走月の意なり」とある。東雅に「シハスとは歳の終りをいふなり。シはトシのシなり。ハスはハツなり。國語に事の終りをハツともハテともいふなり。されば萬葉集に、極の字をハツとよみ、俗に極月の字を用ゐて、シハスとも云ふなるべし。」

○戌の時。午後八時。

○その由。その趣。その樣子。

○物に書きつく。「物」とは、直接にそれと指さずに漠然といふ詞。爰は懷紙などに書きつけるのをいふ。

【通釋】

或人が國司の任期、……それは滿四年、足掛け五年の……が滿ちて、事務の引繼などが濟み、解由狀など受取つて、住んでゐた國司の官舍を出て、舟にのる筈の場所へ引き移る。知つて居る人も、知らぬ人も、皆、誰も彼も、見送りする。中でも數年このかた召使うてゐた人々が別れを惜んで、盛に何やかと喧しく言うてゐる中に、夜が深くなつた。

ある人、縣の四とせ五とせはてゝ、例の事ども皆しをへて、解由など取りて、住む館より出でゝ、船に乘るべき所へわたる。かれこれ知る知らぬおくりす。年頃よく具しつる人々なむ、別れがたく思ひて、しきりにとかくしつゝのゝしる中に、夜ふけぬ。

【語釋】

○ある人。紀貫之をさす。女の筆に裝うたので、自身を第三者の地位に置いたのである。

○縣。國司がその任國をさしていふ。古事記傳に「阿賀多は上り田にて、元は畠のことなり。田といふは、田をも畠をも統べたる名にて、其中に、水のつかぬを畠とも上田とも云、水田よりは、高く上りたる由なり。……祈年祭祝詞に御縣爾坐皇神等前爾白、高市葛木十市志貴山邊曾布登、御名者白豆、此むつのみあがたにおひいづる甘菜辛菜乎持參來豆、皇御孫命能長御膳能遠御膳登聞食故……此六御縣は殊に近く京畿に在て、朝廷の御料ふ產田物を作りて奉る

地なるが故に、其神を重く祭り賜ひて、かく祈年の祝詞もあるなり。かゝれば縣と云ふは、もと御上田より起れる名にて、又其に准へて、諸國にある朝廷の御料ふ地をも云ふ。……さて後世まで諸國の司人の其任國を指して、縣と云ふも、古に京より國々の御料の縣に、官人などの往來しころの名目の遺れりしなり。萬葉七に、青みづら依網原に人もあはぬかも、石ばしの淡海縣の物語せむ。此歌遠江國司の下る道に、參河國の依網原にて詠めるにて、淡海縣とは、任國の遠江をさして云ふなり。又古今集端詞に文屋康秀が參河掾になりて縣召には得出でたゝじやと云ひやれりける。土佐日記に、或人縣の四とせ五とせはてゝなどあるも、縣とは其任國を指して云ふなり。然るに此らの縣をたゞ田舍を云とのみ心得來つるは非なり。たゞに田舍のことを縣と云へることなし。さて又縣召と云ふことも、御料の縣の官人を任すよしの名目なり、たゞに田舍の官を任すと云ふ意にはあらず。かくて漢字を用る世になりて、此阿賀多に縣の字を當て書きならひて、やゝ後には、必しも朝廷の御料ふ地ならねども、彼の漢國にて、縣といふにあたる程の地をば、凡て何縣と云ふことになれるなり」古今集打聽に「本は班田にて、古へ六年毎に一度づゝ、國々の田を班ち替へて作らしむる事あり、仍て田舍の稱となる」とあり、或は「在方にて、音に

在と云ひ、國郡中、人民部落を爲し、田畠を開き家屋をたつる所をいふ。今も田舍を在と云ふも、在處の義なり」といふ說もある。

○四とせ五とせ。國司の任期は、大寶令では六年となつてゐるが、慶雲三年二月改めて四年となり、その後或は六年、或は四年といつたやうに變替があつて一定して居らぬが、承和二年三月また四年に改め以後永式となつた。爰に「四とせ五とせ」と言うたのは、滿四ヶ年、足かけ五年を意味する。

○例の事ども。いつもの事ども。事務引繼ぎの事ども。

○解由。解由狀のこと。王朝時代、內外の官の任期が滿ちて交替の際、新任の人から前任者に對して、任官公事の取扱上、毫末も懈怠のなかつた由を記して渡す文書。

○住む館。今まで自分が住んでゐた國司の館。「館」は舍宅のこと。

○船に乘るべき所。船に乘る筈の場所。「大津」をさしていふ。當時國府は長岡郡に在つた。

○わたる。移つてゆく。

○かれこれ。數多なるを總べいふ詞、物にも人の上にもいふ。古今集序「詠める歌多く聞えればかれこれを通はしてよく知らず」は、數多の歌を通じての意。

【通釋】二十二日、和泉國まで、波が靜かであれかしと、心の中に願ひおこす。藤原言實が、舟路であるが馬のはなむけ（送別の宴）をした。その酒に上中下の者が皆醉ひすぎて、甚だ常態を逸し、潮海のほとりで、奇怪にもあざれ（戯れ）合うた。

後撰、春下「春のくれかれこれ花をしみける所にて」は、多くの人が皆意。
○年頃。年來。數年來。
○具しつる。近く召使うてゐた。
○とかくしつゝ。かれこれと色々の事を爲い爲いして、色々と旅立ちの世話をしたり、別れの杯を汲みかはしたりするのをいふ。
○のゝしる。聲高に呼ぶこと。やかましく物をいふこと。

二十二日　和泉の國まで平かにと、ねがひ立つ。藤原の言實船路なれど、馬のはなむけす。かみなかしも醉ひすぎて、いとあやしく、潮海のほとりにて、あざれあへり。

【語釋】
○和泉の國まで云々。和泉國まで海上平安にあれかしと心に願ひ起す。特に「和泉國まで」と言うたのは、それ迄が海上に危險が多く、それから先は內海で安全であるからである。「願ひ立つ」は、諸註には「和泉國まで平らかに舟つけかしと願うて舟出する」意に解いて居り、又、「立願」の意に解いてゐる說もあるが、さうではなく、廿二日はまだ海に漕ぎ出る日ではないが、その舟に乘るべき場所に來た第一日で、航海の事實に直面した日であるから、自然海上の平安を心に願うたので、「願ひ立つ」の「立つ」は「思ひ立つ」などいふ「立つ」と同じく、今迄格別心に思はなかつた一路の平安をいよ〳〵願ひおこす意であらう。「立願」の意ならば、「願ひた」とある方が妥當であり、「出發」の意ならば「願ひて」とあるべき所であらう。
○藤原言實。傳不詳。
○馬のはなむけ。旅立つ人の馬の鼻を、その行くべき方向にむけて、祝言する事から出た言葉で、送別の宴を開くこと、又は餞別の意に用ゐる、「馬のはなむけ」といふ言葉が陸路の旅に基いて出來た言葉である所から、例の駄洒落で「舟路なれど」と言うたのである。
○かみなかしも。上中下のあらゆる階級の人々。
○いとあやしく。甚だ奇怪に。此語は、「あざれ」に連る副詞句で、醉うた態度の奇怪な意と、潮海のほとりで腐れ合ふことの奇怪な意とに言うたもの。「あやし」の「あや」は、驚いて嘆く聲、「しく」は形容辭、凡て奇妙なこと、不思議なことなど、世の常ならぬ事にひろくいふ言葉。

【通釋】
廿三日、八木康敎といふ人がある。此人は國司の廳に何時も屹度出仕して使はれるといふ程度の人でもなかつた。この人こそ眞の正しい心で、送別の宴を開いた。この國の人々の心の習はしとて、今はこれ限り別れると言うて、お別れに顏も出さなくなるのに、國司がらのよいからであらうか、人情のある者は國人のてまへをきまりわるく思はずに、見送りに來た。これは餞別の品物を貰つたからとて、讃めるのでもない。

○あざれ。字鏡「膾、魚肉爛也、阿佐禮太利」魚肉などの腐ること、又は戯れる意。源氏帚木「手な殘い給ひそなど、いたくあざれかゝれば」は、戯れる意。爰は一語兩義の語をもつて、海邊で戯れたことを、鹽といふものは腐爛を防ぐものであるのに、奇怪にも潮海の邊で腐り合うたと、諧謔を用ゐたもの。この諧謔を弄する下心から、「海のほとり」と言ふを、特に「潮海」と言うたのだ。

二十三日　八木の康敎といふ人あり、此の人、國にかならずしもいで使はるゝ人にもあらざりき。これぞたゞしきやうにて、うまのはなむけしたる。守がらにやあらむ、國人の心の常として、今はとて見えずなるを、心ある者は、恥ぢずになむ來ける。これは、物によりてほむるにしもあらず。

【語釋】
○八木の康敎。傳不詳。一本に「山の康敎」とある。
○國にかならずしも云々。國司の廳に、いつもきつと出仕して、使はれる人ではない。「いで使はる」は、出で仕へる意、「仕へ」といふは、「使はれ」の約。一説に「いで」は「率て」の誤であると解いてゐる。
○たゞしきやうにて。眞の正しい心で。義理や形式的ではないのをいふ。一説に「禮儀正しく」の意に解いてゐる。
○守がらにやあらむ。國守のよろしいからであらうか。「がら」は、性質・狀況・品格などの意の接尾語。此句は下の「心あるものは恥ぢずになむ來ける」に連る副詞句。一説に此句を直に「見えずなる」につゞく副詞句と見て、國守柄のわるい爲であらうかと、紀氏自らの謙遜の詞に解してゐる。然しさう解いては、「國人の心の常として」といふ句と矛盾する。國人の人情の常であるならば、特に國守のわるい爲といふ理由が成り立たない。また代々の國守のわるい結果、國人の人情がかく浮薄になつたものとすれば、紀氏自らの謙遜ではなく、寧ろ滑越の暴言である。思ふに爰は、「心ある者は恥ぢずに來た」事について、紀氏自ら輕い誇りを感じ、つい口を辷らかしたもので、老人の稚氣を表はしたもの。
○今はとて。今はいよ〳〵別れると言うて。
○見えずなるを。お別れに顏を出さなくなるのに然るに。一本「見えざなるを」とある。「見えずあるなるを」の略。

【通釋】
廿四日、講師が祖道の宴を張りにお出でなされた。上・中・童まで、あらゆる人々が醉ひたはけて、目に一丁字のない者が、足だけは十文字に踏んで遊ぶ。

○心ある者。人情のある者。
○恥ぢずに。國人一般の風習に背いて、見送りに來るといふ事をば、きまりわるく感じないで。
○物によりて。餞別の品物のために。

二十四日　講師うまのはなむけしに、いでませり。ありとある、かみ、しも、わらはまで醉ひしれて、一文字をだに知らぬ者しが、足は十文字にふみてぞ遊ぶ。

【語釋】
○講師。僧侶の職名。昔諸國にあつて、其國の僧尼を統べ、佛教を講說する事を掌る僧。文武天皇大寶二年に、諸國に國師を置いたのがその始めで、最初は國師と言うたが、寶龜十四年に講師と改めた。
○ありとある。有る限りの。すべての。
○わらは。和名抄「禮記云、童、未レ冠之稱也、和名和良波」とある。男女の十歲前後の者をいふ。爰は召使ひの子供をさすのであらう。

【通釋】
廿五日、國司の官舍から、招待狀をもつて呼びに來た。招かれて行つて、終日終夜、色々と管絃の遊びなどするやうで明けてしまつた。

○醉ひしれて。酒に醉うて正氣を失ひ心のうつけること。「しれ」は、癡で、馬鹿なこと。竹取に「心ち唯しれにしれてまもりあへり」とあるも、魂のうつけて愚鈍になること。
○一文字をだに云々。文字を一字も知らない者が。「者しが」の「し」は强めの助詞。
○足は十文字に云々。足もとの亂れてゐるのをいふ、今の千鳥足などいふに同じい。目に一丁字ない者が足だけは十字形に踏んで遊ぶといふので、例の駄洒落である。
○遊ぶ。普通、管絃の遊びをいふのであるが、爰は、踊つて遊ぶのである。

二十五日　守の館より、よびに文もて來たれり。よばれて至りて、日ひと日夜ひと夜、とかく遊ぶやうにて明けにけり。

【語釋】
○守の館。新任の國守の舍宅。
○日ひと日。終日。ひねもす。
○夜ひと夜。終夜。夜もすがら。

【通釋】
廿六日。今日もやはり、國司の官舍で、御馳走をし騒いで、召使までに物を與へた。漢詩を聲に出して吟じた。和歌をば、主人も客もその他の人も詠み合うた。漢詩はこゝに記さない。主人なる新任の國守の詠んだ歌。

都出でゝ君にあはむと來しものをこし甲斐もなく別れぬるかな

と詠んだから、都に歸る前任の國守の詠んだ歌。

しろ妙の浪路を遠く行きかひてわれに似べきは誰ならなくに。

他の人々の歌もあつたが、すぐれた歌もなからう。色々と歌など詠んで、前任の國守も、新任の國守も、共々に階から庭におりて、二人とも互に手を握り合うて、醉うて愉快さうな話をして退出した。

○さかく。色々と。
○遊ぶやうにて。管絃の遊びをする樣子で。

二十六日　なほ守の館にて、あるじしのゝしりて、をのこまでに物かづけたり。からうた聲あげていひけり。やまと歌、あるじもまらうどもこと人も、いひあへりけり。からうたはこれには書かず。やまと歌、あるじの守のよめりける、

都いでゝ君にあはむとこしものを
　こしかひもなく別れぬるかな

となむありければ、かへる前の守のよめる、

しろたへの波路をとほく行きかひて
　われに似べきはたれならなくに

こと人々のもありけれど、さかしきもなかるべし。とかくいひて、前の守も今のももろともにおりて　今のあるじも前のも、手とりかはして醉言にこゝろよげなることとして出でにけり。

【語釋】
○なほ。今日もやはり。
○あるじし。饗應し。「あるじ」は、主人のこと、轉じて、主人となつて酒肴をさゝのへ馳走すること。
○をのこ。召使。從者。ここは紀氏の召使をさしていふ。
○物かづけたり。物を與へた。「かづく」は、裝束を人に與へる時にいふ詞で、そのもとは與へる人の肩に懸けて與へたからかく言ふのであらう。昔、歌舞遊宴佛法の儀式の後當座の報酬として與へる物品を「かづけもの」といふも、被物の義で、元は衣服を肩にかけて與へたからの名である。伊勢「女の裝束かづけんとす」源氏須磨「御衣どもかづけさせ給ふを生ける甲斐ありと思へり」一説に「今日もやはり守の館にてもてなし饗應し、そのもてなしも丁寧なりければ、此方よりも、上中の人をはじめ、それ〴〵從者どもにまで物つかはしたり」と解いてゐる。

○からうた。漢詩。
○まらうど。稀人（まれひと）の音便で、客のこと。
○こと人。主人・主賓・以外の其席にゐる人々。
○都いでゝ云々。自分は京都を出でゝ、君に會はうと思つて來たのに、來たしるしもなく、すぐに別れて終ふことである、それが悲しい。「來し」といふ語を疊れて、語路を圓滑にし、なだらかに率直に詠んでゐる。眞情が見えてゐる。
○しろたへの云々。白浪の海路を遠く往來して、自分の境遇に似る筈の人は、誰でもない、貴君であるのに、然るにその貴君に別れるのは名殘惜しいとの意。境遇の類似に一種のなつかし味を感じて惜別の情を述べたもの、末の句の「われに似べきは誰ならなくに」といふ言ひ方に貫之の理屈ぽい癖が見えてゐる。「しろたへ」は、白布（しろたへ）で、穀の皮の纖維で織つた布。「しろたへの」は、衣・袖・袂・裳・領布・紐・帶などの枕詞。爰は、「白い」といふことの譬喩に用ゐたもので、「しろたへの波路」は、白波路といふに同じい。古今集「わたつみのかざしにさせる白妙の浪もてゆへる淡路島山」萬葉集、「春過ぎて夏來たるらし白妙の衣乾したり天の香具山」「眞澄鏡照るべき月を白妙の雲か隱せる天つ霧かも」などあるは、白浪・白衣・白雲の意で枕詞ではない。「われに似べき」を、諸註は、「恐しい海路を過ぎて來て、つらい目にあふ」その點が自分に似てゐるといふ意に解いてゐるが、單に海路の往來といふ點のみでなく、廣く同國の國守といふ點に境遇の類似を見出して言うたものであらう。「なく」は打消の助動詞「ぬ」の延音。
○さかしき。すぐれた歌。「さかし」は、記に「明達」「叡智」の字をサカシと訓み。また「賢女」をサカシメなど訓んでゐる如く、愚癡の反對で、智深く賢きをいふ語。
○もろともにおりて。諸共に、館の階から庭におりて。
○醉言。醉うていふ言葉。
○こゝろよげなることして。愉快さうな話をして。「こと」は「言」の意。お互に未來の祝福を言ひ合ふのであらう。
○出でにけり。國守の館を退出した。

【通釋】大津から浦戸を目がけて漕ぎ出る。都で生れた女の兒が、この土佐の國で急に亡くなつたから、昨

二十七日　大津より浦戸（うらど）をさして漕ぎいづ。かくあるうちに、京にて生まれたりしをんなご、こゝにしてにはかにうせにしかば、此の頃のいでたちいそぎを見れど、何事もいはず。京へ歸

今の出發の準備を見ても、悲しさの情が胸一杯で何事も言ひ得ない。かうして都へ立戻らうとしてゐる間にも、その都に歸るにつけて、女の子のない事ばかりを、悲しく思うて戀ひ慕ふ事だ。一行の人々も悲しみに堪へられない。此の間に或人の紙にかきつけて出した歌、

都へと思ふも物のかなしきは
　しきは歸らぬ人のあればなりけり。

又、或時には、

あるものと忘れつゝなほ亡き人をいづらと問ふぞ悲しかりける。

と云うてゐる間に、鹿兒の崎といふ所にいたるに、守のはらから、るに、をんなごのなきのみぞ、悲しみ戀ふる。ある人々もえ堪へず。此の間にある人の書きて出せる歌、

都へと思ふも物のかなしきは
　かへらぬ人のあればなりけり

また或時には、

あるものと忘れつゝなほなき人を
　いづらと問ふぞ悲しかりける

又こと人、これかれ酒などもて追ひ來て、磯におりゐて、別れがたきことをいふ。守の館の人々のなかに、このくる人々ぞ、心あるやうにはいはれほのめく。かく別れがたくいひて、彼の人々の口網ももろもちにて、此の海邊にてになひ出せる歌、

惜しと思ふ人やとまると蘆鴨の
　うち群れてこそ吾は來にけれ。

といひてありければ、いといたくめでて、行く人のよめりける、

竿させどそこひも知らぬわだつみの
　ふかきこゝろを君に見るかな。

といふ間に、舵取ものゝ哀れも知らで、おのれし酒をくらひつれば、早くいなむとて、「潮滿ちぬ、風も吹きぬべし」とさわげば、舟に乘りなむとす。

此の折に、ある人々、をりふしにつけて、から歌ども、時に似つかはしきをいふ。又あるひと、西國なれど、甲斐うたなどうたふ。かくうたふに、ふなやかたの塵もちり、空ゆく雲もたゞよひぬとぞいふなる。こよひ浦戸にとまる。藤原の言實　橘の

の崎と云ふ所に着く。新任の國守の兄弟や他の人人など、誰も彼も、酒など携へて後につゐて來て、舟から磯邊におりて居て、別れの惜しい事など言ふ。國司の官舍の人々の中で、この後を慕うて來る人々こそ、人情のあるやうに、舟の人々からほのかに噂される。か樣に別れ惜しく言うて、彼の人々が、この海邊で口重くうなりだした歌、

惜しと思ふ人やとまる
　と芦鴨のうちむれてこそわれは來にけれ。

と詠んでゐたから、大層ひどく感心し褒めて、歸り行く人の詠んだ歌、

竿させどそこひも知らぬわだつみの深き心を君に見るかな。

と詠んでゐる間に、舵取は人情も知らないで、自分だけが酒を飲んだから、早く行かうとて、「潮が滿ちた、風も吹くであらう」とせきたてるから、舟に乘つて終はうとする。此時、其場に居る人人が、さうした折に應じて、漢詩などの、似合はしいのをうたふ。かくうたふので、その美聲に感動して、舟屋形の塵も散り、空ゆく雲も歩みを止めて漂うて終ふ程であるといふのだ。今晩浦戸に淀泊する。藤原言實、橘季衡（すゑひら）、こと人々追ひ來たり。

【語釋】

○大津。土佐國長岡郡、國分川の南岸に在る。

○浦戸。土佐國吾川郡、浦戸灣の入口に在る。

○かくあるうちに。このやうに都へ戻らうとしてゐる間にも。此句は下の「悲しみ戀ふる」につゞく副詞句。

○こゝにして。土佐國で。「此處にて」といふに同じであるが、たゞ「此處」を強くとりたてゝ言ふ爲に、「し」といふ強めの助詞を添へたもの。萬葉集「旅にして物戀（こほ）しきに山したの朱（あけ）のそほ舟沖に漕ぐ見ゆ」とあるも旅といふ事を強くとりたてゝ言うたもの。

○いでたちいそぎ。出發の用意。「いそぎ」は、準備、支度。徒然草「公事ども繁く春のいそぎにとり重れて催し行はる」萬葉集「水鳥の發（たち）の急（いそ）ぎに父母に物（もの）言（は）す來（き）にて今ぞ悔しき」とあるは、支度の意。新古今集「急がれぬ年の暮こそ哀れなれ昔はよそに聞きし春かは」の歌について、美濃家裏には「すべて歳暮の歌に、いそぐとよむは來ん年の始のまうけをいとなむ事なり、春を早く來よかしと待つ事と心得るは誤也。」尾張家裏には「物語の類に元服・女御入内などやの季衡、その他の人々も、後について見送つて來た。

うの事ありて、其まうけを營むを、御いそぎといふ、體の語也。こゝはそれを用にいそがれぬといひて何の儲する事もなき也」とある。

○えいはず。言ひ得ず。悲しい情で胸も塞がつて、何事も言ひ得ないのである。

○ある人。一行の中の或人。

○都へと云々。都へ歸るのだと思ふにつけても、物悲しく感ずるのは、諸共に都へ歸らぬ、死んだ人があるからであるよといふ意で、「歸らぬ人」に、不歸客と、都へ歸らぬ人との兩意を兼ねしめたもので、かうした一語兩義の語を用ゐて、智的技巧を弄んだのが、當時の風尚の一つである。此歌は說明的の詠み方をしてゐる爲に、全體の調子が低い。「物のかなしき」は、「物悲し」と同じで、見る物聞く物につけて悲しいとの意。「けり」は詠嘆。

○あるものと云々。死んだといふ事を忘れつゝまだ存命してゐるものと思つて、矢張亡き子供を何處に居るかと尋ねるのが、悲しくあるよとの意。かうした事は、人の亡き後の實感であらうし、實感を歌つたものであるだけに、讀む人の心に迫るものがあるけれど、「あるものと」の一句は餘分のやうに思ふ。「ある」は存命してゐること、六帖「ある時はありのすさびに憎くかりき亡くてぞ人は戀しかりけり」「いづら」は、何處にあるかと問ひかける詞。枕草子に「翁丸いづ

ら、命婦の御許へ〳〵」

○鹿兒の崎。土佐國長岡郡大津村。

○守のはらから。新任の國守の兄弟。

○追ひ來て。別の舟で、後を追ひかけて來たのであらうか。或は、一方は舟、一方は磯傳ひに此處まで來たのであらうか。

○磯におりゐて。舟から磯におりてゐて。

○心あるやうに。眞情のあるやうに。

○いはれほのめく。それとなく遠廻しに噂されること。貫之一行の人々に言はれるのである。「ほのめく」は、その氣色を幽かに見せる意の詞。

○口網ももろもちにて云々。口重く歌を詠み出した事を、場所柄の海邊である所から、魚をとる口網を引くに大勢の人で引き出すのに譬へて、諧謔交りに云うたもの。口網に口の意、「もろもち」に重い意、「擔ひ出す」に詠み出す意を、それ〴〵兼ねてゐる。口網は、「今の世に、海人のしわざに引網といふありて、それに、口網・奥網といふあり。其の口網は廣さ六七尺ばかり、長さは五六十丈もあるを、海中へはへおきて、魚をとる、それを引きあぐる時に、海人ども、大勢なみ立ちて、擔ひ出だすことあり。これなるべし。歌よむこと、口重きを、

戯れに、彼の口網の おもくて、大勢の人のかゝりて擔ひいだすに譬へたりけん」（本居宣長）又一説に、「魚の名の鯢（くち）をとる網なるに、人々の口か鯢網によせていへるなるべし。鯢は今いふいしもちの類なり。もろもちは諸共に持ちあふかいへり。鯢網を口網によせ、網といふより海邊ともいひ、擔ひ出すともいへるならん」（岸本由豆流）

○惜しと思ふ云々。名殘惜しく思ふ人がさゞまるかと思つて、あし鴨のやうに群がり連れだつて、自分は後を追うて來たのであるとの意、調子が重くるしく出來てゐる、「口網も云々」と評されたのは、それが爲であらう。「蘆鴨」は、蘆邊に居る鴨で、群れ飛んでゐるものであるから、「群れ」の譬喩的枕詞としたもの、一説に求食鴨（あさりがも）の意だともいふ。

○いといたくめでゝ。甚だひどく感心し褒めて。「めで」は「愛（め）で」の意。

○ゆく人。都に歸り行く人で、貫之をさす。

○竿させど云々。竿さしても、底のはてしもない海のやうな深い眞心を、君に見ることであるの意。平凡な歌ではあるが、例の厭味のある技巧がないだけ、素直に感じられていゝ、「君に見る」といふ言ひ方が、漢文から脱化した新しい言ひ振りであらうか。上三句は、「深き」の序。「そこひ」は、「退（そ）き」の延音、遠

く離れた處をいひ、又その極みの處をいふ。「わだつみ」は、海神の名、轉じて海のこと。「わだつみ」と「つ」を濁り、又「わたつうみ」など「う」の音を入れていふは、後世誤つて用ゐられたもの。

○舵取。「かとり」「かんどり」などもいふ。船頭のこと。艫又は櫂を使ふ人。

○ものゝ哀れ。物の情趣。人情。

○おのれし。自分だけが。「し」は意味を強める助詞。

○くらひ。昔は、酒など飲む事をも、「くらふ」と言うた。

○潮滿ちぬ云々。潮も滿ち追風も吹いて、舟出するに都合のよくなつた事を言ふのであらう。萬葉集「熱田津に船乘りせむと月待てば潮も叶ひぬ今は漕ぎてな」

○ある人々。其場に在る人々。

○なりふしにつけて。舵取に促されて舟に乘つて別れようとする、その場合にとつて。

○時に似つかはしき。其折に似合しいもの。此處は、「から歌ども、折節につけて似つかはしき」とあるべきを、「から歌ども」の句を間に挿んだ爲に、重複するのを嫌はず、「時に似つかはし」と、「時に」の語を入れたもの。

○西國なれど云々。自分等の今居る所は、西國である、東國の甲斐歌を謠ふと

いふので、「舟路なれど馬のはなむけ」などいふと、同じ巧みの駄洒落である。

○甲斐うた。古今集大歌所御歌中の甲斐歌、「甲斐が嶺をさやにも見しがけゝれなく横ほり臥せるさやの中山」「甲斐が嶺を嶺越し山越し吹く風を人にもがも言傳やらむ」の二首をさす。前の歌の意は、「故郷の甲斐の嶺をはつきりと見度いものだ、然るに無情にも横はり臥して、それを遮り隱してゐる佐夜の中山である」といふので、一面には「情なく」の句に、舵取の無情を恨む意を含め、一面には、懷しい都を望むと、それは沖つ浪の千重に隱れてゐるといふ意を寄せたもの。後の歌は、「嶺を越し山を越して甲斐の山を吹く風を人にしたいものだ、さうしたなら、都の戀しい人の許に言傳をしてやらうに」との意、舵取が「風も吹きぬべし」と言うた詞をとつて、直に、その風が人であつて欲しい然らば都へ言傳を賴んでやらうといふ心持を寄せたもの、二首共に望郷の情を托してうたうたもの。

○ふなやかたの塵。歌をうたふ聲がよい爲に、船屋形の梁の塵も、それに感じて散るといふので、聲の美しいのを誇張して讃めたもの。事類全書「善歌者有虞公、發聲動梁上塵」爰は、舟に乘りゆく人達の事であるから、場合柄「船屋形の塵」と言うたもの。

【釋通】
廿八日、浦戸から漕ぎ出て、大湊に向つて航行する。此間に、以前の國守の子の山口千岑が酒やよい肴などを持つて來て舟に入れた。行きながら飲みかつ食ふ。

○空ゆく雲もたゞよひぬ。これも歌の上手なのを讃めた詞で、うたふ歌の聲調が空ゆく雲を感動させて、それを過めたとの意。列子湯問篇「薛譚學二謳於秦青一、未レ窮二青之技一、自謂盡レ之矣、遂辭歸、秦青弗レ止、餞二於郊衢一、撫レ節悲歌、聲振二林木一、響遏二行雲一、薛譚乃謝、求レ反、終身不二敢言レ歸。」
○橘の季衡。傳不詳。
○追ひ來たり。見送りの爲に、後について來たのである。

二十八日　浦戸より漕ぎ出でゝ、大湊をおふ。此の間に、早くの守の子、山口の千岑、酒よき物どももて來て、舟に入れたり、ゆく〳〵飲みくふ。

【語釋】
○大湊をおふ。「大湊」は、長岡郡と香美郡との間あたりに在る地であるらしい。「おふ」とは、風に舟を追はせる意で、其所に向つて航行すること。
○早くの守。以前の土佐の國守。
○よき物。よい肴の意。

【通釋】
廿九日、大湊に滯在してゐる。醫師がわざ〳〵屠蘇や白散、それに酒を添へて持つて來た。眞情があるやうだ。

○もて來て。持ちて來て。「もて」は「持ちて」の約。
○ゆく〳〵。行きながら。

二十九日　大湊にとまれり、醫師ふりはへて、とうそ、白散、酒くはへてもて來たり。こゝろざしあるに似たり。

【語釋】
○くすし。王朝時代の職名、當時は大寶令の制により、宮內省典藥寮に三十人、衞門府・左右衞士府・左右兵衞府に各一人・諸國に各一人・太宰府に二人を配置したもので、諸病を治療したり又は診候する事を掌る、又、諸國に置いた醫師は、醫方を醫生に教授する事をも掌つた。これは土佐國の醫師である。
○ふりはへて。わざ〳〵。古今集、貫之「春日野の若菜摘みにや白妙の袖ふりはへて人の行くらむ」とあるも、袖を振る意を、「ふりはへ」に言懸けたもの。
○とうそ。屠蘇。藍尾酒ともいふ。赤木桂心・防風・菝葜・蜀椒・桔梗・大黃・烏頭・赤小豆・等を混和して製つたもので、絳の袋に盛り、酒中に入れて飲む。之を飲めば、邪風毒氣をさけ、瘟疫にかゝらぬと云ひ傳へ、嵯峨天皇の弘仁年間よ

り起り、爾來、上下一般に正月元日の佳儀に用ゐた。

○白散。屠蘇の類で、神明白散ともいふ。白朮・桂心・桔梗・細辛・等を調合したもの、歳首に酒に浸して之を飲むと、一年の邪氣を避け齢を延ぶといふ。公事根源正月一日供二御藥一條に、「一献に先づ屠蘇を酒に入れて藥子に飲ましむ……二献には神明白散を供す」とある。

○志あるに似たり。厚い志があるやうだ。「似たり」は、何々のやうだの意。確かに親切心があるかどうかは斷定出來ないが、それらしく見えるといふ意。

元日　なほ同じとまりなり。白散を、あるもの夜の間とて、ふなやかたにさしはさめりければ、風に吹きならさせて、海に入れて、え飲まずなりぬ。いもも、あらめも、齒固もなし。かうやうの物なき國なり。求めしもおかず。たゞ押年魚の口をのみぞ汲ふ。此の汲ふ人々の口を、押鮎もし思ふやうあらむや。けふは京のみぞ思ひやらるゝ。「九重の門のしりくめなは、なよしのかしら、ひゝら木らいかに」とぞいひあへる。

【通釋】元日。今日も矢張同じ泊りに碇泊してゐる。白散を或人が、夜の間だけと云うて、舟屋形に挿んで置いたから、風に吹かれ〳〵させて、その結果海に吹き落させて、飲む事が出來なくなつた。芋もあらめも齒固もない。本來この樣なものゝ無い國である。だから、求めても置かない。たゞ押年魚の口だけを汲ふ。この汲ふ人々の口を、もしや押年魚が、好きな口、嫌ひな口と言ふやうに思ふことがあらうか。今日は都ばかり想像される。「宮門のしりくめ繩や、なよしの頭や、ひゝら木などどんなであらうか」と評判し合うた。

【語釋】

○夜の間とて。夜の間だけと云うて。

○ふなやかた。舟の上に設けた屋形。唐韻云「篷庫、和名布奈夜加太、舟上ノ屋也」

○風に吹きならさせて。風に吹かれる事に馴れしめての意で、風に吹かれ〳〵させること。一本に「風に吹き流させて」とある。風に吹かせて海に吹き落させること。又、一本に「風に吹き無させて」とある。

○いも。多分、自然薯のことであらう。この芋は大饗の時の「いもがゆ」などにも用ゐた。

○あらめ。「め」は、海藻中の食用となるべきものゝ總名。和海藻・稚海藻・滑海藻などある。滑海藻は、ひろめの類で、葉は廣くて長く、色は黑く茶色がゝつてゐる。

○齒固。古、正月元旦の日に、長壽固齢の祝として食ふ、大根・押鮎・朮串刺・猪鹿の肉等をいふ。後には、猪鹿の代りに、雉・鳴を用ゐた。花鳥餘情「齒固は元旦の日の事なり、齒はよはひと訓めり、齒固はよはひを固むる心なり云々」

○押年魚。鹽押にした年魚。「押年魚の口をのみぞ汲ふ」とは、乾した年魚は固

い爲に、頭から食ふに齒も立たないので、幾度となく嘗め食ふさまを戯れて云うたもの。

○押鮎もし思ふやうあらむや。押鮎に若し心があるならば、好きな人の口とか好かぬ人の口とか言ふやうに、何か思ふ事があらうかといふので、「口を汲ふ」といふ事から戯れて言うたもの。

○思ひやらるゝ。想像される。「るゝ」は、動作の自ら起つて止められぬ意の助動詞。

○九重の門。宮城の門。「九重」は、禁裏のこと、天に九天あるに擬して宮城には九門があるといふ所から、九重といふ。楚辭「豈不二爵陶而思レ君兮、君之門以二九重一」

○しりくめなは。しめ縄のこと。汚穢を隔てるに用ゐるもので、門戸や社殿の四周に引き繞らす。古事記傳、「尻は藁の本をいひ、久米は許米にて、藁の尻を斷去すて、さながら許米置たる縄なり、書紀に端出之縄と作て此云二斯梨倶梅儺波一とあるにて知るべし、端出とは斷ざる藁の尻の出たる由にて、卽後世の志米縄の狀なり」眞丈雜記「しめ縄の事、藁にて左縄になふなり、なひながら、所々に七五三の藁を下ぐるなり、三筋下げて間を置きて五筋下げ、又間を置きて七筋下げ、又間を置きて三五七、三五七とさげるなり、縄の兩端をば切り揃ふる事なし、其のまゝ置くなり、是れ取りつくろはず直なる姿なり、七五三の藁の間々には、ゆふしでを下ぐるなり、ゆふしでをしでと許りも言ふなり、ゆふしでは紙を▥如レ此切目を入れて、眞中を取りて上へ折り上ぐれば▥如レ此なるなり、紙二枚重れて切るなり云々」

○なよし。鰯のこと、「ほら」の小さなもの。

○ひゝら木。木犀屬の常綠樹。葉は厚く光澤があり、鋭い鋸齒を供へてゐる。鰯の頭や柊を矢張しりくめ縄に挾んで飾つたものであらう。柊は常綠樹で、嚴冬に雪をも消す勢があり、「なよし」は、名吉で、出世の魚であるから、共に緣起を祝うて歳首の飾に用ゐたのである。

【通釋】二日。やはり大湊に碇泊して居る。講師が肴や酒を贈り屆けた。

二日　なほ大湊にとまれり。講師もの酒おこせたり。

【語釋】

○とまれり。泊つてゐる。「り」は完了の助動詞、四段活用の動詞の已然形、サ行變格の未然形にのみ連る。

○もの酒。「もの」は、それと直接に指さず漠然と言ふ詞で、爰は「酒」に對して

【通釋】
三日。同じ場所にゐる。このやうに海の暴れるのは、もしや涙や風が、しばしとゞまれと、矢張別を惜む心があつてするのであらうか。待遠しい事である。

着をさして言うたもの。

三日　同じ所なり。もし、風浪のなほしばしと惜む心やあらむ。こゝろもとなし。

【語釋】
○風浪のなほしばしと云々。心なき風や涙が、暫く逗留してゐれと、やはり別を惜しむ心があつて、してゐるのであらうか。「しばしと」は、「しばしあれと」の意。「なほ」は、直接「しばし」に連るのではなく、「惜む心やあらむ」につゞく副詞であらう。「もし、なほ、風浪の云々」とあれば紛はしくないが、斯くしては副詞が二つ重なる所から、かうした言ひ方をした爲に、不明瞭なものになつたのであらう。玉箒に、「なほ に三ツの 差別 あり、一にはまだの意、二には俗語やはりといふ意。三にはいよ〳〵の意也、此うちにまだとやはりは相通ずる所も多し、又いよ〳〵の意に用る事は、後世の事にて、古き歌には見えず、古歌にまだの意やはりの意によめるが、ふときゝては、いよ〳〵の意と思はるゝが多き故に、中頃より紛れてそれらをいよ〳〵の意と見るから自歌にも其心によむ事出來たるなり。頓阿の頃になりては、其意によめるもいと多し。然

【通釋】
四日。風が吹くから出發し得ない。昌連が酒や食物を進上した。この樣に物を持つて來る人に、ただでは居れないで返禮をしようと思ふが、僅かの返禮もさせる品物がない。賑やかなやうではあるが、内心氣が引けるやうな感がある。

れども又まだの意やはりの意なるも多し、然るを近代の人はいよ〳〵の意を本義と心得る故に、まだの意の猶をも、やはりの意の猶をも多くは誤ていよいよの意とせり、よく古歌を見知らざれば紛れ易き事多し」

○惜む心。別を惜しむ心。

○心もとなし。待遠に思ふこと。待ちきれないで心のいられること。玉小櫛「すべて此詞は物の飽かぬ事あるを、かくあれかしと願ふやうの意なり、遲きを待つことにいふも其意なり。皆俗にいふことは少しことなり」

四日　風吹けば、え出で立たず。昌連（まさつら）、酒よき物たてまつれり。かうやうに物もて來る人に。なほしもえあらで、いさゝけわざせさす物もなし。にぎはゝしきやうなれど、まくるこゝちす。

【語釋】
○昌連。傳不詳。
○酒よき物。酒とよい食物。
○たてまつれり。献上した。「たてまつる」は、「たて」と「まつる」との二つを重

【通釋】五日、風や浪が止まぬから、今日も矢張同じ場所に居る。人々がしつきりなしに見舞に來る。

れて出來た語、「たて」も「まつる」も、共に物を獻上すること、大神宮儀式帳「佐古釧五十鈴の宮に御食たつと」は、御食を奉るとての意。爰は、本文の記者を女に擬してある爲に、貫之を第三者の地位に置いて、敬語を使つたもの。

○なほしもえあらで。何もせずには居られないで。「なほ」は、默の意。事を起したてる事なくたゞにあること。萬葉集「久方の天路は遠しなほなほに家に歸りて業をしまさに」は、かれこれと言ふ事なくの意。また、「なほ人」などの「なほ」の如く、尋常の意にも用ゐる。「しも」は意味を強める助詞。此句の次に「何か返禮をしようとは思ふが」といふ意の語を補ふ。

○いさゝけわざせさす物。僅かの返禮をさせる品物。

○にぎはゝしき云々。人々が見送りに來て、酒を飲み物を食ひなどして、賑やかなやうではあるが、先方に對して氣が引けるやうな心持がする。

五日　風浪やまねば、なほ同じ所にあり。人々たえずとぶらひにく。

【語釋】

【通釋】六日。昨日の通りだ。

【通釋】今日は七日になつた。同じ湊に居る。白馬の節會などを想像するけれど、しるしがない。白馬は見えないで、海にたゞ白浪を見ることだ。かうして居る間に、池といふ名のある土地に住む人の家から、鯉はなくて鮒をはじめとして、河の魚も海の魚も、その他のものも、長櫃に幾棹か擔ひつゞいて、持つて來た。若菜は籠に入れてあり、雉などは花の枝につけてある。若菜が今日はどういふ日

○とぶらひ。逗留の無聊を慰める爲に見舞に來るのである。

六日　昨日のごとし。

七日になりぬ。同じ湊にあり。今日はあをうまなど思へど、かひなし。たゞ波の白きのみぞ見ゆる。

かゝる程に、人の家の池と名ある所より、鯉はなくて鮒よりはじめて、河のも海のもこと物も、長櫃にになひつゞけておこせたり。若菜籠に入れて、雉など花につけたり。若菜ぞ今日を知らせたる。歌あり。そのうた、

あさぢふの野邊にしあれば水もなき

であるかといふ意味を知らせてゐる。歌がつけてある。その歌、

淺茅生の野邊にしあれば水も無き池に摘みつる若菜なりけり。

甚だ面白い。

この池といふは土地の名である。身分の貴い人が男に隨うてその土地に來て、住んでゐたのであるよ。此長櫃の品物は皆の人、童までに與へたから、腹一杯食べて、太鼓腹を打つて喜んで、同船の人々は勿論海まで驚かして、波を立てゝ終ふであらう。この樣にして、此間に出來事が多い。今日從者に破子を持たせてやつて來た人は、その名をなぜ忘れたのか。ぢきに思ひ出すであらう。此人は歌を詠まうとの下心があつてやつて來たのであつた。色々それからそれへと物語などして、その擧句「波の立つ事よ」と心配して言つて、詠んだ歌、

行くさきに立つ白浪の聲よりもおくれて泣かむわれやまさらむ

と詠んだ。その泣く聲は思ふに大層大聲であらう。持參した品物に比べて、歌はどうあらうか、感心しない。此歌を誰も彼も讃めるけれど、一人も返歌をしない。返歌の出來る人も中に居るけ

いけに摘みつるわかななりけり

いとをかしかし。

此のいけといふは、所の名なり。よき人の、男につきて、下りて住みけるなりけり。此の長櫃の物は、みな人わらはまでにくれたれば、飽きみちて、舟子どもは、腹鼓を打ちて、海をさへおどろかして、波立てつべし。かくて此の間に、事おほかり、今日わりご持たせてきたる人、その名などぞや。今思ひ出でむ。此の人、うたよまむと思ふ心ありてなりけり。とかくいひいひて、「波の立つなること」と、うれへいひてよめるうた、

行くさきに立つ白波の聲よりも
おくれて泣かむわれやまさらむ

とよめる。いと大聲なるべし。持て來たる物よりは、歌はいかがあらむ。此の歌をこれかれあはれがれども、ひとりもかへしせず。しつべき人もまじれゝど、これをのみいたがり、物をのみくひて、夜ふけぬ。此の歌ぬし、「またまからず」といひて立ちぬ。ある人の子のわらはなる、ひそかにいふ、「まろ此の歌のかへしせむ」といふ。驚きて、「いとをかしき事かな。よみてむやは。よみつべくば、はやいへかし」といふに、「まからずといひて立ちぬる人を待ちて詠まむ」とて、求めけるを、夜ふけぬとにや、やがていにけり。「そも〳〵いかがよみたる」と、いぶかしがりて問ふ。此のわらは、さすがに恥ぢていはず。しひて問へば、いへる歌、

行く人もとどまるも袖の涙川
汀のみこそぬれまさりけれ

となむよめる。「かくはいふものか。うつくしければにやあらむ、いと思はずなり。わらはごとにては何かはせむ、嫗、翁にをし

れど、この歌をばかり、稱讃して、物をばかり食うて、夜がふかくなつた。此歌を詠んだ主人は、「また參りませう」と言うて中座した。或人の子である童が、こつそりと「私が此歌の返歌をしませう」といふ。驚いて「甚だ面白い事よ。まさか詠む事が出來まい。詠めるならば早く詠めよ」と促すに「參りませうと云うて、中座した人の來るのを待ちつけて詠まう」と言うて、その人を見付けたに、夜が深くなつたからといふのか、その人はそのまゝ歸つて終つた。「一體どう詠んだのか」と、不審に思うて尋ねる。この童は返歌をしようとは言うたものゝ、恥しく思うて言はない。たつて尋ねるから、言うた歌。

行く人も止まるも袖の涙川水際のみこそぬれまさりけれ。

と詠んだ。

「このやうに巧みに讀むもんか。可愛いからさう思ふのであらうか、甚だ案外にうまい歌だ。子供の言葉では、どうしてこのやうに詠めやうぞ。老女や翁の作に擬する事が出來やう。まア兎に角よくもわるくも幸便があれば言ひ送らう」と云うて、書きとゞめて置かれたやつべし。あしくもあれ、いかにもあれ、たよりあらばやらむ」とて、置かれぬめり。

【語釋】

○あをうま。白馬節會で、正月七日に朝廷で行ふ恒例の公事。此日天皇は紫宸殿に出御せられ、左右馬寮の馬二十一頭を、南庭に引渡らせて御覽になる。馬は陽の獸、青は春の色、正月七日に青馬を見ると、年中の邪氣を攘ふといふ。此儀式の起源は明かでない、支那の帝皇世紀「高辛氏之子、以二正月七日一、恒登レ崗、命二青衣人一、令レ列二青馬七疋一、調二青陽之氣一、馬者主レ陽、青者主レ春、崗者萬物之始、人主之居、七者七曜之濟、徵二陽氣之溫一始也」とある故事などを倣うたもので、萬葉集、家持「水鳥の鴨の羽の色の青馬を今日見る人は限なしといふ」といふ歌があつて、天平寶字二年正月の作であるから、其頃には既に行はれてゐたものであらうか。昔は青馬とて白に青味を帶んだ馬を用ゐたのであるが、後世、白馬を用ゐるやうになり、文字にも白馬と書きながら、訓は矢張昔のまゝに「あをうま」と唱へて來たものである。白馬とした理由について、伴信友は、年中行事秘抄を引いて、「十節記云、馬性以レ白爲レ本、天有白龍地有白馬、卽年中邪氣遠去不レ來と云ふかたの說に、さらに據り給へるものなるべし」と言うてゐる。

○たゞ波の白き云々。白馬は見えず、たゞ白波だけが見えるといふので、白馬から白波に聯想して、例の駄洒落を用ゐたもの。

○人の家の池と名ある所より。池といふ名のある所に住む人の家から。「池」は地名で、「池と名ある所の人の家より」と言ふべきを、形容詞句を下に置いて、「人の家の池」とつられ、其人の家の池から捕つた鯉といふやうな心持を添へた諧謔である。一本に「人の野の池と名ある所より」とある。之は、「野の池といふ地名の所の人から」の意。

○鯉はなくて。池ならば鯉がある筈であるに、その鯉はなくてと、これも洒落て言うたもの。

○河のも海のも。河の魚も海の魚も。

○長櫃。長唐櫃のこと、衣服調度の類を入れる具。貞丈雜記「唐櫃に二品あり、長唐櫃と荷唐櫃（になひ）なり、長唐櫃は長持の如く長し、是は一つを二人して擔ぐ也、荷唐櫃は長唐櫃の半分にて短し、是は二つを棒の兩方にかけて、一人して荷ふ也、何れも唐櫃には是六本あり、云々」

○になひつゞけて。幾つかの長櫃を大勢で擔ひ連れて來たのである。

うだ。

○籠。和名抄「唐韻云、籠（竹籠也、和名古」

（雉など花につけたり。雉などを花の枝につけて贈つて寄越したのである。「花」とあるは、梅の花であらう。竹取物語「或山寺にびんづるの前なる鉢の、ひたぶ黒にすゝづきたるを取りて、錦の袋にいれて、造り花の枝につけて、かぐや姫の家にもて來て見せければ」「（火鼠の裘を）箱に入れ給ひて、物の枝につけて、……歌よみ加へて持ちていましたり」などあり、其他、伊勢物語にも、梅の造り枝に雉をつけて奉つた事が見えてゐ、源氏物語にも、鞍馬寺の僧都から、五葉の枝に物をつけて源氏の君に贈つた事、鳥を萩の枝につけ、又は、雉を木の枝につけて贈つた事も見え、凡て昔は、物、ことに鳥を贈る場合に、木の枝や造花の枝に附けて贈るのが禮式になつてゐたらしい。萬葉集にも「從二吉野一折二取羅生松柯一遣時、額田王奉入歌一首、み吉野の山松が枝は愛しきかも君がみ言を持ちて通はく」などあつて、手紙を松の枝に附けて贈つた趣が見えてゐる。

○若菜ぞ今日を知らせたる。若菜がはじめて今日の意味を知らせたいふので、若菜によつて始めて正月七日らしい感じのしたのをいふ。昔は正月初子の日に人々が野邊に出て子松を引き長壽延命を祝したもので、後には一種の祝日となり、朝廷では此日曲宴を催し、また若菜を供し、主上はそれを羹として聞召したものである。子の日の遊びが何時頃から行はれたものか分らないが、萬葉、家持の歌に「初春の初子の今日の玉箒手にとるからにゆらく玉の緒」といふがあるから、稱德光仁の頃は既に行はれてゐたらしい。斯の如く正月初子の日に若菜の羹を調じて食する事は早くからあつたが、正月七日に七種の若菜を調ずる事は何時頃から始まつたか詳かでない。子の日の羹の轉じたものであらう。枕草子に「七日は雪まの若菜青やかに摘み出でつゝ」「七日の若菜を人の六日にもてさわぎ」などあるから、當時は七日に若菜を調じた事が明かである。慈鎮和尚拾玉集に「今日ぞかし齊・紫菜芹摘みてはや七種のおものまゐらむ」とあつて、七種の名目が見えてゐる。公事根源に「供二若菜一。內藏寮並に內膳司より、正月上の子日。是を奉る也。寛平年中より始れる事也。延喜十一年正月七日に後院より七種の若菜を供す。……若菜は七種の物なり。齊・紫菜・芹・菁・御形・酒々代・佛の坐也。正月七日に七種の菜羹を食すれば其人病なく邪氣を除く事侍る也とぞ」とある。「若菜」は新しい菜の意。

○あさぢふの云々。淺茅の生えてゐる野邊であるから、池といふはたゞ名ばかりで、矢張野の邊りで摘んだ若菜であるよとの意で、同時に、「淺茅生の野邊」といふに、贈る人の心の荒れてゐる意味を持たせ、「水もなき池に摘みたる」と

いふに粗末なといふ意を寄せたもの、要するに野の池といふ名のある地で摘んだ若菜であるといふ事を、洒落て詠んだまでのもの。「水もなき池」は、それが地名である事を知らせる爲に、「水もなき」といふ説明句を附けたもの。「あさぢ」は、茅萱のこと、茅萱は丈高くのびらぬものであるから淺茅といふ。「なりけり」の「けり」は詠嘆の助動詞。

○いとをかしかし。甚だ面白いよと、右の歌を讃めて言うたもの。此時代は、右の歌のやうな地名に基いて、巧みに洒落て詠んだといふだけで、歌としては何の面白味もないが、かうした小才の利いた智的な技巧のある言ひ振りを喜んだものである。

○此のいけといふは云々。歌の中の「池」といふ語を説明したもの。

○よき人。身分の貴い人。右の贈物の主の素性を説明したもの。

○男につきて。夫に附き隨うて。

○飽きみちて。十分に腹一杯食べて。

○舟子。舟を操る人。網を引く者を網子（あこ）、田を作る者を田子、織をとる者を織子（かこ）、獵に立つ者を獵子（かりこ）、馬を使ふ者を馬子（まこ）などいふ類。

○腹鼓を打ち。此語は、十八史略「有二老人一含レ哺鼓レ腹擊レ壤而歌」とある如く、食に飽きて太平を樂しむ狀。爰は、滿腹の太鼓腹を擊つて喜ぶのである。

○海をさへおどろかして。同船の人々は言ふまでもなく、海までも驚かして。「さへ」は、あるが上に更に事の加はる意の助詞で、「海をさへ」と云ふ句に、船中の人々は勿論と言つた意味が含まれてゐる。所謂、複雜が單純化した言ひ方である。

○事。出來事。

○わりご。中に仕切りのある、辨當箱の一種、和名抄「擇、俗ニ所謂破子。和利古、擇子中有レ障之器也」とある。貞丈雜記には、「わり子は、白木にて折の如くに作り、かぶせ蓋にしたる辨當箱なり、形は圓くも四角三角にも扇形にも樣々風流にするなり。かぶせ蓋にて蓋も身も同じ深さなる故、兩方同じ如くなるを以てわり子と名づく。漆などにて漆らず、白木にて作り。一度きりに、かけ流しにするなり」ともある。

○持たせて。從者に持たしめて。

○その名などぞや。「その名など忘れしぞや」の略で。その名を何故忘れたのかといふ意。「など」は、古今集「やどりせし花橘も枯れなくになど時鳥聲絶えぬらむ」とある如く、疑問の副詞。諸註は、「その名などは忘れたが今思ひ出せるだ

らう」といふやうに解し、「など」を接尾語に見、「その名など」を主語にしてゐる。又一説に、「など」を「何と」の意に解し、「その名は何と云ひしか忘れたのを、今思ひ出すであらう」と解いてゐる。

○今。おつつけ。ぢきに。

○うたよまむと云々。此人の見舞に來たのは、單に別れを惜しむ心からばかりでなく、歌を讀まうと思ふ下心があつて來たのであるよ。

○とかくいひ〳〵て。歌詠む切掛けを作る爲に、色々と物語をして。

○波の立つなること。波の立つことよ。次の歌を詠む切掛けに波の事を言出したのである。歌は既に腹案があつた、その腹案をさうとは見せず、其場で突嗟の思付きで詠んだやうに見せかける爲に、その豫備的物語に波のことを語り出したのである。

○うれへ。心配すること。

○行くさきに云々。貴君の舟路の行く先に立ち騷ぐ白波の聲よりも、獨り殘されて悲しみ泣くであらう私の聲の方が、まさつて大きくあらうとの意。

○いと大聲なるべし。「行くさきに」の歌は、着想も幼稚、殊に自分の悲しみ泣く聲を大濤の聲に比較した點に虚僞があり、拵へた歌といふ感じが強く、それだけ眞實味が稀薄である。だから、これは甚だ大きな聲であらうと、揶揄ひ楽見したのである。

○持て來たる物よりは。持つて來た品物に比して。枕草子「鶯は……さまかたちもさばかりあてにうつくしき程よりは、九重の内に鳴かぬぞいとわろき」の「よりは」も、比べてはの意。

○歌はいかゞあらむ。歌はどうあらうが、あまりよくはあるまい。「いかゞ」は、危ぶむ意。

○あはれがれども。感心するけれど。これは心にはさう思はないが口先だけ讃めるのである。

○しつべき人。返歌の出來る人。

○まじれゝど。交つてゐるけれど。

○いたがり。「いたし」の語根に「がる」といふ接尾語の添うたもの、いたく思ふこと。感心すること。「いたし」は、すぐれてよい意。源氏「口おほひて居たるまみいといたし」とあるも、優れてゐる意。

○またまからず。また參りませう。「まからず」は「まからんず」で「ず」は「とす」の意。さて、「まゐる」は卑しい所から高貴な所に行くこと、「まかる」は、

高貴な所からさがることこと。王朝時代には此區別がはつきりしてゐたのであるが、爰は「まゐる」といふべきをわざと「まかる」と言うて、歌主の田舍臭い訛を見せたものである。人々が物をばかり食うて返歌をせぬので、歌主は手持無沙汰なので、不淨か何かに立つたのであらう。其時に「歸るのではない」事を斷る爲に、中座の挨拶に斯く言うたものである。一説に「まだまからず」の意にとり、未だ歸るのではないと云ふ意に解してゐる。また、「またまからず」の「また」を言葉と見ず、「この歌主また」とつゞくものとし、「まからず」だけを歌主の言葉と見て、「お暇致しませう」の意に解してゐる説もある。

○ある人。貫之をさす。

○まろ。自稱代名詞。

○いとをかしき事かな。甚だ面白い事であるよ。子供が突然返歌をしようと言うたので、果して出來るかどうか疑つて、好奇心から斯く言うたもの。

○よみてむやは。歌を詠むであらうか詠む事が出來まい。

○よみつべくば。詠む事が出來るならば。

○まからずといひて云々。ちきに參りませうと云うて、中座した人の、座に歸るのを待つて、それから詠まう。

○夜ふけぬとにや。夜が深くなつたと思つたからか。

○やがて。中座して座を起つたそのまゝ。

○いに。往くこと。立去ること。

○いぶかしがり。不審に思ふ。

○さすがに。私が返歌をしませうと言うたものゝ然し。

○行く人も云々。都に歸り行く人も、こゝに止る人も、共に別を悲んで袖に落ちる涙が川と流れる事である。そしてその川の水嵩が增して、水際がいよ〳〵滿れまさる事だとの意、涙の繁く流れるのを川に譬へて涙川といひ、涙川と言つた緣で、涙のいよ〳〵繁く、はげしくなりまさるのを、「みぎはのみこそぬれまさる」と言うたもの。譬喩が大袈裟で切實でない爲に概念的になつてゐるが、かうした智的な技巧的な歌が當時の好尙に合したのである。一説に、「みぎは」に傍の意を持たせ、傍なる我々までが、もらひ泣きをして、袖が涙に濡れてゐる意にとり、或は「みぎは」に「身」を言懸け、自身の意にとり、行く人も止る人も袖の濡れる中で、此方こそ濡れまさる意だと説き、又は、袖を流れる涙川の水際は矢張袖で、袖こそ濡れまさる意だと説いてゐるが、さう讀み過さずに、涙川の緣で、たゞ涙の甚しく落ちるのを言うたものと見るがよからう。

○かくはいふものか。このやうにうまく詠むものか、「ものか」は、驚き怪しむ意を表はす詠嘆の助詞。枕草子「伏し拜みて、肩に打ちかけて舞ふものか」

○うつくし。可愛いこと。萬葉集「愛しき人の纒きてし敷妙の吾が手枕か纒く人あらめや」古義に「美貌かうつくしさいふは、美麗れば人の愛賞るが故なり。然るを今の世には、うつくしきさいふを美麗き本義と意得たるは非なり」「うつくしければにやあらむ」は、可愛いからであらうかといふ意、次の「いと思はずなり」といふ句の心持を説明したもの。

○いと思はずなり。甚だ案外にうまい歌である。

○わらはごとにては何かはせむ。子供の言葉では、いかでこのやうにうまく詠めようぞ、詠めはしない。「何かは」は、いかでかはの意。諸註は「何かはせむ」を、「なにかはせむ」の意にとり、子供の作と言うても、何にしようぞ何にもならぬ、甚だ不似合で誰も信じないと解いてゐる。

○嫗翁にをしつべし。嫗や翁の作に擬する事が出來る。「おんな」は老女のこと。爰に嫗翁と言うたのは、貫之夫妻を暗にさす。「を」は強く思はせる意の助詞。萬葉集「生るれば遂にも死ぬるもの にあれば此世なる間は樂しくをあらな」「つべし」は可能の意の助動詞。

【通釋】

八日、故障があつて、矢張同じ場所に居る。今晩月は海に沒しる。これを見て、在原業平朝臣が詠んだ「飽かなくにまだきも月のかくるゝか山の端逃げて入れずもあらなむ」といふ歌が思ひ出される。もしもかの場合に業平が海邊でかの歌を詠まうならば、「波立ちさへて入れずもあらなむ」と詠んだであらうか。今その歌を想像して或人の詠んだ歌。

照る月の流るゝ見れば

○置かれぬめり。翁、卽ち貫之の手許に書きとゞめて置かれたやうだ。「めり」は、所見有（みえあり）で、ト見エルの意。推量の助動詞。

八日　さはる事ありて、なほ同じ所なり。こよひ月は海にぞ入る。これを見て、業平の君の「山のはにげて入れずもあらなむ」といふ歌なむおぼゆる。もし海邊にてよまゝしかば、「波立ちさへて入れずもあらなむ」とよみてましや。今この歌を思ひ出で、或人のよめりける、

照る月の流るゝ見れば天の河
いづるみなとは海にざりける

とや。

【語釋】

○さはる事。故障。

○業平。在原業平。阿保親王の第五子、右近衛中將であつた所から、在五中將と

天の川いづる湊は海にざりける。
と言ふのであらうか、

もいふ。六歌仙の一人。
○山のはにげて云々。古今集「惟喬の親王の狩しける供にまかりて、宿りける に、歸りて、夜ひと夜、酒のみ、物語をしけるに、十一日の月も隱れなむとしける折に、親王醉ひて、うちへ入りなむとしければ、よみ侍りける。なりひらの朝臣、飽かなくにまだきも月の隱るゝか山のはにげて入れずもあらなむ。」歌意は、何程眺めてゐても、これで十分だと思ふ事はないのに、早くも月の隱れる事よ、あの月の隱れるべき山の端が逃げて、月を入れないであつて欲しいといふので、月を親王に譬へて、親王の早くも寢所に入らうとするのを惜む意を述べたもの。
○おぼゆる。思ひ出される。
○もし海邊にてよまましかば。もし業平朝臣が、「飽かなくに」の歌を、海邊で詠んだならば。「ましかば」は、「ませば」と併んで、之は既定の條件彼は假定の條件を表はす。文の中に「ましかば」又は「ませば」とある時は、その文の終りを「まし」で結ぶことになつてゐる。
○波立ちさへて。波が立ち遮つて。
○この歌。「彼の歌」といふに同じで、業平朝臣の歌を指す。宣長云「すべてかの

【語釋】

と言ふべきをこのと言へること多し、心得置くべし、歌に是やこのとよめるも皆これや彼の也」源氏帚木「見るめこともなく侍りしかば、此さがなものを、打とけたる方にて」とあるも、彼のさがな者の意。
○照る月の云々。照り輝く月の大空を西へ西へと流れて海に入るのを見ると、天の河の流れ出る湊は矢張海であるといふ意で、天上の月が下界の海に流れ入るのから類推して、銀河も矢張流れ出る湊は、同じく下界の海であると斷定したもの、論理を弄んだ調子の低い歌である。時代の風尚ではあるが、厭味のあるのは事實だ。「流るゝ」は、月の運行を、天の河の緣で、斯く言うたもの。「みなと」は、水門で、水の出入する口。「ざりける」は、「ぞありける」の約、「ける」は詠嘆の助動詞。船の直路に「大川の湊へかゝる處を見渡せば川上より直ぐに見えわたりて、月夜ならば、まことに天の川よりつゞきて見ゆるさまなるべし。彼の出づる湊は海にざりけるとの詠を味ふれば、そのまゝよく叶ひて感情あるべし。大川の流れより、海に入るさまを心得ざれば此歌は解けざるべし云々」
○とや。とかいふ歌であるの意。

九日　つとめて、大湊より那波（なは）のとまりをおはむとて、漕ぎ出

九日、早朝大湊から那波の湊に航海しようとて漕ぎ出た。誰も彼も皆國境内は見送らうとて、見送りに來る人が數多い中で、藤原言實、橘季衡、長谷部行政たちなど、國司の官舍を出かけた日から、舟の泊てる、こゝの湊かしこの湊に、後を追うてやつて來る。此人々こそ、眞情のある人々であるよ。此の人々の眞情の深さは、此の海の深さにも劣らないであらう。この大湊からこそ今はそれらの人々と別れて漕ぎ離れてゆく。これを見送らうとて、此人たちは後について來たのだ。このやうにして漕いで行くにまかせて、海邊に殘つて居る人も遠くなつた。舟の人も岸からは見えなくなつたであらう。岸の人々にも言ひたい事があらう。舟の人々にも思ふ事があるが、しろしがない。さうではあるが、次の歌を獨語して止んだ。

思ひやる心は海を渡れ
ども ふみしなければ知
らずやあるらむ。

【通釋】

でけり。これかれたがひに、國の境の内はとて、見おくりに來る人あまたが中に、藤原の言實、橘の季衡、長谷部の行政らなむ、御館(みたち)より出で給ひし日より、こゝかしこに追ひ來る。此の人々ぞ心ざしある人なりける。此の人々の深きこゝろざしは、此の海にも劣らざるべし。

これより今は漕ぎはなれて行く。これを見送らむとぞ、この人どもは追ひ來ける。かくて漕ぎ行くまに〳〵、海のほとりにとまれる人も、遠くなりぬ。舟の人も見えずなりぬ。岸にもいふ事あるべし。舟にも思ふ事あれど、かひなし。かゝれど、此の歌をひとりごとにしてやみぬ。

思ひやる心は海をわたれども
ふみしなければ知らずやあるらむ

○つとめて。早朝又は翌朝などいふ意。枕草子「冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず」とあるは、早朝の意。同「橘の濃く青きに、花いと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなどは、世になく心あるさまになかし」とあるは、翌朝の意。

○那波。土佐國安藝郡奈半利村。

○國の境の内はとて。國境内は見送らうとて。爰に國境内と言うたのは、土佐全國をさすのではなく、國司の廳のある長岡郡の内をいふのである。萬葉集、「吉野の國の花散らふ秋津の野邊に」古義云「此は吉野は郡の名にて國にはあられど、郡郷などを國といふこと古の常なり。堺をたてゝ人の住む地をば、なべて國といひしなり」

○長谷部の行政。傳不詳。

○御館。國司の館。

○こゝかしこ。こゝの港かしこの港で、大津・浦戸・大湊などをさす。

○これより今は漕ぎはなれてゆく。大湊から今は漕ぎ離れて、見送りの人達からも別れて行くとの意。「國の境の内はとて見送りに來る人たち」に最後の別れをしてゆくのであるから、特に「今は漕ぎはなれてゆく」と言うたもの。

○漕ぎ行くまに〳〵。漕ぎ行くにまかせて。
○舟の人も見えずなりぬ。陸の人々からは、舟の人も見えなくなつたであらうといふ意を「なりぬ」と斷定的に言うたもの。
○かひなし。しるしがない。
○かゝれど。漕ぎ離れたから、如何に思ふ事があつても、言ひ送る方法がなく、しるしのない事ではあるが。
○思ひやる云々。舟の中から陸の人々を色々と想像して懷しく思ふ心は、海を渡つて通ふけれど、文をやる方法がないから、先方では自分の心を知らずに居るであらうかといふので、「ふみ」に文と踏みの意を言懸け、「渡る」の緣語とし たもの。

かくて宇多の松原を過ぎゆく。其の松の數いくそばく、いく千年へたりと知らず。もとごとに波うち寄せ、枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。おもしろしと見るに、堪へずして、或人のよめる歌、

見渡せば松のうれごとにすむ鶴は

【通釋】このやうにして、宇多の松原を過ぎてゆく。その松の數は何程多く、幾千年經過したともわからない。松の根もと毎に波が打ち寄せ、枝毎に鶴が飛び違うてゐる。面白いと思つて見るに、だまつて見ては居られないで、或人の詠んだ歌。

見渡せば松のうれごとにすむ鶴は千代のごちとぞ思ふべらなる

と云ふのであらうか。此歌は場所の景色のよいのを見るに、それよりは劣つてゐる。

このやうな景色を眺め眺めして過ぎゆくにまかせて、山も海も夕暮の色がこめて、夜がふかくなり、東西の方角もわからなくなつて、日和の事は撰取の心に一任した。男性でも船の旅になれない人は、甚だ心淋しく感じる。まして女性は舟底にうつぶして聲をたてゝ泣く。

千代のごちとぞ思ふべらなるとや。此の歌は、所を見るにえまさらず。

かくあるを見つゝ漕ぎ行くまに〳〵、山も海も皆くれ、夜ふけて西東も見えずして、てけの事かぢとりの心に任せつ。をのこもならはぬは、いとも心細し。まして女は、舟底にかしらをつきあてゝ、音をのみぞ泣く。かく思へど、舟子かぢとりは、舟歌うたひて、何とも思へらず。其のうたふ歌は、

春の野にてぞ、音をばなく、わが薄にて、手をきる〳〵、摘んだる菜を、親やまほるらむ、しうとめやくふらむ、かへらや、よんべのうなゐもがな、錢こはむ、おぎのりわざをして、せにも持て來ず、おのれだに來ず。

これならず多かれど、書かず。これらを人の笑ふを聞きて、海は荒るれど、心はすこしなぎぬ。かく行きくらして、泊に至り

て、おきな人ひとり、たうめ一人、あるがなかにこゝちあしみして、物もものし給はで、ひそまりぬ。

【語釋】

○宇多の松原。香美郡赤岡の北に兎田村といふがある。その「兎田」を昔は「うた」と呼んだものであらう。

○いくそばく。幾十許で、數の測り知れぬ程に多いのをいふ。古今集「毎に飽かず散しゝ風なれば、幾十許わが憂しさかは思ふ」爰は、「いくそばくと知らず」といふ意を、中止形を用ゐて、終りの「知らず」に應ぜしめたもの。

○もと。根もと。

○飛びかふ。飛び交ふで、飛び違ふこと。

○堪へずして。たゞ面白いと思つて見てゐるだけでは居られないで。

○舟人。舟中の人の意で、貫之自身をさす。

○見渡せば云々。見渡すと松の梢毎にとまつてゐる鶴は、松なば永久の仲間と思つてゐる樣である。淮南子「鶴千歳極ニ其游ニ」李白「花暖青牛臥、松高白鶴眠」などある。此歌は、青松の梢に白鶴の遊んでゐる光景を、主觀的理窟で說

人々はこのやうに賴りなく淋しく思ふけれど、水夫や撮取は、舟歌をうたうて、何とも思つてゐない。平氣なものだ。そのうたふ歌は、

春の野にてぞ、音をばなく、わが薄にて、手をきる〳〵摘んだる菜を、親やまほるらむ。しうとめやくふらむ。かへらや。よんべのうなゐもがな。錢乞はむ。おぎのりわざをして、錢も持て來ず。おのれだに來ず。

歌はこればかりでなく、澤山にあるけれど、書きしるさない。これらのうたふ歌を、人々の笑ふのを聞いて、海はあれるが、自分の心は少し慰んで穩かになつた。このやうに一日中航行して日が暮れて、湊に着いて、翁一人、老女一人だけが、多くの人々の中で、心持がわるくて、食物もあがらないで、ひつそりとしてゐる。

明したに過ぎぬもので、次に「此の歌は所を見るにえまさらず」とあるは、謙遜の辭でもあらうが、事實景色よりも劣つてゐる。「うれ」は「うら」の轉、草木の末又は幹の末。「べらなる」は、古今集をべらなる調ともいふ程に、平安朝の中頃一時盛んに用ゐられた語であるが、忽ちすたれて終つた。古今集「春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそ亂るべらなれ」

○くれ。暮色に蔽はれる意。

○てけ。天氣。楫取は天氣の事などよく見定めるものであるから、空模樣によつて舟の進退を取計らふ事は、凡て楫取の考に一任したとの意。

○をのこもならはぬは云々。男も船旅になれない人は甚だ賴りなくて心淋しい。

○船底にかしらを云々。船底にうつ伏してゐるをいふ。

○音をのみぞ泣く。聲をたてゝ泣く。「音泣く」「音に泣く」「音をこそ泣かめ」などと皆同じで、單に「泣く」といふ意にも、又は聲を立てゝ泣く意にもいふ。

○かく思へど。人々はこのやうに心細く思ふけれど。一本に「かく思へ」ばとある。

○何とも思へらず。何とも思つて居らず平氣である。「思へら」の「ら」は完了の助動詞「り」の未然形。

○春の野にてぞ云々。春の野で泣聲を立てゝ、薄で手をきりながら、自分が摘んだ菜を、童が持つて行つたが、親が貪り食ふであらうか、或は鮒が食ふであらうか。その昨夜の童が來て欲しいものだ、したならば錢を請求しよう。代價を拂はずに持ち歸つて、そのまゝ錢も持つて來ないし自身さへも來ない。「わが薄」を「若薄」の意に解してゐる説もある。「摘んだる」は、摘みたるの音便。「まほろ」は、貪り食ふこと、音便で「まうほる」ともいふ。「かへらや」は「かへらむや」で、嘲の文句。「よんべ」は昨夜の音便。「うなゐ」は「うなゐこ」「うなゐをとめ」などいふも同じで、王朝時代十二三才までの男女をいふ詞、當時小兒は垂髪で髪をあげないから、頂にある意であらう、宇津保に「子だちいと多く、うなゐなどさぶらふ」「おぎのりわざ」は代價を仕拂はずに物を買ふこと。一本には、「よんべのうなゐもがな、ぜに乞はむ」を「よんべの菜をそらごとをして」とある。

○これならず。これだけでなく。一本に「これなみに」とある、「この類で」といふ意。「なみ」は列で、源氏、帚木「かの中の品にとりいでゝ言ひし、この列ならむかしとおぼしいづ」同、玉葛「我がなみの人にはあらじ」などある。

○なぎ。和ぎで、穩かになること。さて爰は、海は浪高く荒れるけれど、心は心

細い思ひが收つて穩かになつたといふので、荒れる海に對して、「心は和ぎぬ」と反對の現象を取り出したのは、例の諧謔である。

○行きくらして。一日中航行して日が暮れる意。源氏、帚木「つれ〴〵と降りくらして」とあるも、雨が降つて日の暮れる意。

○おきな人ひとり。翁一人で、貫之をさす。

○たうめ。老女。後に出る「淡路のたうめ」のこと。古事記傳「和名抄に、專、日本紀云、專領二字、讀二太宇女一平佐女一、今按專訓二毛波良一、專一之義也、太宇女者、毛波良之古語也、今呼二老女一爲二太宇女一、とある中に、呼二老女一爲二太宇女一、と云る、是れ太宇女のたゞしき心也。……源氏物語に伊賀たうめともあり、又狐をたうめと云るこゝも物に見えたり、そは老女より轉れるなるべし、老女を多宇女と云は、姥の轉れるにやあらむ云々」

○あるがなかに。大勢の人々の中で。

○こゝちあしみして。船酔の爲に心持惡く感じて。「惡しみして」の「み」は、「雖みして」「重みして」などいふ「み」と同じ用ゐざまで、「惡しんじて」といふ意。

萬葉集「さゆり花後も會はむと思へこそ今のまさかも愛しみすれ」とあるも、愛しんずれといふ意。

【通釋】
十日、今日は此那波の碇泊所に滯在した。

【通釋】
十一日、曉に出帆して、室津に航行する。人が未だ寢て居て夜深いから、海の樣子も見えない。たゞ月の光で東西の方角を知つた。かうしてゐる間に夜が明けて、皆手水をつかひ、食事などをすましして晝になつた。今丁度羽根といふ所に着いた。幼い童が此土地の名を聞いて、「羽根といふ所は、鳥の羽のやうであるか」と尋ねる。まだ幼い子供の事であるから、人々が笑ふので、件の女の童が次の歌を詠んだ。

まことにて名に聞く所
翼根ならば飛ぶが如く
に都へもがな。

男も女も、どうぞして早く都へ歸りたいものだと思ふ考があるから、この歌がよいといふのではないが、その心持に共感して、忘れない。

此羽根といふ所のことをいふ。まだをさなきわらはの事なれば、人々笑ふに、ありける女童なん、此の歌をよめる。

まことにて名を聞く所はねならば
飛ぶがごとくに都へもがな。

男も女も、いかでとく都へもがなと思ふ心あれば、この歌よしとにはあらねど、げにと思ひて、人々忘れず。

此の羽根といふ所とふわらはのついでにぞ、また昔の人を思ひ出でゝ、いづれの時にか忘るゝ。今日はまして母の悲しむ事は、下りし時の人の數たらねば、古き歌に「數はたらでぞかへるべらなる」といふ事を思ひ出でゝ、人のよめる、

世の中におもひあれども子を戀ふる
おもひにまさるおもひなきかな。

○物もものし給はで　食事も召し上らないで。「ものし」は、爲すといふ意の詞で、そのことを漠然といふ時に用ゐる。
○ひそまり。靜かになること。爰は、打ち沈んでひつそりしてゐること。

十日　けふは、此の那波の泊にとまりぬ。

【語釋】
○とまり。船の行き着いて泊る所。此日の條に限つて特に「けふは」といふやうに、その日を取り立てゝいふ意の詞が用ゐてゐるのは、此日の碇泊がこれまでとは違つて風浪の爲でなく、船碎を癒す爲である意を表したものであらう。

十一日　曉に舟を出して、室津をおふ。人みなまだ寢たれば、うみのありさまも見えず。たゞ月を見てぞ、西ひんがしをば知りける。かかる間に、みな夜あけて、手洗ひ例の事どもして、晝になりぬ。今しはねといふ所に來ぬ。わかきわらは、此の所の名を聞きて、「羽根といふ所は、鳥のはねのやうにやある」と

尋れる童の序に、また亡き子供の事を思ひ出して、何時も忘れる時がない。今日はまして母の悲しむ事は格別で、先年任國に下つた時の人數に數がたりないから、古歌に「北へ行く雁ぞなくなるつれて來し數は足らでぞ歸るべらなる」とある歌を思ひ出して、人の詠んだ歌。

世の中に思ひあれども子を戀ふる思ひにまさる思ひなきかな。

と詠みつゝ悲しむ。

といひつゝなむ。

【語釋】

○人みなまだ寢たれば云々。「人みなまだ寢たれば」は、まだ夜の深い意味を表したもので、夜が深いから、海の樣子もわからないといふ意。海の樣子のわからないといふのは、自分達の舟の位置がどの邊に居るのか解らぬといふのである。一説に「船中の人はまだ寢てゐたから、屋形の戸も開けないで、それが爲に海の樣子も見えないのだ」と解き、次の「たゞ月を見てぞ」といふを、「うはやの軒から落月のさし入るを見て」の意であると解いてゐるが、人の寢てゐる事と屋形の窓を閉めておく事とが、絶對的の關係にあるものと見るのが變である。のみならず、水平線上に近い落月の光がうはやの軒からさし込むといふのも實際にあり得ない事だ。

○たゞ。是のみの意。新古今集「人すまぬ不破の關屋の板庇荒れにし後はたゞ秋の風」とある「たゞ」と同じで、月を見て東西の方角を知つただけだといふ意。或は、源氏、桐壺「たゞ五六日のほどにいとよわうなれば」とある「たゞ」と同じく、僅かに、たつた、などいふ意か。

○手洗ひ。手水をつかふこと。

○例の事ども。身じまひや食事をし、又神佛を禮拜すること。

○今し。「し」は其事を特にとりたてゝ言ふ意の助詞で、今丁度などいふに同じい。

○はね。安騎郡。羽根川の川口に在る。

○わかきわらは。幼い童。「わかき」は、書紀などに幼の字を和訓志と訓み、凡て物のまだ成りとゝのはないのをいふ。萬葉に三日月を若月とも書いてゐるのは、月の形の滿ちとゝのはない意で、若の字を書いたもの。平安朝時代の物語には人の幼稚いのを「わかし」と言うてゐる。又、この語は物の壯りに美麗い意の美稱にも用ゐる、若年神、若山咋神などの「若」がそれである。

○ありける女童。以前の女童。件の女童といふに同じい。「行く人も云々」の歌を詠んだ童を指してゐるので、「わかき童」とあるとは別の人である。だから特に「女童」と言ひ別けたのだ。

○まことにて云々。「羽さいふは鳥の羽のやうにやある」と尋れたが、その言葉が眞實で、羽といふ此土地が眞實の羽根であるならば、その羽根をかりて飛ぶやうに早く都へ歸り度いものだとの意、所の名に鳥の羽の意を言懸け、鳥の羽に託して歸京の心持を述べたもの、一寸した思ひ付きの歌である。「まことに

て」は、「羽といふは云々」といふ間の言葉を受けて、それを假に肯定して言うたもの。「飛ぶ」は羽根の縁語。「もがな」は願望の意の助詞。一說に「まことにて」を「はねならば」の副詞として、名に聞く所が名實一致して事實羽根であるならばといふ意に解く說もある。

○いかで。どうぞして。願ふ意の副詞。

○げにと思ひて。もつともと思つて。

○ついでに。連つて。つゞいて。羽根といふ所の事を尋れた童の無邪氣な可愛い態度に關聯して亡兒を思ひ出したのである。

○昔の人。亡き子供。

○いづれの時にか忘るゝ。何時になつたら忘れるか、忘れる時はない。「か」は反語。

○今日はまして。貫之が京を發つて土佐國へ下つたのは、五年前の延長八年十一月十一日であつたから、その十一日といふ日には、特に昔の出京の時の事が思出され、國で死んだ子供の事も殊になつかしく慕はれるのである。だから「今日はまして」と云うたもの。

○數はたらでぞ云々。古今集、羇旅歌、題しらず、よみ人知らず。「北へ行く雁ぞ鳴くなる連れてこし數は足らでぞ歸るべらなる。」とあり、左註に「此歌は或人男女諸共に人の國へまかりけり。男まかりいたりてすなはち身まかりにければ、女ひとり京へかへりける道に、歸る雁の鳴きけるを聞きて詠めるとなむいふ」とある。歌意は、北の方へ歸つてゆく雁がなく事よ、あれは故郷から連れ立つて來た仲間が、中途で死に失せなどして、來る時よりは數が不足して歸るのであるからであるやうだといふので、伉儷を失うて歸る吾身の悲みを、雁に託して詠んだもの。

○思ひ出でゝ。此所、文意が曖昧で、本文の文字通りに解釋すると、古歌を思ひ出して或人が次の歌を詠んだといふので、古歌を思ひ出した人と次の歌の作者とは同一人であり、且古歌を思ひ出す事が、次の歌を詠む道火線になつてゐる。然るに古歌と次の「世の中に」の歌とは何等思想上の聯絡がない。のみならず上に「母の悲しむ事は」とあるのを見ると、「下りし人の云々」は母の悲しむ事の理由を說明したものでなければならぬ。然るに「思ひ出でゝ」から、直に「人のよめる」と矢張母でなければならぬ。さうすると古歌を思ひ出した人はいふに連つて、「母の悲しむ事は」といふ係りに應ずる結びの文句がない。要するに此所に脫文でもあるのか。假に補足するならば「思ひ出でゝ甚しく、かく

て人のよめる」とでもいふ意味であらうか。舟の直路には、「思ひいでゝ」の下に「詠める。つれて來し數やたらぬと天つかり同じ思ひに鳴き渡るらしとぞいへる。また、そを聞きてある」といふ文を補うて解いてゐる。

○人のよめる。「人」は貫之をさす。

○世の中に云々。世の中には色々の物思ひがあるが、亡き子供が戀しく思ふ思ひ以上の物思ひはないよといふので、「思ふ」といふ語を何遍か繰返して、文字上の遊戯を試みた、極めて概念的の歌である。萬葉集「秋の野に咲ける秋萩秋風に靡ける上に秋の露置けり」後撰集「思ふ人思はぬ人の思ふ人思はざらなむ思ひ知るべく」六帖「心こそ心をはかる心なれ心の仇は心なりけり」など皆同じ巧みの歌で、文字の遊戯に過ぎない。

○いひつゝなむ。「いひつゝなむ悲しむ」といふ意。

十二日　雨降らず。文時、維茂が舟のおくれたりし。奈良志津より室津に着きぬ。

【語釋】

○文時・維茂。二人とも傳不詳。紀氏の屬官であつたらう。一説に、文時は貫之の子の時文のことであらうと。

○おくれたりし。文時・維茂の乘つた舟の一行よりおくれてゐたのが。「し」は過去の助動詞「き」の連體形。斯く連體形で句の切れてゐるのは、それが主格である事を示すので、その句の次に「ので」「のが」といふ語を補うて解く。

○奈良志津。室津の西北約半里の所に在る。

【通釋】

十二日、雨が降らない。文時・維茂の、一行からおくれてゐた舟が、奈良志津から室津についた。

【語釋】

十三日の曉に少し雨降る。暫くたつて止んだ。男や女が誰も彼も湯をつかはうと言うて、舟から近邊の恰好な場所におりてゆく。海を眺めると、

雲もみな波とぞ見ゆる
蜃もがないづれか海と
問ひて知るべく。

と詠んだ。

さて月の十日過ぎであるから、月が風情がある。

十三日の曉に、いさゝか雨降る。しばしありてやみぬ。男女これかれ湯あみなどせむとて、あたりのよろしき所におりて行く。海を見やれば、

雲もみな波とぞ見ゆるあまもがな
いづれか海と問ひて知るべく

となむ歌よめる。

さて十日あまりなれば、月おもしろし。舟に乘りそめし日より、舟には、紅(くれなひ)こく、よき衣着ず。それは海の神におぢてといひて、

舟に乘り初めた日から、舟では紅色が濃く、立派な着物を着ない、それは海神を怖れて、身なりをやつすのだ。そのやうになりふりをかまはぬかちは、この上、體裁を顧みる必要はないと言うて、何かその邊の芦陰にかこつけて、「ほやのつまのいずしすしあはび」を、不本意な脛まで裾をまくりあげて、見せた。

何の蘆陰(あしかげ)にことづけて、ほやのつまのいずし、すしあはびをぞ、心にもあらぬ脛(はぎ)にあげて見せける。

【語釋】

○湯あみ。湯を浴びて身を洗ふこと。

○あたりのよろしき所。近邊の湯浴(ゆあみ)をするに叶うてゐる所。

○おりて行く。舟から下りて行く。

○雲もみな云々。遠く空と海とが相接して、空に浮ぶ雲も皆波となつて見える。どれが海で、どれが空か尋れて、その區別を知らうが爲に、海人が居て欲しいものだといふので、蒼空に浮ぶ白雲を白浪に見立てゝ詠んだもの。人麿の作に「天の海に雲の波立ち月の船星の林に漕ぎかくる見ゆ」といふがあるが、雲を浪と見、空を海と見るといふ事が、理智の働きで、實際の感じではない。

○月おもしろし。月が趣がある。

○海の神におぢて。舟に乘ると、紅色の濃い立派な着物を着ない、それは海の神におそれて着ないのだと、一面によい衣服を着ない理由を説明し、一面には、既に斯く身なりをかまはない以上、他の體裁も顧みる必要がないといふ意を含めて、次に隱し所をも隱さなかつた事の理由を述べたもの。海神が美人や美しい衣裳、財寶などに目をつけて、その爲に海の暴れるといふ事柄は、古くから人々に信じられてゐたもので、古事記、廿七卷、日本武尊東征の條に、同伴した橘姫が相模の海に身を投じて、浪の暴れるのを鎭めた事が見えてゐる。その時の事を、神明鏡には「それより相州へ越え、上總へ渡り給ひけるに、伏戸の渡りにて、波荒れて船已に覆らむとせるを、梶取り申しけるは、船中の美人を龍神の見たると覺え候と申しければ、數百人の軍士を失はむよりはとて、最愛の橘姫と申す夫人を一人流し給へり。誠に忝し、さて船荒ることなくして、總州へ渡り云々」とある。また源氏物語、須磨「海の中の龍王いたうものめでするものにて云々」ともある。

○何のあしかげにことづけて。此句は諸註まちゝで、舟の直路には「それは海の神の障礙をなす事あるにおぢてといひて憚るなりけり。さて然か海神におぢて、色ある衣だに着ぬ程の事なれば、髮かたち身もとりくづし、此上に何をかは恥ぢんとて、女どもが、いと氣づよくなりて、何のそのと云ひつゝ、芦の葉かげにかこつけて」と解き、創見には「何の芦かげは、何處と指さず、そこらあたりの芦陰にと打ちこめていふ意ばへなり。……委しく言へば、何か、そこ

らの芦陰にといふにて、わざと推しあてにおぼめくも、次なるいみじきあざれをほのめき出でん料なり。事づけては事よせてにて、それによりてといふなり」とある。由豆流は、「何のあしかげ」は河のあしかげにて、何は河の誤字であらうといふ。思ふに創見の説が最も妥當であらう。要するに、全く障壁のない場所ではさすがに恥ぢて、海邊の芦陰を口實に、其處で湯浴をしたものである。

○ほやのつまのいずし。「ほや」は、和名抄「老海鼠、保夜、俗用二此保夜二字一」とある。「いずし」は貽貝の肉を酢で漬けたもの。さて「ほや」については、五雜俎に「海鼠一名海男子、其狀如二男子勢一然、淡菜之對也」とあり、貽貝については、海錯錄に「殼菜一名淡菜、形似二珠母一、一頭尖中啣二少毛一、號二東海夫人一、又、或謚謂二之東海婦人一耶、當レ謂二西施不潔一。」とある如く、戯れて老海鼠を男根、貽貝を女陰に比し、延喜主計式に「貽貝保夜交鮨」などあり、且、此頃の破子の贈物中に、老海鼠や貽貝・鮨などがあつた所から、男根のつれあひの女陰といつた意を、「ほやのつまのいずし」と、食料品の名に寄せて、ぼかして言うたもの。「つま」は、「集め」の「つめ」であるとも、また添へる意であるともいふ説があるが、爰は單に妻(配偶者)の意であらう。海錯錄「淡菜」とある

は貽貝のこと。

○すしあはび。鮨の鮨。延善主計式「鮨鮨、貽貝富那交鮨、各四十六斤」などある。この鮨も女陰に譬へたもの。

○心にもあらぬ。不本意なこと。

○脛にあげて。創見に「裳裾或は袴など脛までかゝげあぐるをいふなり。それを轉して、何によらず、あらはに物を見ることを、ざればみては、脛にあぐ」いひけん。今の鄙言に、隱す事を言ひ表はすを、尻をまくるなどいふに似たり又見せんとして見するならねば心にもあらずといふ」とある。さて「心にもあらぬ」を、一本には「心にもあらず」とある、「心にもあらず」は、「脛にあげて見せける」全體にかゝる副詞であるが、「心にもあらぬ」といへば「脛」にかゝる形容詞である。

【通釋】十四日、夜明け方から雨が降るから、同じ所に碇泊してゐる。舟の主人が節日の物忌をする。精進料理がないから、正午以

十四日　曉より雨降れば、同じ所にとまれり。舟君せちみす。精進物なければ、午の時より後に、舵取の昨日釣りたりし鯛に、せになければ、米を取りかけて、おちられぬ。かゝる事おほく

後は、昨日、舵取の釣つた鯛を、錢がないから米と交換して、精進おとしをされた。かうした鯛と米とかへる事が澤山あつた。舵取がまた鯛を持つて來た。その返しに米や酒をしば〳〵くれてやる。舵取の機嫌がよい。

ありぬ。舵取また鯛もて來たり。米酒しば〳〵くる。舵取けしきあしからず。

【語釋】

○舟君。舟の主人で。貫之をさす。

○せちみ。節忌の義、月毎の定つた物忌をいふ。昔は月の八日十四日十五日二十三日二十九日三十日を六齋日と云うて、此日は身を慎み心を淨めて持戒したものだ。齋は物忌の義である。持統天皇五年二月、公卿に詔して六齋を行はしめたのが、我國の六齋の起源である。大寶令の制にも、六齋日は公私とも殺生を禁斷する趣を規定してある。

○精進物。精進料理のこと。「精進」は、心を精純にして佛道を勤め懶怠しない意であるが、轉じて、身を淨め心を慎んで潔齋すること、魚鳥を食はないこと。

○午。正午。

○米を取りかけて。鯛の代價に拂ふ錢がないから、米をやつて買つたといふ意。

○おちられぬ。精進おとしをされた。即鯛を食つて精進を止められたのをいふ。「れ」は崇敬の助動詞。

○かゝる事。錢が無く、それが爲に、米などで楫取等の釣つた魚を買ふこと。

【通釋】

十五日、今日小豆粥をにない。矢張日和がわるいから、殘念にゐざるやうに僅かづつ航海してゐる間に、今日で二十日以上經過した、空しく日を過すから、人々は海を眺めて嘆息し〳〵してゐる。

女の童の詠んだ歌。

立てば立ち居れば又居る吹く風と波とは思ふどちにやあるらむ、

言うても甲斐のない幼い者の詠んだ歌としては、似合はしい。

○くる。與へる。くれてやる。

○けしきあしからず。機嫌のよいこと。

十五日　今日あづき粥にず。くちをしく、なほ日のあしければ、ゐざる程にぞ、けふ二十日あまり經ぬる。いたづらに日を經れば、人々海を眺めつゝぞある。めのわらはのいへる、

立てば立ちゐれば又ゐる吹く風と
浪とはおもふどちにやあるらむ

いひかひなきものゝいへるには、似つかはし。

【語釋】

○あづき粥。昔は正月十五日には小豆を入れた粥を食したもので、その粥を望粥（もちかゆ）と云うた、それは陰暦十五日を望（もち）と云ふから、十五日粥の義で、望粥（もちかゆ）と云つたのである。枕草子「十五日はもちかゆのせくまゐる」然るに後世は餅粥（もちかゆ）の意にとつて、小豆粥に餅を入れるやうになつた。起源は世風記「正月十五日煮二小

豆粥一爲二天狗一祭二庭中案上一則其粥凝時向二東方一再拜長跪腹レ之、終レ年無二疫氣一」とあることから起つたとも、又、高辛氏の女が正月十五日に巷中に死し、其魂が道路にさ迷うて行人を惱ました、そこで其女は平生粥を好んだから、此日粥を煮て之を祭ると禍がないとて此儀式が始つたともいふ。

○くちをしく。「ねざる程に」へつづく副詞。一説に、上の句につゞけて、小豆粥を煮なかつた事が殘念だと解する説もある。

○なほ日のあしければ。十五日も矢張日和が惡いから。

○ねざる。少しづつ進むこと。

○いたづらに。空しく。

○海を眺めつゝぞある。海を眺めては嘆息し眺めては嘆息してゐる。「つゝ」は動作の繰返される意の助詞。「ながめ」は眺望の意と嘆息の意との兩意に用ゐたもの。物思ひをする時は空しく空を見詰めてゐるものであるから、物思ひする事を「ながめ」と云うた。源氏「いとつれ〴〵に眺めがちなれば」「やがてながめおはします」など、皆物思ひの意。

○めのわらは。「行く人も」の歌を詠んだ女の子。

○立てば立ち云々。風が吹き立つと涙も立ち、風が止むと浪も鎭まる、して見るとき、吹く風と起つ涙とは、互に愛し合ふ同志であらうか。

○いひかひなきもの。言うてもしるしのない意で、役に立たぬこと、詮ない事をいふ。又、幼い者、賤しい者、愚かなこと、取り所のない事にもいふ。

○似つかはし。似合はしい。

【通釋】十六日、風や涙が止まないから、今日も矢張同じ場所に碇泊してゐる。海に涙がなく平らで、何時か早く、み崎といふ所を渡らうとばかり、ひたすら思ふ。しかし風も涙も共に止みさうもない。或人がこの波の立つのを見て詠んだ歌。

霜だにもおかぬ方ぞと
言ふなれど波の中には

十六日　風波やまねば、なほ同じ所にとまれり。唯海に波なくして、いつしかみさきといふ所、渡らむとのみなむ思ふ。風波ともにやむべくもあらず。或人の、此の波立つを見てよめる歌、

霜だにもおかぬ方ぞといふなれど
波のなかには雪ぞ降りける

【語釋】さて舟に乘りし日より、今日までに、二十日あまり五日になりにけり。

雪ぞ降りける。
さて舟に乘つた日から、今日までに二十五日になつた。

【通釋】

○唯。ひたすら。
○いつしか。未來のことを待遠に思ふ時にいふ詞。「何時か早く」といふ意。萬葉集「旅に在りて戀ふれば苦し何時しかも都に行きて君がめを見む」
○みさき。室戸崎のこと。
○霜だにも云々。霜さへも降らない暖い地方だと言ふのであるが、沖に立つ波の中には、霜どころか雪が降つてゐる。白氏文集「誰言南國無二霜雪一、盡在二愁人鬢髮間一」といふ詩句に基き、白波を雪に見立てゝ詠んだもの、當時はかうした古人の詩句に依據して詠むといふやうな事に知的興味を持つたものである。
○舟に乘りし日。「住む館より出でゝ舟に乘るべき所へわたる」とある、十二月廿一日の大津で舟に乘り込んだ日をいふ。十五日の條に「けふ二十日あまり經ぬる」といひ、又こゝに「二十日あまり五日になりにけり」と言うてあるのは、舟行の捗らない爲に、人々が倦みあぐんで、徒らに日を數へて嘆息するさまを表したもの。

十七日　曇れる雲なくなりて、曉月夜（あかつきづくよ）いとおもしろければ、舟を出して漕ぎ行く。此の間に、雲の上も海の底も、同じ如くになむありける。うべも昔のをのこは、「棹はうがつ波の上の月を、船はおそふ海のうちの天（そら）を」とはいひけむ。聞きさしに聞けるなり。又ある人のよめるうた、

みなそこの月の上より漕ぐ舟の
さをにさはるは桂なるらむ

これを聞きて、ある人の又よめる、

影見れば波の底なる久方の
空こぎ渡るわれぞわびしき

かくいふ間に、夜やうやく明け行くに、舵取ら「黑き雲にはかに出で來ぬ。風も吹きぬべし。み舟かへしてむ」といひてかへる。此の間に雨降りぬ。いとわびし。

十七日、空を蔽うて居る雲が消えて、月のある夜明けの空が、甚だ趣きがあるから、舟を出して漕いで行く。この漕ぎ出してゆく時、大空が海に映つて、空も海も一つものゝやうであつた。道理で、昔唐の詩人賈島は、「棹は穿つ波の上の月を、舟はおそふ海のうちの天を」と詠じたであらう。いかにも尤もな事だ。その漢詩はなまじつか聞いたのである。又或人の詠んだ歌。

みな底の月の上より漕ぐ舟の棹にさはるは桂なるらむ。

この歌を聞いて、又或人

の詠んだ歌。

影見れば波の底なる久方の空漕ぎわたるわれぞわびしき。

このやうに歌など詠んでゐる間に、夜がだん〳〵明けてゆくに、舵取らが「黒雲が急に出て來た。風も吹くであらう。舟を漕ぎ戻して終はう」と言うてかへる。この間に雨が降つた。甚だ心細い。

【語釋】

○曉月夜。曉に月のある頃。月の十六日以後の曉をいふ。

○雲の上も海の底も云々。大空が海に映つて、水の底に空のあるやうに見える、卽ち海底と大空とが一つになつて見える光景をいうたもの。

○うべも。道理で。「うべ」は、げにもつともだと承諾する意の詞。

○昔のをのこ。昔の男で、唐の詩人賈島をさす。

○棹はうがつ云々。漁隱叢話前集十九に「棹穿波底月、船壓水中天」といふ、賈島の詩の句がある、其意味は、波の底に天上の月影が映つてゐる、その波の上に棹さして漕いで行く、そして大空のうつゝてゐる水の上に船は浮んでゐる事だといふのである。さて原詩には「波底月」とあるを「波の上の月」「水中天」とあるを「海のうちの天」と改め、「壓」とあるを「襲ふ」としたのである。その故は、當時上流社會の教育は、枕草子二十段に、左大臣師尹が女の宣耀殿女御に敎へられた言葉として、「一には御手を習ひ給へ、つぎには琴の御琴を、いかで人に彈きまさむとおぼせ。さて古今の歌二十卷を皆浮べさせ給はむを、御學問にはせさせ給へ」とある如く、女子は琴を彈き、書をかき、歌を學ぶことが主要なもので、源氏物語帚木にも「うちよみ、走り書き、かい彈く爪音、手

つき口つきたどたどしからず」と云うて、理想の才媛の資格を述べてゐる。そして男子は書傳・書道・遊戯を學んだもので、女子は漢詩漢文には疎遠であり勝であつた。隨つて支那の故事や詩をよく知つてゐる事は、女子としては不似合な事で、源氏物語、帚木卷の女の品定めの條にも、漢詩漢文に精通した女を評して、さうした女と對座してゐるのは實に恐しい、むしろ尋常に鬼と向つてゐる方がましであるといひ、又女として、「三史五經の道々しきかたを明かに悟り明さむこそ愛敬なからめ」と言うてゐる。本文の作者は、冒頭に斷つてある通り、女に擬してあるので、わざと原詩の文句と異なつた言ひ振りをし、原詩をば十分に見知らぬ態度を裝うたものである。

○聞きさしに聞けるなり。なまじつか聞いたのである。「聞きさし」は、少し許り聞くこと。「さし」は、その事を半ばでさし置く意の接尾語。原詩の文句と少し違へて書いてある理由を斷つたもの。

○みなそこの云々。水底に映つてゐる、月の上を漕ぐ舟の、棹にあたるものは、月の中にあるといふ桂の樹の枝であらうといふので、和名抄「兼名苑云、月中有レ河、河上有レ桂、高五百丈」また西陽雜俎「舊言、月中有桂、有蟾蜍、故異書言、月桂高五百丈、下有一人、常斫之」などある傳說によつて、海底の藻を

桂に見立てゝ讀んだもの。前に「棹は窓つ波の上の月」とある文句から、月中の桂を聯想し、棹に障る藻と桂樹の枝とを結びつけて詠んだ、理智的な歌である。月中の桂を詠んだ歌は、萬葉集「目には見て手には取らえぬ月内の桂の如き妹を如何にせむ」「もみぢする時になるらし月内の桂の枝の色付く見れば」古今集「久方の月の桂も秋は猶もみぢすればや照りまさるらむ」などある。「よりし」は、「を」の意、竹取物語「あたりよりだにな歩きそ」萬葉集「古に戀ふる鳥かも弓弦葉の三井の上より鳴き渡りゆく」

○影見れば云々。水に映つてゐる影を見ると、大空が水の中に浮んで見えるが、その大空を漕ぎ渡る自分が心細く感じるといふので、前の「船は襲ふ海の中の天」といふ句から思付いて詠んだもの。大空の影を浸してゐる涙の上、それは一層の頼りなき、淋しさ、はてしなさの感を惹起すものだ。海を渡る心細さは、波の底に映る大空を漕ぎゆく事に、その極所を持つてゐる。「わびしき」といふ主觀句が「波の底なる久方の空こぎわたるわれぞ」と一氣に讀み下して來た句と少しの隙もなく緊密につゞいてよく利いてゐる。「影見れば」の一句は餘分のやうに思はれる。「久方の」は、空の枕詞。「わびし」は、心細いこと、淋しいこと。

【通釋】十八日、矢張同じ場所に居る。海の涙が荒いから舟出をしない。此碇泊所は、遠くを見ても、近くを見ても、大層おもしろい。だけれども、長の碇泊に氣を腐らして不愉快であるから、何が何やら一向感じない。從者同志は氣晴しであらうか、漢詩など歌ふであらう。舟も出さずに空しく日を過すことであるから、或人の詠んだ歌。

いそぶりの寄する磯には年月をいつともわか

○み舟。紀氏の乘つてゐる舟であるから、例の敬語を用ゐたもの。

○かへしてむ。室津へかへして終はうとの意。「てむ」は未來完了の助動詞。

十八日　なほ同じ所にあり。海荒ければ舟出さず。此のとまり、遠く見れども近く見れどもいとおもしろし。かゝれども苦しければ何事もおもほえず。をとこごちは心やりにやあらむからうたなどいふべし。舟も出さでいたづらなればある人のよめる、

いそぶりの寄する磯には年月を
いつともわかぬ雪のみぞ降る

此の歌は、常にせぬ人の事なり。またある人のよめる、

風による波の磯には鶯も
春もえ知らぬ花のみぞ咲く

ぬ雪のみぞ降る。

此歌は平素歌など讀まぬ人の詠んだ歌である。又或人の詠んだ歌。

風に寄る波の磯には鶯も春もえ知らぬ花のみぞ咲く。

此等の歌を、幾分よい歌だと思つて聞いて、舟中の主君であつた翁が、これまでの船中生活の不愉快な氣晴しに詠んだ歌。

立つ波を雪か花かと吹くく風ぞよせつゝ人をはかるべらなる

此歌などを、人が何かと批評するのを、或人が又一心に深く聞き入つて、歌を詠んだ。その歌詞は十七文字である。人が皆默つては居られないで笑ふやうである。歌の作者は大層機嫌がわるくて笑はない。その歌は人が眞似て口吟まうとしても、眞似ることが出來ない。たとひ文字に書いても、讀みおほせることが出來難くあらう。歌を聞いたその當座でさへ、このやうに眞似て言ひ難い。だからまして後日には、どうあらうか、甚だ覺束ない事だ。

此の歌ごもを、すこしよろしと聞きて、舟の長しける翁、月ごろの苦しき心やりによめる、

立つ波を雪か花かと吹く風ぞよせつゝ人をはかるべらなる

此の歌ごもを、人の何かといふを、ある人また聞きふけりてよめり。その歌よめる文字、みそもじあまり七文字、ひと皆えあらで笑ふやうなり。歌ぬしいとけしきあしくて笑まず。まねべどもえまねばず。書けりとも、えよみあへがたかるべし。今日だにかくいひがたし。まして後にはいかならむ。

【語釋】

○遠く見れども云々。遠くを見ても近くを見ても。

○かゝれども。このやうに趣のある面白い景色ではあるが。

○苦しければ。長く碇泊してゐる爲に、氣を腐らして、不愉快なのをいふ。

○何事もおもほえず。面白いとも何とも感じない。

○をとこごち。男同志。貫之の從者達をさす。

○心やり。氣晴し。憂き心を遣り失ふ意。

○いたづらなれば。空しく日を過してゐるから。

○いそぶりの云々。磯鰒（いそぶり）の打寄せる磯邊には、年月を今は何時であるとも區別しない、季節にかまはず常に降る雪ばかりが降つてゐる。磯に碎ける白浪を雪に譬へ、その雪が眞實の雪でない事を思はせる爲に、「年月をいつともわかぬ」と說明したもの。「いそぶり」は磯浪と同じで、磯邊に打寄せる浪。

○常にせぬ人の事。常には歌など讀まない人の詠んだ歌。

○風による云々。風の爲に波の打ち寄せる磯邊には、鶯も春も知る事の出來ぬ花ばかりが咲いてゐる。白浪を花に譬へて詠んだので、その花が譬喩である事を思はせる爲に、鶯や春とは關係のない花と云うたもの。この花は梅の花を意味してゐるのであらう。古今集「鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさむ老かくるやと」萬葉「我が宿の梅の沉枝に遊びつゝ鶯鳴くも散らまく惜しみ」など、梅花には鶯が來て鳴くものだといふやうに遠く奈良朝頃から考へてゐた。

○舟の長しける翁。舟の中の主君である翁。貫之のこと。

○月ごろ。數月來。こゝは先月このかたの意。

○立つ波を云々。吹く風が立つ波を磯邊に打寄せ〳〵して、雪であらうか、花であらうかといふやうに見せかけて、人を欺く樣である。「よせ」に、浪を岸に打寄せる意と、雪か花かと事よせる意との兩意を兼ね、さて、前の二首がそれぞれ、波を雪と花とに譬へて詠んであるのを受けて、それらを一首にまとめて詠んだもの、風を擬人し、磯邊の浪を人が或は雪或は花と見るのは、それは風が人を欺く所業であると言つてゐる點に、貫之の理窟ほい所が見えてゐる。

○何かと。何やかやと。

○聞きふけりて。深く聞き入る。一心に念を入れて聞く。

○みそもじあまり七文字。三十七文字。和歌の形式は、五七五七七の三十一文字である。だから三十二文字以上は字餘りとして普通は嫌ふのである。季吟は、「歌の文字あまりするに、節奏のならひとて、うち唱ふるに、口にたまりて惡しく聞ゆるは、きらふ事なり。文字餘りても、ほど拍子惡しからぬやうによむべしとかや。歌林良材。二條院讃岐、『わだつうみの沖つしほあひにかづく海人の、息もつきあへず物をこそ思へ』とよめるは、句毎に一字づゝあまりたれども、程拍子よき故に卅六字ありて、耳にたゝずとなり。又京極黃門の未來記に『忘れぬらん恨しと思ひ思ふとても、待つべきにあらず間はんともいはじ』といふ歌あり。これも卅六字あるを、よからぬ體の中に書きつられ給へる云々」

○えあらで。默つては居られないで。

○歌ぬし。字餘りの歌の作者。

○けしきあしく。機嫌がわるく。

○まねべども云々。その卅七文字の歌を、そのまゝ眞似て言うても、眞似ることが出來ない。「まねぶ」は、そつくりそのまゝ寫し出して言ふこと。

○えよみあへがたかるべし。讀まうとしても、讀み果すことが出來難からう。「あへ」は、敢で、さう爲ようとして、未だ爲果てない意の詞、古今集「心ざし深くそめてし折りければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ」は、消えやうとして、未だ消えて終はない意。

○けふだにいひ難し云々。その歌を聞いた今日すら、眞似び言ふ事が出來ない。まして後には、その歌の意味を知る事は、どうあらうか甚だ覺束ない事だといふので、こゝに記しとゞめない理由を斷つたもの。

【通釋】

十九日　日あしければ、舟出さず。

十九日、日和がわるいから舟出をしない。

【通釋】二十日、昨日と同じく日和が悪いから、舟出をしない。人々が皆、心の惱みを訴へて嘆く。旅程の捗らないのが苦しく、待遠であるから、たゞ經過した日數を、今日で幾日、二十日三十日と數へると、あまり數が多くて、皆もいたんで終ふであらう。甚だ心細く淋しい。夜は熟睡もしない。二十日の夜の月が出た。それは山際もなくて海の中から出て來る。このやうな景色を見てか、昔安倍仲麿と云うた人は、唐土に渡り、さて日本に歸り來る時、舟に乘る筈の所で、唐土の人々が送別の宴を開き、別れを惜しんで、その心持を漢詩に作りなどした。それでもまだ十分と思はなかつたであらうか。二十日の夜の月が出る時刻まで、宴を張つて居つた。その月は海から上つた。その景色を見て、仲麿大人は、「自分の生國では、このやうな歌を、遠い昔から神もお詠みになり、現在は上中下の人も皆、このやうに別れを惜しく思うたり、喜ばしいこともあり、悲しい事もある時には、詠む

【語釋】○日あしければ。日和がわるいから。

二十日　きのふのやうなれば、舟いださず。みな人々うれへなげく。苦しく心もとなれば、たゞ日の經ぬる數を、今日いくか、二十日三十日と數ふれば、およびもそこなはれぬべし。いとわびし。夜はいもねず。二十日の夜の月いでにけり。山の端もなくて、海のなかよりぞ出で來る。かうやうなるを見てや、むかし安倍の仲麿といひける人は、もろこしに渡りて歸り來たる時に、舟に乘るべき所にて、彼の國人うまのはなむけし、別れ惜みて、かしこのからうた作りなどしける。飽かずやありけむ、二十日の夜の月いづるまでぞありける。其の月は、海よりぞ出でける。これを見て仲麿のぬし、「我が國にはかゝる歌なむ、神代より神もよみたび、今は上中下の人も、かうやうに別れ惜み、よろこびもあり、かなしびもある時にはよむ」とて、よめりける歌、

青海原ふりさけ見れば春日なる
三笠のやまにいでし月かも

とぞよめりける。

彼の國人聞きしるまじうおぼえたれども、ことの心を、男もじに樣を書き出して、こゝのことば傳へたる人にいひ知らせければ、心をや聞き得たりけむ、いと思ひの外になむめでける。もろこしと此の國とは、言ことなるものなれど、月の影は同じ事なるべければ、人の心も同じ事にやあらむ。さて今そのかみを思ひやりて、ある人のよめる歌、

のである」と云うて、詠んだ歌。

青海原ふりさけ見れば
春日なる三笠の山に出
でし月かも。

と詠んだ。

彼の國の人は、歌の意味が聞いてわかるまいと思はれたけれども、その意味を漢字の體裁に書き出して、日本語を傳へ敎はつてゐる人に、話し知らせたから、歌の意味を聞きわける事が出來たであらうか、甚だ案外に感心した。唐土と我國とは、言葉が違ふけれども、照る月の光は同じである筈であるから、人情も同樣であらうか。さて今その當時の事を想像して、或人の詠んだ歌。

都にて山のはに見し月なれど
波よりいでゝ波にこそ入れ

【語釋】

○昨日のやうなれば。天候の惡い事を言うたもの。

○うれへ嘆く。人々が互に心のなやみを訴へて嘆くこと。憂は「うれひ」「うれへ」何れにも言ふが、「うれひ」といふは、自身に愛ふること、「うれへ」は、心の憂を他人に訴ることであらうと、山口樂に言うてゐる。

○苦しく。旅程の捗らないのを苦しく思ふのである。

○心もとなければ。都に歸る日が待遠しいから。

○けふいくか。今日で幾日になるかの意。

○およびも云々。日數が多くて、指折り數へる度數の多い事を、仰山に言うたもの。「および」は指の古言。

○いもねず。熟睡しない。古義に「伊といふも禰といふも、共に寢ることをいふ中に、伊は寢入ることを廣く云へり。されば伊といふは體語にのみ云て、用かず。朝寐・安寐・味寐・長寐などいふも皆體語なり。禰は那とも奴とも多くはたらけり。那須・奴流など云ふ類ひなり。故に、いぬる、いねず、いねを安くぬる、いこそれらえれ、など多く言へり」とある。

○かうやうなるを見てや。海の中から月が昇る、このやうな景色を見てか。この句の結びは、下文の「青海原ふりさけ見れば云々さぞよめる」とある「よめる」の語であるべきだが、仲麿が歌を詠んだ事情を長々と挿入した爲に、「見てや」の係りを結ぶ句がなくなつて、尻切れ蜻蛉になつてゐる。

○安部の仲麿。中務大輔船守の子。靈龜二年、年十六の時、選ばれて遣唐留學生となり、留ること數年、後、唐朝に仕へて、祕書監兼衛尉卿となる。勝寶年間に藤原清河が大使として唐に渡つた時、仲麿も共に歸らうとしたが、海上で風に遭ひ、再度唐に往き、爾後、重用され、寶龜元年七十歳で彼地に死んだ。「あまの原ふりさけ見れば」の歌は、清河と共に唐を去らうとした時に詠んだもの。李白が仲麿を哭する詩に「日本晁卿辭帝都、征帆一片繞蓬壺、明月不歸沈碧海、白雲秋色滿蒼梧」といふがある。

○もろこし。唐土。

○馬のはなむけ。送別の宴。

○かしこのからうた云々。王維が仲麿を送る詩に「積水不可極、安知滄海東、九

州何處遠、萬里若乘空、向國懽看日、歸帆但信風、鰲身映天黑、魚眼射波紅、
卿國扶桑外、主人孤島中、別離方異域、音信若爲通」

○あかずやありけむ。何時まで、別を惜み詩を作りなどしてゐても、これで十分だとは思はなかつたであらう。

○ぬし。親しみ崇めて云ふ詞。古事記傳、「主は大人と同言にて能宇斯の切れるなり、故、古にうしは必ず某之宇斯と之を加へたるに云ひ、ぬしは某主と直に連れて、之を加へぬに云り。ぬしにも之を添へて某の主といひ、又たゞ主とばかり首に云ふなどはみな後のことなり」

○かゝる歌。次のやうな歌といふに同じで、「あをうなばら」の歌をさす。

○神代より云々。神代の昔から、神々も詠んだといふので、古今集序「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、猛きものゝふの心をも慰むるは歌なり。この歌、天地の開けはじまりける時より、いで來にけり。然れども世に傳はる事は、久方の天にしては、下照姫にはじまり、あらがれの土にしては、素盞嗚尊よりぞおこりける」とある。

○あをうなばら云々。青々とした海原を遠く見やると、今しも月がさし登つたが、あの月はかつて自分が故郷に居た時に眺めた、春日野にある三笠山に出た

月であるかマア。此歌は古今集には「天の原」とあるが、今海邊での話であるから、場所柄「青海原」とかへて言うたもの。「ふりさけ見る」は、遠く見放つこと、「ふり」は、頭を振り向ける意。古今集、羇旅歌、「もろこしにて月を見てよみける、安倍仲麻呂、天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」とあり、左註に「此歌は、昔仲麿を、もろこしに物ならはしに遣したりけるに、あまたの年を經て、え歸りまうで來ざりけるを、此國より使まかりいたりけるに、たぐひてまうで來なむとて、出でたりけるに、めいしうといふ所の海べにて、かの國の人、うまのはなむけしけり。よろになりて、月のいと面白くさし出でたりけるを見てよめる、となむ語りつたふる」とある。

○聞き知るまじく云々。詠み上げた歌を、耳に聞いて、直にその意味を理解出來まいと思はれたが。

○ことのこゝろ。歌の意味。

○男文字。漢字。假名を女文字といふ。「男文字にさまを書き出だして」とは、歌の意味を漢字の體裁に書き改めること。「さまは」、體裁で、こゝは、「男文字のさまに書き出だして」といふに同じい。

○こゝの詞。日本の言葉。「こゝの詞傳へたる人」は、日本語を傳授してゐる人、

通譯人。

○こゝろをや云々。歌の意味を聞きわけ得たであらうか。

○おもひの外。案外。

○めで。感歎すること。

○月の影。月の光。

○人のこゝろ。人情。

○そのかみ。その當時。仲麿が「天の原」の歌を詠んだ當時。

○思ひやりて。此語は、愁思を遣り失ふ意であるが、平安朝頃から、轉じて、想像する意に用ゐた。後撰集「思ひやる心は常に通へども逢坂の關越えずもある かな」は、想像する意。

○ある人。貫之をさす。

○都にて云々。都に居た時、山の端から出て、山の端に沈むのを見た月であるが、今はその同じ月が、涙から出て浪に入ることだ。創見に「此歌を後撰集に海より出で、海にこそ入れとして、入れられたるは非なり。山に對しては、海さあらんが、ことわり叶ふべく思はれたるならめど、波より出で、波にこそ入れといへるにこそ、其のけしきありて、かつ浮きたる旅情も浮ぶものなれ。まして

【通譯】

廿一日、午前六時、舟を出す。屬僚達の舟も皆出帆する。その舟の海に浮んでゐる有樣を見ると、春の海に秋の木葉が散らばつてゐるやうであつた。一通りならぬ願によつてゞあらうか、風も吹かない、よい日和になつて、漕いで行く。一行の中には、紀氏に使はれやうとして、つき隨うて來る童がある。かうして漕いで行く間に、その童が舟うたをうたふ。それは、

海より出で、海に入るといへるは、其語調重くして、山のはに見しなど、手がろき調べに應ぜざるのみならず、東西に海のあらむ心ちもせられて、かたくゝ叶はざるを聞き知るべし」

二十一日　卯の時ばかりに舟出す。みな人々の舟いづ。これを見れば、春の海に、秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。おぼろげのねがひによりてにやあらむ。風も吹かず、よき日出で來て、漕ぎ行く。此の間に、使はれむとて、つきて來るわらはあり。それがうたふ舟うた、

なほこそ國の方は見やらるれ、わが父母ありとし思へば、

かへらや。

とうたふぞ哀れなる。

かく歌ふを聞きつゝ漕ぎ來るに、黑鳥といふ鳥、いはほの上に

なほこそ國の方は見やられれ。わが父母ありとし思へば。かへらや。とうたふのが可哀相である。

このやうに歌ふのを聞きながら漕いで行くに、黒鳥といふ鳥が巖の上に集つて居る。その巖のもとに波が白く打寄せてゐる。舵取の言ふことは、「黒鳥のもとに、白き波をよす」といふ。その言葉はどうといふ格別の事はないけれど、物心があつて言ふやうに聞きされた。人柄に相應しないから、怪しく思ふのである。このやうに言ひ〳〵して漕いでゆくに、舟のあつまりをり。其のいはほのもとに、波白く打寄す。楫取のいふやう、「黒鳥のもとに、白き波をよす」とぞいふ。そのことば何とにはなけれど、物いふやうにぞ聞えたる。人の程にあはねば、とがむるなり。かくいひつゝ行くに、舟君なる人、波を見て、國よりはじめて、海賊むくいせむといふなる事を思ふ上に、海の又おそろしければ、頭もみな白けぬ。七十八十は海にあるものなりけり。

わが髪の雪と磯邊の白波と
いづれまされり沖つ島守
かぢとりいへ。

【語釋】

○卯の時ばかり。午前六時頃。

主人が波を見て、白波盗賊）を聯想し、國を出た時から、海賊がしかへしをするであらうといふ事を心配する上に、海が又恐しいから、それが爲に頭が白くなつて終つた。して見ると七十・八十といふ老境は、海にあるものだわい。

わが髪の雪と磯邊の白波といづれまされり沖つ島守。

舵取判斷しろ。

○皆人々の船いづ。屬僚達の乘つてゐる船も皆出帆する。

○春の海に秋の木の葉しも云々。赤壁賦「駕一葉之扁舟」などある如く船を木の葉に譬へ、春の海に秋の木葉を配して、同所に相反する二つの季節を錯綜せしめて、例の諧謔を弄したもの。貫之「櫻散る木の下風は寒からで、空に知られぬ花ぞ散りける」なども、櫻を中心として、冬の六花を配し、二つの季節を交えた點に、貫之の諧謔の慣用手段を見る事が出來る。「し」は強める助詞、「も」は詠嘆。

○おぼろげの願。おぼろげならぬ願の意。尋常一通りでない大願。松の落葉「おぼろげならぬ心を中頃におぼろげといふ事ありき。そは異なる言ひざまなれど、中頃の一つの詞づかひにぞありける。宇津保の物語、俊蔭の卷に、山林に交る者は世の中をおぼろげに思ひ離れて、身を憂きものに思ひなしてするもの也。とあり。おぼろげならず思ひ離れてといふ心也、榮花物語、浦々の別れの卷に、此者ども立ちこみたれば、おぼろげの鳥獸ならずば、いで給はむ事難し。初花の卷には、殿あはれおぼろげにおもほせばこそ斯くもの給はめ。と見えたるなどを思ひ渡して知るべし、これらも、おぼろげならぬ、又はおぼろげならずといふ心になん」源氏、若菜「怪しくはありしわざぞかしとは、さすが

に打覺ゆれど、おぼろげにしめたる我心から、淺くも思ひなされず」とあるも、おぼろげならずの意。斯うした反對の意に言葉を用ふのは、萬葉の歌などにもある事で、「草枕旅のやどりに誰が夫か國忘れたる家待たなくに」「ひと日こそ人をも待ちし、長き日を斯くのみ待てばあり難なくも」など、言葉通りに解くと、「家が待たぬに」「あり難くない」の意になるが、實はその反對で、家の人が待つてゐるのに、ありがてにする事だなどいふ意である。眞淵は「おぼろげは大かたといふ詞なり。さればおぼろげならぬ顧にとあるべきを、斯く言へるは、此頃の俗語に、おぼろげならぬといふべきを、ならぬを省きていへる俗語を以てかけりと見ゆ。源氏物語にも、斯くざまに言へることあり。凡、俗語には、いひなれし詞は、理なく省きて使ふこと多し。今も然り。かゝる詞は雅言にあらずと知りて、わきまふべし」と言うてゐる。

○この間に。漕ぎ行く間に。此句は下の「うたふ」にかゝる副詞。

○つかはれんとて云々。貫之に使はれようとて、附き隨うて來る童。これは貫之の死んだ女兒の伽などして、年來附き從うて居た童女であらうといふ。

○猶こそ云々。このやうに遠く來ても、矢張、國の方がなつかしく眺め渡される、そこには自分の戀しい父母が居ると思ふから。「かへらや」は、嘸の文句。

○あはれ。可哀相の意。

○漕ぎくるに。漕ぎ行くにの意、これは今自分の往く方を內にして、來ると云うたもの。萬葉「霞立つ長き春日を奥處なく知らぬ山道を戀ひつゝか來む」とあるも、家の妹を戀しく思ひつゝ行かむかの意で、行く方を內にして言うたもの。

○黑鳥。黑鴨のこと。

○黑鳥のもとに白き涙をよす。黑鳥と白涙と相反する色彩を配して、例の諧謔を弄したもの。

○何とにはなけれど。どうと言ふのではないが。格別の事はないが。

○ものいふやうにぞ。風流心があつていふやうに。

○人のほどにあはれば。人柄に相應しないから。

○とがむ。怪しく思ふ。

○舟君。舟の主人。貫之のこと。

○涙を見て。涙の荒れるのを見て。此句は、下の「海のまた恐しければ」とあるにつゞくのであるが、特に此處に置いたのは、涙から白涙(盜賊)白涙から海賊の襲來に聯想した心持を匂はせたもの。

○國よりはじめて。國を出發した時からはじめて。

○海賊云々。海賊が報いをするであらうといふ事を心配する上に。「思ふ」は心配の意。貫之が土佐守在任中、しばしば海賊を追捕した事があつたので、彼等は今貫之の歸途を要して、返報するであらうといふ噂があつたのであらう。

○頭もみなしらけぬ。心配の爲に急に年老いて頭髪も白くなつた。此時貫之は既に七十歳前後の老齢で、白髪雪を欺く程であつたらう、それたば、海賊の心配と海の怖しさとで、白髪になつたと言ふやうに、大袈裟に言ひなして、例の諧謔振りを發揮したのである。能書家の魏の韋誕が凌雲の額を書いて、白髪になつたといふ故事がある。三國志「魏明帝立二凌雲觀一、誤先釘レ榜、及以レ籠盛二韋誕一、轆轤引上書レ之、去レ地二十五丈、既下鬚髪皓然、還語二子弟一、直絶二此法一」

簸「(翁)此事を歎くに、髪も白く腰もかゞまり目もたゞれにけり。」

○七十八十は云々。七十歳八十歳といふ老齢は海にあるものだといふので、自分の老齢を海のせいにし、海路の怖しさを、戯れ半分に誇張して言うたもの。

○わが髪の云々。自分の頭髪の白いのを、磯邊に打寄せる波の白いのと、どちらが勝つてゐるか、沖の島守よ判斷しろといふ意で、假りに島守を設けてかく呼びかけたもの。萬葉「八百日行く濱のまなごも吾が戀に豈まさらじか沖つ島守」とあると同じ巧みである。「いづれまされり」は、普通「いづれまされる」と連體形で結ぶべきであるが、歌ではかうした破格がある。「沖つ島守」は、沖の島の番人。

○檝取いへ。歌で沖つ島守に言ひかけて見たが、その島守は近くに居ないから、轉じて檝取に言ひかけたもので、檝取よ汝が島守に代つて判斷しろの意。

二十二日　夜べの泊より、ことゝまりをおひて行く。遙に山見ゆ。年こゝのつばかりなるをのわらは、年よりは幼くぞある。此のわらは、舟を漕ぐまに〳〵、山も行くと見ゆるを見て、あやしき歌をぞよめる。其のうた、

漕ぎて行く舟にて見れば足曳(あしびき)の
　山さへ行くを松は知らずや

とぞいへる。幼きわらはの事にては、似つかはし。今日海あらけ、磯に雪降り、波の花咲けり。ある人のよめる、

波とのみひとへに聞けど色見れば

【通釋】廿二日、昨夜の碇泊所から、他の湊に向つて航行する。遠く山が見える。九歳程の男の童が、年の割合に心が幼い。この童が舟の進むにつれて、遠くの山も、舟と同じ方角に走るやうに見えるのを見て、幼稚な歌を詠んだ。その歌、

漕ぎてゆく舟にて見れば足曳の山さへ行くを松は知らずや。

と詠んだ。幼い子供の歌

としては似合はしい。
今日海が荒れ、磯には、寄せ來る波が碎けて、或は雪の降るやうにも見え、或は花の咲くやうにも見える。或人の詠んだ歌、
波とのみひとへに聞けど色見れば雪と花とにまがひぬるかな。

雪と花とにまがひぬるかな。

【語釋】
○よべのとまり。昨晩泊つた碇泊所。これは阿波の船津であらうか、今その名がわからない。
○ととまり。他の碇泊所。これも不明である。
○年よりは幼くぞある。年齢に比較して心持の發達して居らぬ意。
○あやしき歌。拙い歌。幼稚な歌。
○漕ぎて行く云々。漕いで行く船に居て見ると、船は勿論、山までも行くのを、その山に立つて居る松は知らずに居るだらうか。遠くの山が船と共に走るやうに見える幻覺を眞に受けて、さてその山に在る松を、自分と同じ心持を持つてゐるものと信じて、「松は知らずや」と言うてゐるのは、如何にも子供らしい考である。「あしびきの」は、山の枕詞。「知らずや」は、知らずやあるらむ」の意。
○幼きわらはのこと云々。幼い童の詠んだ歌としては、思想の幼稚なのが似合はしいとの意。
○あらけ。荒々しくなること。
○磯に雪ふり涙の花さけり。涙の磯に碎けて白く散る有樣を形容したもの。「雪降り」といひ、「更に涙の花さけり」と重ねたのは、古今集、貫之「雪降れば冬ごもりせる草も木も春に知られぬ花ぞ咲きける」などある如く、「雪」「花」といふ緣語を用ゐ、同時に一つ所に二つの季節の交錯を思はせた諧謔ぶりを發揮したものであらうが、その技巧が鼻につく。實朝の「大海の磯もとどろに寄する波割れて碎けて裂けて散るかも」などゝ對照すると、貫之の詩的才能がわかる。雪を白涙と見た歌に、古今集「浦近く降りくる雪は白涙の末の松山越すかとぞ見る」などいふがある。
○波とのみ云々。耳には一途に涙であるとばかり思つて、聞くけれど、さてその碎け散る色を見ると、雪と花とに見まちがへて終ふ事よといふので、耳に聞く感じと目に見る感じの相違を詠んだもの。大波の碎ける趣も、それに對する感動も表はれてゐない。小細工に過ぎて厭味がある。「まがふ」は、見別け難いこと、混亂すること。

【通釋】
廿三日、日が照つて、やがて曇つた。此邊は海賊の心配があると云ふか

二十三日　日照りて、くもりぬ。此のわたり、海賊のおそりありといへば、神佛を祈る。

【語釋】

ら、神樣や佛樣に平安を祈る。

【通釋】
廿四日、昨日と同じ所に碇泊してゐる。

【通釋】
廿五日、舵取らが「北風が吹いて海が荒れる」といふから、舟出しない。海賊が追ひかけて來るといふ噂が、しつきりなしに聞えて來る。

【通釋】
廿六日、眞實かどうか知らぬが、海賊が自分達一行の者を追うて來ると噂するから、夜半頃、舟出して、漕いで行く路に、神を祭る場所がある。舵取をして、幣を献上せしめるに、西風が吹いて、その幣は東の方へ散るから、舵取が禱言を申して幣を奉る、その祈禱の詞は、「この幣の散る方向へ、舟をはやく漕がせて下さい」と申上げて、幣を献上する。これを聞いて、或る女の童の詠んだ歌、

わたつみのちぶりの神に手向けする幣の追風やまず吹かなむ

と詠んだ。
此間に風が順風であるか

○日てりて曇りぬ。朝の程は日が照り輝いて、後に曇つたとの意。
○おそり。恐れ。

二十四日　昨日の同じ所なり。

【語釋】
○きのふの云々。同じ昨日の所といふを、「昨日」を強く思はせる爲に、斯く語を置きかへたもの。

二十五日　舵取らの「北風あし」といへば、舟出さず。海賊おひくといふ事、たえず聞ゆ。

【語釋】
○北風あし。北風が吹いて海上が荒れる意。
○海賊おひく云々。海賊の追つてくるといふ事を、碇泊してゐる舟へ、水陸の驛づたひに告げて來るのであらう。

二十六日　まことにやあらむ、海賊おふといへば、夜半ばかり舟を出して漕ぎ來る路に、たむけする所あり。舵取して幣たいまつらするに、幣の東へ散れば、舵取の申してたてまつることは、「この幣の散る方に、御舟すみやかに漕がしめ給へ」と、申してたてまつるを聞きて、あるめのわらはのよめる、

わたつみのちぶりの神に手向する
ぬさの追風やまず吹かなむ

とぞよめる。
此のほどに、風のよければ、舵取いたくほこりて、舟に帆あげなど喜ぶ。その音を聞きて、わらはも翁も、いつしかと思へばにやあらむ、いたく喜ぶ。此の中に、淡路のたうめといふ人のよめる歌、

追風の吹きぬる時は行く舟のほで打ちてこそ嬉しかりけれ

ら、舵取がひどく自慢して、舟に帆をあげなどして喜ぶ。その喜ぶ騒ぎを聞いて、童も翁も、いつか早く都に歸り度いと待遠に思つて居るからであらうか、大層よろこぶ。この中で「淡路のたゝうめ」といふ人の詠んだ歌、

追風の吹きぬる時は行く舟のほでうちてこそうれしかりけれ。

と、いふのである。同じく歌を詠むにしても、天氣のよい事の喜びについて詠んで、同時に天氣のよい事を願つてゐる。

とぞ。天氣のことにつけつゝいへる。

【語釋】

○まことにやあらん。眞實であらうかどうか知らぬが。此句は「いへば」につゞく。

○澄ざくる道に。澄いで行く道に。

○たむけ。「取向け」の約、手に取つて神に捧げる意。昔は旅に行く人は、多く越えてゆく山の坂路の極つた所で、神を祭つて、一路の平安を祈つたもので、その神を祭つて平安を祈ることを、多く「たむけ」と言うた。隨つて、坂路の絶頂で手向をする場所をたむけといふ。峠は手向けの訛である。又、萬葉に「大船の對馬の渡りわたる中に幣とりむけて早や歸り來れ」とある如く、海を行く時にも手向をしたものである。鳥居龍藏氏の説に、「トルコ民族では地上の神はIchchiと稱し卽ち主の意味で、種々の物體の神となつてゐる。これらの神は、川・湖・木・草・岩・石等種々のもの丶内に宿つて居るのである。日本に於て、川や木に主があるといふのと、同じ考へである。Ichchiは、それ〴〵の土地に居るのであつて、ヤクートが非常に困難な僻地や恐しい道路・人の足跡未だ至らない場所に遊牧して行く時には、其地の地方神に手向をするのである。之れは日本の古代に於ける手向の風習とよく似て居り、また蒙古人・トルコ人などウラルアルタイ民族は、峠を越ゆる時に、やはり此手向を行ふのである。ヤクートは旅行中は或る物品に特別な言葉を設けて之を使用し、殊に貴重品には變名を用ふるのが慣例である。これは通常の言葉で話すと、Ichchiがそれを聞いて、旅人の所有物を欲しがつて、害を加へるから、それを避ける爲であるといふ」とある。

○機取して。機取をして。船頭に命じて。

○幣。神に奉る物の總稱。白和幣・青和幣・木綿の類をいふ。然し爰は、旅に出る人携へて行つて、道の神に手向けるもので、種々の色の絹布をこまかに切つたもの、それを袋に入れて持ち行くのである、古事記傳「奴佐は神に手向くる物をもいひ又祓に出す物をも云、名の義は、禱布佐にて、事を乞ひ禱ぐさて出すよて禱ぐ祓の奴佐も其罪穢を除き清め給へと禱ぐ意を以て出すなれば、神に献りし也。と意ばへ一つなり、さて布佐は麻なり……抑神に手向るも祓に出すも、其物は種々ある中に、殊に麻をしも名に負へるは、あるが中に主とする一種に就てなり云々」

○幣のひんがしへ散れば。これは、機取が禱言を申して、幣を奉つた後の事であるが、機取の禱言を説明する爲に、先に出して述べたもの。また機取は、事實幣

の散つたのを見て、かういふ禱言を申したのではなく、風の方向で豫め幣の東に散る事を見込して斯く申したものである。だから此句は、「風の西より吹けば」とでもあれば、聞きさりにくゝないが、「風の西から吹く」事と幣の東に散ることゝ一致するから、幣を主として言うたゆゑに、文意が煩しくなつたのである。

○申してたてまつること。機取が道の神に禱言を申して幣を奉る、その祈禱の詞は。「こと」は言葉の意。

○わたつみの云々。海路の行く手にまします神に幣を奉つて一路の平安を祈る、その幣を東へ吹き散した、幣の追風が絶えず吹いて欲しい。「わたつみ」は、海神の名、轉じて海のこと。「ちぶりの神」は、旅人の道の行手に居る神。「ぬさのおひ風」とは、幣を東に吹き散した風は、やがて舟の行く方向に吹く風である。依つて、幣を東に散した、舟の追風といふ意で、幣の追風というたもの。「なん」は願望の意の助詞。

○いたくほこりて。風が順風になつたので、機取は自分の祈禱のしかたがよかつたから、神が受け入れて矣れたのだと、ひどく自慢したのである。

○その音。帆などあげて喜ぶ騒ぎをいふ。こゝの音は、古事記「惡神の音」とある「おとなひ」と同じで、喧しい響をいふ。

【通釋】廿七日、風が吹き、波が荒いから、舟出しない。誰も彼も痛切に嘆く。男の人々の吟ずる漢詩に、「日を望めば都遠し」とい

○いつしかと。未來の事を待遠に思ふ意で、いつか早く都に歸り度いと。

○淡路のたうめ。「たうめ」は姥の音便で老女の稱。後に淡路の巨子とあるに同じ人。

○おひ風の云々。追風の吹いてゐる時は、ゆく舟の帆が帆綱をうつが如く、自分たちも手を打つて喜び樂しむ事である。帆手は、帆の横に綱を多くつけて、帆を左右に開く爲のもの、「帆手」に「手」の意を言懸け、帆綱の帆をうつのを、手拍子を打つことの譬喩に用ゐたもの。

○ていけのことにつけつゝいへる。同じ歌を詠むにしても、皆天氣のよい事の喜びについて、詠んでゐるといふので、裏面に、それ程までに天氣のよい事を頻つて居るのだとの意を聞かせたもの。「ていけ」は「てけ」に同じい。「いへる」は「いへるよ」の意、一本には、「祈る」とある。

二十七日　風吹き波荒ければ、舟出さず。かれこれかしこく歎く。男たちのからうたに、「日をのぞめば都とほし」などいふなる事のさまを聞きて、ある女のよめる、

ふ句がある、その意味を聞いて、或る女の詠んだ歌、

日をだにも天雲近く見るものを
　都へとおもふ路のはるけさ

又或人の詠んだ歌、

吹く風の絶えぬかぎりし立ち來れば
　波路はいとゞはるけかりけり

終日風が息まない。憎み嫌うて寢た。

日をだにも天雲近く見るものを
　都へとおもふ路のはるけさ

又ある人のよめる、

吹く風のたえぬ限りし立ち來れば
　波路はいとゞはるけかりけり

日ひと日風やまず。爪はじきをして寢ぬ。

【語釋】

○かしこく歎く。ひどく歎く。「かしこく」は、宇津保物語「これは昔仲正が親とひとしき人、物し給ひけるを、その御つたへにこそあめれなど、かしこく驚く」などあると同じく、事の切なる意。

○心なぐさめ。氣晴し。此句の次に、「歎へる」といふ句を補へばよくわかる。

○日をのぞめば都とほし。「望レ日長安遠」といふ詩であらう。これは船中の人の自作か、或は前人の作か明かでないが、その典據は、晉書明帝記「帝幼而聰哲、爲三元帝所二寵異一、年數歲、嘗抱置二膝前一、偶長安使來、因問、汝謂下日與二長安一孰遠上、對曰、長安近、不レ聞下人從二日邊一來上、居然可レ知也、元帝異レ之、明日宴二群僚一、又問レ之、對曰、日近、元帝失レ色曰、何乃異二間者之言乎一、對曰、舉レ目則見レ日、不レ見二長安一、由レ是益奇レ之」とある明帝の故事によつて作つたもの。意味は、太陽を望み見ると、日輪は赫奕として目に映ずるが、都は何れの邊にあるとも見えないから、太陽よりも都の方が遠いといふのである。

○ことのさま。事情。事柄の意味。「望日長安遠」などいふ詩句の意味や、それに關する明帝の故事。

○日をだにも云々。行き到る事の出來ない日輪をすら、空に浮ぶ雲の近くに望み見るのに、さまで離れては居らぬ、同じ國の中の都へ歸らうと思ふ道の遠い事よといふので、「舉レ目則見レ日不レ見二長安一」といふ句の意で詠んだもの。

○吹く風の云々。吹く風の止まない間は、いつまでも波の立ち來る事であるから、波路は一層遠くあるよといふので、風の無限性、涙の無限性から、海の無限に思ひ及んで詠んだもの、沖の方から限りなく涙が立つて來る、その涙の無限から、茫洋たる大海原の極なさを感じたのだ。「いとゞ」は、「いといと」の約で一層、いよ〳〵などいふ意。風の吹く限り涙はたつ、そして風の吹く事は限り

【通釋】
廿八日、終夜、雨がやまない。今朝も降ってゐる。

【通釋】
廿九日、舟を出して漕いでゆく。日の光がうら、かに照り輝いて、漕いでゆく。指の爪が大層長く伸びて居るのを見て、日並みを數へて見ると、今日は子日であつたから、切らない。月は正月であるから、都の子の日の事を言ひ出して、「子の日の祝ひに曳く小松があればよい」と言ふけれど、海の中であるから、むつかしいよ。女が書いて差出した歌、

おぼつかな今日は子の日か蜑ならば
だに引かましものを

と詠んでである。海上で子の日を迎へて詠んだ歌としては、どうあらうか、餘りよくもあるまい。又、

ない、だから波路はいよ〳〵もつて遠いといふのである。「波路」は、涙の上の路で、舟路のこと。

○つまはじき。爪をはじくことで、物を疎んじ嫌ふときにする所作。源氏、帚木「いづこのさる女かあるべき。おいらかに鬼とこそ向ひ居たらめ。むくつけきことと爪弾をして」落窪「爪弾をちから〳〵しくし給ひて」源氏空蟬「かの人の心を爪弾をしつゝ、恨み給ふ」などある。雅譯に、「にくき物事を見聞く時のしわざ也」とある。

二十八日　よもすがら雨やまず。今朝も。

【語釋】
○よもすがら。終夜。「すがら」は、始から終迄といふ意の接尾語。廿七日の夜通したいふ。
○けさも。「けさも止まず」の意。

二十九日　舟出して行く。うら〳〵と照りて、漕ぎ行く。爪の長くなりにたるを見て、日を數ふれば、今日は子の日なりければ切らず。正月なれば、京の子の日の事いひ出でゝ、「小松もがな」といへど、海中なればかたしかし。女のかきて出せる歌、

おぼつかな今日は子の日か蜑ならば
うみまつをだに引かましものを

とぞいへる。海にて子の日の歌にては、いかがあらむ。又ある人のよめる歌、

今日なれど若菜もつまず春日野の
わが漕ぎわたる浦になければ

かくいひつゝ漕ぎ行く。おもしろき所に舟を寄せて、「こゝやいづこ」と問ひければ、土佐の泊とぞいひける昔土佐といひける所に住みける女、この舟にまじれり。それがいひけらく、「昔しばしありし所の名たぐひにぞあなる。あはれ」といひて、よめ

或る人の詠んだ歌、

今日なれど若菜もつまず春日野のわが漕ぎわたる浦になければ。

このやうに歌ひ〳〵して漕いで行く。景色のよい磯邊に舟を寄せて、「こゝは何處か」と尋ねたれば、土佐の泊だと答へた。其、土佐と云うた所に住んでゐた女が、自分達の舟の中に居た。その人が言うた事は、「こゝは、自分が昔、暫時住んで居た所の名と類似の名である。あアあア」と言うて、詠んだ歌、

年ごろを住みし所の名にし負へば來よる波をもあはれとぞ見る。

る歌、

年頃を住みし所の名にし負へば
來よる波をもあはれとぞ見る

【語釋】

○うら〳〵と。「うらゝか」に同じ。日の光の暖く靜かに輝いてゐるをいふ。

○爪のいと長く云々。昨日迄は雨降り風が吹いて、舟も出さない爲に、氣を腐らして、何事も覺えなかつたが、今日は日影長閑に照り輝いて、心も咲み榮え、身のまはりの事に氣づくだけの餘裕が出來たのである。

○子の日なりければ云々。爪を切るに日の吉凶をいふは、今もある事で、これはふるくからの習慣らしい。日本紀纂疏「凡陰陽家、丑日除手甲、寅日除足甲、爲吉」とある。

○むつき。正月のこと。睦月(むつび)の意だとも、萌月(もゆつき)で、草木の萌えきざす月の意だともいふ。

○京の子の日。昔、正月初子の日には、人々は野外に出で、小松を曳き遊宴したもので、その松をば子の日の松と言うた。家持の天平寶字二年正月の作に「初春の初子の今日の玉箒(たまはゝき)手にとるからにゆらぐ玉の緒」といふがある。之は初子の肆宴に詔に應じて詠んだのである。またこの日、若菜も摘んだもので「倚松根摩腰、習風霜之難犯也、和菜羹啜口、期氣味之克調也」とある。

○小松もがな。子の日に千代を祝ふ爲に曳く小松があつて欲しいとの意。

○かたしかし。難くあるよ。「かし」は、念を押す意の感動詞。

○おぼつかな云々。今日は子の日かゝア、海人ならば、小松は曳き得ずとも、せめて海松をなりと引いて祝はうものを、それも出來ず、心の欝結して晴やかでない事だ。「おぼつかな」は「おぼつかなし」の語根。不明瞭なこと、不確實なこと、氣がかりなことなどに用ゐるが、萬葉集「水鳥の鴨の羽色の春山のおぼつかなくも思ほゆ(おも)　かも」の解に、契沖は「欝の字をオホツカナキとよめり、欝の字の心は、譬へば盛りに燃ゆる木を、灰の下にさし入れたるが、さすがに燃え出でれど、下にふすぼるやうの心なり。春山の陽氣下に滿ちて、やゝもえ出れど、猶くゆるやうなるを胸に思ひのふさがりたるやうに譬へていふなり」と言うてゐる。爰に「おぼつかな」と言うたのも、子日であり乍ら、小松も曳かず、爲に心の結ぼれて晴やかでないのをいうたのである。「あま」は、鹽燒き漁りなどを業とする人。「海松(みるまつ)」は、「みる」のこと。「だに」は、せめて何々なりと

の意の助詞。

○海にて子の日の歌にては。子の日の遊びは野邊のものである、然るに海上で子の日を迎へて詠んだ歌としてはの意。

○いかゞあらん。どうあらうか、あまりよくもあるまいの意で、實は裏面に讃めたのである。

○今日なれど云々。子の日は今日であるが、小松も引かなければ、若菜も摘まない事だ。何となれば若菜を摘むべき春日野が、自分の漕ぎ渡る浦にないからといふ意。「若菜も」の「も」は、集合の意の助詞で、「若菜も摘ます」は、「小松も曳かず」の意を言外に含めたもの、複雜を單純化したのである。春日野は、奈良の郊外で、當時奈良の都人は春になると、この春日野に出て若菜を摘んでは一日の行樂を極めたもので、古今集「春日野の飛火の野守出でも見よ今幾日ありて若菜摘みてむ」「春日野の若菜摘みにや白妙の袖ふりはへて人の行くらむ」などいふがある、前の歌は、奈良の都人の詠んだものであらうし、後のは、貫之の作であるが、彼自ら奈良の都人になつて詠んだもの。又、古今集、賀歌、「内侍のかみの、右大將藤原朝臣の四十の賀しける時に、四季の繪かけるうしろの屏風に、書きたりける歌、春、春日野に若菜摘みつゝ萬代をいはふ心は神

ぞしるらむ」とある。屏風の繪にまでも、春といへば春日野の若菜摘みが畫かれる、それ程春日野の若菜摘みは季節を代表する娯樂であつた。

○おもしろき所。景色の趣のある所。

○土佐のさまり。阿波國板野郡鳴門村大毛島の南端に在る。今、土佐泊浦といふ。

○土佐といひける云々。土佐國に住んでゐた女。貫之が土佐國守で彼地に居つた所から、貫之の事をわざと斯く戯れておぼめかしく言ひ、實際には舟の人々は皆土佐に居た人であるのに、その女一人が土佐國に居たのだといふやうに言つて、次の歌をば、歌主の特殊的獨自的感慨を歌つたものに見せかけたのである。

○名たぐひ。類似の名。

○あなる。「あるなる」の略。

○あばれ。此語は、歎しいことにも、悲しい事にも、長い息をついて歎く程の事に言ふ詞。こゝは、あゝあゝと嘆息する意。

○年ごろを云々。土佐の泊は、自分が數年來住んだ所の土佐といふ名を、名に持つてゐるから、其處に寄り來る波をも、感深く見ることである。「年ごろを」の「を」は、上に「おんな翁になしつべし」又、古今集「めづらしき聲なちなくに時鳥ごゝらの年を飽かずもあるかな」「花の色は雪に交りて見えずとも香をだ

に匂へ人の知るべく」などある「を」と同じで、その事柄を強く思はせる意の助詞。「すみし所の名にしおへば」は、「住みし所の名を名にし負へば」といふ意を簡潔に言つたもの。「名にし負ふ」は、名に負ひ持つこと。「し」は強めの助詞。伊勢物語「名にし負はゞいざ言問はん都鳥わが思ふ人はありやなしやと」

三十日　雨風吹かず。海賊は、よるありきせざなりと聞きて、夜なかばかりに舟を出して、阿波の水門を渡る。夜なかなれば、西東も見えず。男女からく神佛を祈りて、この水門を渡りぬ。寅卯の時ばかりに、奴島といふ所を過ぎて、たな川といふ所を渡る。かく急ぎて、和泉の灘といふ所に至りぬ。今日海に波に似たるものなし。神佛のめぐみかうぶれるに似たり。今日舟に乗りし日より數ふれば、三十日あまり九日になりにけり。今は和泉の國に來ぬれば、海賊ものならず。

【通釋】
三十日、雨も降らず風も吹かない。海賊は夜は歩かないものだと聞いて、夜半頃出帆して阿波の鳴門を渡る。夜なかであるから、西東の方角も見えない。男も女も神佛に祈願して、やう〳〵の事でこの水門を渡つた。午前四時頃から六時ごろにかけて、奴島といふ所を通過し、田無川の沖を通る。このやうに急いで、和泉の灘といふ所に到着した。今日は海に波らしいものがない。これは、神佛に祈つたしるしがあつて、そのお惠みを蒙つたのであるらしい。今日で、舟に乗つた日から數へると、三十有九日になつた。今は和泉の國に來たから、海賊も恐しくない。

【釋語】
○せざなり。「せざるなり」の略。
○阿波の水門。阿波の鳴門をいふ。「水門」は、海水の出入する口。
○からく。辛うじて。やう〳〵の事で。「わたりぬ」にかゝる副詞。
○寅卯の時ばかり。寅の刻（午前四時）から、卯の刻（午前六時）にかけての頃。
○奴島。淡路國の海上にある島。今、沼島と書く。萬葉「み津の埼浪をかしこみ隱江の船笥せかれつ奴島の埼に」「淡路の野島の埼の濱風に妹が結べる紐吹き返す」
○田無川。和泉國泉南郡の西端にある村。「田無川といふ處をわたる」は、田無川の沖を通過する意。
○からく急ぎて。一生懸命に急いで。命からがら急いで。
○和泉の灘。和泉國の海を和泉灘と言ふ。但、此夜舟の泊つた所は、田無川と黒崎との間にある、和泉灘の中の一地點であるが、或特定の地名を擧げずに總名で言うたのだ。二日の條に「和泉の灘といふ所より」とあつて、黒崎箱の浦などいふ地名を擧げてあるから、或は和泉國の海岸に、和泉の灘といふ一地點があつたのかとも思はれるが、五日の條に、箱の浦から舟出して行つた事を「いづみの灘より小津のとまりをおふ」というてゐるから、矢張、總名と見るがよからう。

【通釋】
二月一日、朝の間雨が降り、正午頃止んだから、和泉の灘といふ所から漕ぎ出して行く。海上は昨日のやうに平らで、風もなく波も見えない。黒崎の松原を經て行く。所の名は黒く、濱邊の松の色は青く、それに磯邊に碎ける波の色は、雪のやうに白く、岸にまろぶ貝の色は赤い色で、五色には、もう一色足りない。
この間に、今日は箱の浦といふ所から、水夫どもは磯におりて、綱手を曳いて、磯傳ひにゆく。このやうに漕いでゆく間に、或人の詠んだ歌、

玉くしげ箱の浦波たゝぬ日は海を鏡と誰か見ざらむ

又、舟の主人公の言ふことに、「航海が此月までも延びた事よ」と嘆いて、その苦痛に堪へられないで、他の人も詠むのだから、自分も詠んでもよからうと言うて、氣晴しに詠んだ歌、

引く舟の綱手の長き春の日をよそかいかまで我は經にけり

この歌を聞く人が思ふ事また舟君のいはく、「此の月までなりぬること」と歎きて、苦しきに堪へずして、人もいふこととて、心やりにいへる、

引く舟の綱手の長き春の日をよそかいかまで我は經にけり

聞く人の思へるやう、「なぞたゞことなる」と、ひそかにいふべし、「舟君のからくひねり出して、よしと思へる事を、えしもこそしひへ」とて、さゝめきてやみぬ。俄に風波たかければ、とどまりぬ。

【語釋】
○風浪見えず。此句は、浪の方について、見えずと言うたもの。風も吹かず、浪も見えないといふ意。
○黒崎。泉南郡淡輪村。
○所の名は黒く松の色は青く云々。景色の描寫をするのに、腦裏に映じた印象を

○浪に似たるものなし。浪らしい浪がない。
○かうぶれる。「被(かうむ)れる」に同じ。
○ものならず。物の數でない。何でもない。

二日朔日　朝のま雨降り、午の時ばかりにやみぬれば、和泉の灘といふ所より出でゝ濡ぎ行く。海の上きのふの如くに、風波見えず。黒崎の松原を經て行く。所の名は黒く、松の色は青く、磯の波は、雪の如くに白く、貝の色は蘇芳(すはう)にて、五色に今一色ぞ足らぬ。
此の間に、今日は箱の浦といふ所より、綱手(つなで)ひきて行く。かく行く間に、ある人のよめる歌、

玉くしげ箱の浦波たゝぬ日は海をかゞみと誰か見ざらむ

に、「なぜまア平凡な歌であるのか」と、ひそかに批評するであらう。然し「舟の主人公のやうやく考へ出して、自分ではよい歌だと思つてゐる歌を、強ひてわるく言ふ事は出來ない」と言うて、小聲に何か言うて止んだ。突然、風吹き涙が高いから、航行を中止してとゞまつた。

描かずに、まづ作者の頭の中に、五色といふ概念を作り上げ、それに見る所のものを、強ひて當て篏めようとした。それが爲にまづ、黒崎といふ名から、所の名は黒くといひ、次に青い松と白い涙とを數へあげ、貝の赤色を配し、黄色を代表するものを見付け得なかつたので、「五色に今一色ぞたらぬ」と言ひすてゝ終つた。景色を具體的に活現させる事が出來ず、概念的な技巧的な、無味乾燥な駄洒落半分のものになつて終つた。之は彼が藝術に對する態度の缺陷を遺憾なく表はしてゐるものである。

○蘇芳。赤い色。

○今ひといろ。「今」は、もうの意、添へ加へる意の詞。

○箱の浦。和泉國泉南郡淡輪村箱作の海岸。

○綱手。船に繋いで曳く長い綱。「綱手をひきて行く」は、綱を船に繋いで、磯傳ひにその綱を曳いて進み行くこと。

○玉くしげ云々。箱の浦の海が靜かで涙の立たない日は、海を鏡と誰が見なからうぞ、誰も鏡と見るといふので、「玉くしげ」を箱の枕詞に用ゐ、且鏡の緣語としたもの。感動の微弱な理窟ぽい歌である。「海を鏡と誰か見ざらん」といふ、言ひ方が既に理窟である。「玉くしげ」の「玉」は美稱、「くしげ」は櫛笥で、櫛を入れる箱。

○船君。貫之をさす。

○この月までなりぬること。最初は、正月中に都へ歸り着かうと思つたのに、風涙の爲に豫定が狂つて、二月までにもなつた事よ。

○くるしきに堪へずして。旅程の長びいた苦痛に堪へられないで。

○人もいふことて。ほかの人も詠むのであるから、自分も詠まうと言うて。

○ひく船の云々。船に綱を繋いで曳いてゆく、その綱手のやうな永い春の日を、四十日五十日まで、自分は旅に經過した。「ひく船の綱手の」は「ながき」の序であるが、單に「ながき」の譬喩に用ゐたのみでなく、此場合の作者の境遇を暗示してゐると共に、綱手を曳いて磯傳ひにゆく悠長な氣分が、歌全體の情趣を一層豊かにしてゐる。長い溜息がそのまゝ調子の上に現はれてゐて、理智的な點がなく、此日記中での優れた歌とするに躊躇しない。

○なぞたゞごとなる。何故、マア尋常平凡な歌であるのか。「なぞ」は「何故ぞ」で、源氏・空蟬「なぞ、かう暑きに此格子は下されたる」「たゞごと」は、平談俗語といふに同じだ、爰は、當時の風尙である理智的な技巧的な點のないのをいふのであらう。

○辛くひねりいだして。辛うじて考へ出して。
○えしもこそしひへ。強ひてわるく言ふ事は出來ぬ。「しも」「こそ」共に強めの助詞。「しひへ」は、「しひれ」の誤であらう。「しひ」は「強ひ」の意。「れ」は打消の「ず」の已然形。一説に「しひ」は「誣ひ」で、枉げて惡くいふ意である。
○さゝめき。小聲で物をいふこと。

二日　雨風やまず　日ひと日、夜もすがら、神佛を祈る。

【語釋】
○日ひと日。一日中。
○神佛をいのる。風浪の鎭まるやうに、神佛に祈願をかけたのである。

三日　海の上昨日のやうなれば、舟出さず。風の吹く事やまねば、岸の波立ちかへる。これにつけてもよめる歌、

【通釋】
二日、雨風が止まない。終日終夜、神佛に祈願する。

【通釋】
三日、海の上が昨日と同じで涙が暴いから、舟を出さない。風の吹くのが止まないから、岸の涙が盛んに寄せては返す。この涙のかへるのを見るにつけても、羨しくて詠んだ歌、

緒をよりて甲斐なきものは落ち積る
　なみだの玉をぬかぬなりけり

このやうにして、今日は暮れた。

かくて今日は暮れぬ。

【語釋】
○岸の涙たちかへる。岸に打寄せた涙のまた沖の方にかへる意か。次に「これにつけても」とあるは、涙のかへるのを見るにつけても、かへる涙が羨しくての意であらう。伊勢尾張のあはひの海づらを行くに、涙のいと白くたちかへるを見て、いに、伊勢物語に、「昔、男ありけり。京にありわびて、あづまへゆきける」とゝしく過ぎにし方の戀しきに羨しくもかへる涙かな。となむよめりける。」或は又、岸の涙が盛んに立つ。「かへる」は、其動作の何遍も〳〵反復される意の接尾語で、その事の甚しきをいふ。「たちかへる」「湧きかへる」「煮えかへる」「消えかへる」など、皆その事の甚しい意である。
○緒をよりて云々。緒紐を撚つても撚り甲斐のないのは、故郷に歸りたくても歸られない悲しみの爲に、澤山流れ落ちる涙の雫を、貫きとめない事であるよといふので、若し涙の玉を緒に貫きとゞめる事が出來るならば、どんなに悲しい

か、その悲しみの程もわかるであらう、隨って波風も同情してくれるであうらにと、暗につれなく立つ浪を恨んだものである。爰にだしぬけに「緒を撚りて」と言つたのは、艙中に緒をよる者がゐたので、それにつけて歌つたのであらうといふ。

【通釋】四日、舵取が「今日は風の模樣や雲脚が甚だわるい」と言うて、舟を出さずにしまつた。だが終日波も立たないし、風も吹かない。この舵取は天候も豫測出來ない糞乞食であるよ。此碇泊所の濱邊には、色々の立派な貝や石が多い。それだから、その貝や石を人々の舟からおりて拾ふのを見て、

四日　舵取「今日風雲のけしきはなはだあし」といひて、舟出さずなりぬ。しかれども、ひねもすに波風立たず。此の舵取は、日もえはからはぬかたゐなりけり。此の泊の濱には、くさ〴〵のうるはしき貝石など多かり。かゝれば、たゞ昔の人をのみ戀ひつつ、舟なる人のよめる、

寄する波うちも寄せなむわが戀ふる
人わすれがひおりてひろはむ

といへば、ある人堪へずして、舟の心やりによめる、

たゞ亡兒の事をばかり戀しく思ひ〳〵して、舟に居る人の詠んだ歌、

寄する波うちも寄せなむわが戀ふる
むわが戀ふる人忘れ貝
おりてひろはむ。

と、うたうたから、或人が悲しさに堪らないで、舟の氣慰みに詠んだ歌、

忘貝拾ひしもせじ白玉を
戀ふるをだにも形見と思はむ

と詠んだ。女兒に對する愛情の爲には、親は聰明さを失ふであらう。

「玉のやうに美しくもなかつたらうに」と人は言ふであらうか。然し又、「死んだ子は顏が美しかつた」といふ諺もあつて、

忘貝拾ひしもせじ白玉を
戀ふるをだにも形見と思はむ

となむいへる。をんな兒のためには、親をさなくなりぬべし。

「玉ならずもありけむを」と人いはむや、されども、「死にし兒顏よかりき」といふやうもあり。なほ同じ所に日を經る事を歎きて、ある女のよめる歌、

手をひでゝ寒さも知らぬいづみにぞ
くむとはなしに日ごろ經にける

【語釋】
○かぜ雲のけしき。風の模樣や雲脚。
○ひれもす。終日。
○日もえはからぬ。天候さへも豫測し得ない。「日も」の「も」は、側の複雜を單純化した言ひ方で、機取は天候の觀測がその職分である筈だのに、その天候すらも

死んだ者は誰でもよく思はれるものだ。矢張同じ所に、日數を經過する事を嘆いて、或女の詠んだ歌

手をひでゝ寒さも知らぬ泉にぞくむとはなしに日ごろ經にける。

觀測出來ない、況んや他の事は何にも出來ないといふ意を含めた、極めて罵倒した言ひ方である。

○かたゐ。乞食。機取を罵つて言うたもの。宇治拾遺「心なしのかたゐとはおのれがやうなるものないふぞかし」とあるも、罵つて言うたのである。又、卑下の詞にも用ゐる。伊勢物語「そこにありけるかたゐ翁板敷の下に這ひ歩りきて」とあるは、自ら卑下して言うたもの。

○くさ〳〵。さま〳〵。

○うるはしき。立派な。玉小櫛「すべてうるはしといふ言は、古書にては、美麗の意なれども、物語などにいへるは、たゞ美麗の意にはあらで、俗言に、きつとしてかたいといふ意、亂れず正しき意にいへり」萩原廣道は「端正の字によくあたれり、威儀の亂れず美麗にもてつけたるより轉れる也」と言うてゐる。

「くさ〳〵のうるはしき貝・石などおほかり」の句に、人々は皆磯におりて、それらの貝や石を拾うて遊んだ意を含めてある。

○か、れば。貝や石が多くて、人々は皆それを拾つて遊ぶから。

○昔の人を云々。人々が貝など拾つて遊ぶ事から、死んだ子供を思ひ出して戀しく思ふのである。

○船なる人。人は皆濱邊におりて樂しげに遊んでゐるに、自分獨り亡兒を思うて、船中に暗然沈思してゐる人といふ意味で、特に「船に居る人」と云うて、亡兒の母をさしたもの。創見に「まことに此濱邊には、今もいろ〳〵の貝石多く、なつかしきわたりなり。皆おりたちて拾へるを見て、我が兒も居らば、同じさまにものせんをと、彼の母などのよまれたる也。船なる人のよめると、殊更にいへるにて、餘の人は、濱邊に遊べる事しるし。さる面白き濱づらに、數日舟かゝりしてあらんに、女をさなき者は更なり。誰の人かは、おり立ちてものせざらん。況んや今日しも終日波風なぎたらんをや。もとより論なきことなれば、かたへに見せて、委しく言はざるなり。諸註たゞ貝石を見やりて思ひ出づるとするもの謬れり。心を用ゐて見るべし」

○よする涙云々。岸に寄せ來る波が、忘貝を打ち寄せて欲しい。さうすれば、自分の戀しい人を忘れるといふ、その忘貝をおりて拾はうとの意、亡兒を戀しく思ふ情に堪へられないから、せめて忘貝でも拾うて、しばし憂き思ひを忘れようといふ、愼ましやかな可憐な女らしい心持を詠んだもの。萬葉集「わが背子に戀ふれば苦し暇あらば拾ひて行かむ戀忘貝」とあるも、同じ趣向である。「忘貝」は「うつくしき貝なるゆゑに、見れば憂き事を忘るとて、名づく」（契沖）

といふ。「わが戀ふる人わすれ貝」は、自分の戀ふる人を忘れるといふ名の忘貝といふ意に言ひつゞけたもの。

○ある人。貫之をさす。

○堪へずして。悲しさに堪へられないで。

○船の心やり。舟の中の心慰め。

○わすれ貝云々。自分は忘貝を拾ひもすまい、なぜなら、せめて、白玉のやうな愛らしい我子を、戀しく思ひ出す事をでも、亡兒の記念としようからと言ふので、貫之の心の中には亡兒の美しかつた姿が忘れられなかつた、またその美しい可愛い姿を想ひ出す事が此上もない慰めでもあつた。白玉に譬へたのは、あながち親の慾目から許りではなく、事實さうであつたかも知れぬ。死んだ子供を矢鱈に戀しく思ふ母親よりも、亡兒の美しい姿を幻想に描いて樂しむ所に詩人としての貫之が居るやうにも思はれる。「白玉」は、亡兒を贊めうつくしんで言うたもの、萬葉集卷五、「白玉の吾子古日は」同卷九、「白玉の人のその名を」源氏、桐壺「玉のをのこ御子」宇津保物語、俊蔭「玉の光輝くをのこ子を生みつ」などある。「かたみ」は、形見で、後からその人を思ひ出す爲に殘しおく記念物。

○女兒のためには云々。子供に對する愛情の爲には、親は理性を失つて、愚かになつて終ふであらう。「白玉を戀ふる云々」と、我子を白玉に譬へた事を、人が非常識だと笑ふかも知らんと思つて、その辯解をしたのである。こゝに貫之の性格が現はれてゐる。燃えるやうな情熱は、時として理性を蹂躙する、論理を超越する。然も立派な詩がさうした時に生れる。冷やかな理性の制肘を受け、論理の條理にのみ拘泥すると、概念的な理智的な理窟詰めの歌しか詠めなくなる。貫之は詩人ではなくて常識家である、條理のたつた、こじんまりした歌は詠めるが、感動的な歌はよめない。憶良が自分の子を「白玉の吾が子古日」と詠んでゐるのに比して、二人の性格の相違、詩人としての相違を見る事が出來よう。

○玉ならずもありけんをと云々。玉のやうに美しくもなかつたらうにと、人は言ふであらうか。人の批評を豫想して、自身から先手をうつて言うてゐる。

○死にし子顏よかりき云々。死んだ子は顏が美しかつたといふ諺もある。だから白玉に譬へても、さまで非常識な事ではあるまい。

○日をふる。日數を經過する。

○手をひでゝ云々。此歌は、和泉國の和泉（いづみ）に湧き出る泉の意を言懸け、それが地

【通釋】五日、今日やう〳〵の事で、和泉の灘から小津の泊に向つて航海する。濱邊には松原が見渡す限り遠くつゞいてゐる。單調な眺め、長い航海に倦いて苦しいから、詠んだ歌、

行けどなほ行きやられぬは妹がうむ
をづの浦なるきしのまつばら

このやうに歌ひ〳〵して行く間に、「舟をはやく漕げ、日和がよいから」と催促すると、舵取が水夫どもに向つて言ふことは、「み舟から舟を早く漕げと仰つしやるのだ。朝の北風の吹いて來ぬ以前に、綱手をはやく引張れ」といふ。此歌のやうに聞える詞は、それは舵取の自然に發した詞である。舵取は、ひたすら自分が歌の口調めいた言葉を使はうと思つて、使ふのでもない。たゞ聞く人が「不思議に歌らしい口調で言うたものだよ」と思つて、書き出したれば、いかにも三十一文字であつた。「今日は波が立つてくれるは、舵取のおのづからの詞なり。舵取はうつたへに、われ歌のやうなる事いふとにもあらず。聞く人の「あやしく歌めきてもいひつるかな」とて、書き出せれば、げに三十文字あまりなりけり。

「今日波な立ちそ」と、人々ひねもすに祈る。しるしありて、風波立たず。今し鷗むれゐて遊ぶ所あり。京の近づくよろこびのあまりに、あるわらはのよめる歌、

祈り來るかざまと思ふをあやなくも
かもめさへだに波と見ゆらむ

といひて行く間に、石津といふ所の松原おもしろくて、濱邊とほし。また住吉のわたりを漕ぎ行く。ある人のよめるうた、

今見てぞ身をも知りぬる住の江の

名の和泉である事を聞かせる爲に、「手をひでゝ寒さも知らぬ」といふ説明句を附け、さて泉の縁で、「何もせずに空しく」といふ意を、「汲むとはなしに」と云うたもの。和泉國に泉の意を言懸けたのが此歌の趣向で、何の味もない、全く技巧本位の文字の遊戯に過ぎない。「ひで」は、浸すこと。「日ごろ」は、數日の意。

五日　今日からくして、和泉の灘より小津の泊をおふ。松原目もはるゞ〳〵なり。かれこれ苦しければ、よめる歌、

行けどなほ行きやられぬは妹がうむ
をづの浦なるきしのまつばら

かくいひつゝ來る程に、「舟とく漕げ、日のよきに」ともよほせば、舵取ふなこどもにいはく、「み舟よりおほせたぶなり、朝北の出で來ぬさきに綱手はや引け」といふ。此の詞の歌のやうな

ろな」と人々が終日祈る。その甲斐があつて、風も波も立たない。今丁度鳴の群つてゐて遊ぶ所がある。都の近くなる喜びの餘勢で、或る童の詠んだ歌、

祈り來る風間と思ふを
あやなくもかもめさへ
だに波と見ゆらむ。

と詠んで行く間に、石津といふ所の松原が趣があつて、汀が遠く連つてゐる。又、住吉の海邊を漕いでゆく。或人の詠んだ歌、

今見てぞ身をも知りぬ
る住の江の松よりさき
に我はへにけり。

こゝで死んだ女兒の母

松よりさきに我はへにけり

こゝにむかしつ人の母、一日かた時も忘れねばよめる、

住の江に舟さしよせよわすれ草
しるしありやと摘みて行くべく

となむ。うつたへに忘れなむとにはあらで、戀しきこゝちしばしやすめて、又も戀ふる力にせむとなるべし。

【語釋】

○和泉の灘。朔日に、箱の浦の邊りで、俄に風浪の爲に碇泊した。今其處から出かけて行くので、其地點をさして、和泉の灘と云うたもの。特稱の代りに總名を用ゐたのである。

○小津の泊。今の泉北郡大津町のこと。

○めもはるゝなり。見渡される限り遠く松原の海岸に續いてゐるのをいふ。

○苦しければ。松原の遙かに引き續いてゐるのを見て、行く先も遠いやうに思はれ、心に倦怠疲勞を感じて苦しく思ふのである。

が、一日片時も、その亡兒のことを忘れないから、詠んだ歌、

住の江に舟さしよせよ
忘草しるしありやと摘
みてゆくべく。

といふのである。「忘草しるしありや」と、言うたのは、ひたすら忘れて終はうといふのではなくて、戀しい心持を暫時休めて、再び戀する時の潛勢力にしようといふのであらう。

○ゆけどなほ云々。行つても〳〵矢張行き過ぎる事の出來ない程に長くつゞいてゐるのは、小津の浦にある、岸の松原である。「いもがうむ」は、妹がうみつむを意。「小津」の「小」に「麻」の意を兼ね、「妹が績む麻」といふ意で、「小津」に言懸けたもの。枕詞であるが、同時に「績む」に「倦む」意を兼ねて、單調な航海に倦み疲れた心持を匂はせてゐる。

○かくいひつゝ來る程に。このやうに歌など詠み〳〵して行く間に。

○日のよきに。日和がよいに因つて。

○御船。貫之の乘つてゐる舟を尊んで言うたもの。

○仰せたぶなり。仰せ給ふのである。御船から舟を早く漕げと仰つしやるのである。これは舵取が舟から、磯におり立つて綱手を曳く舟子どもに呼びかけたのである。

○あさぎた。朝吹く北風。

○此の詞の歌のやうなるは。此の歌のやうなる詞はの意。舵取の言葉の歌の口調に似てゐるのをいふ。

○うつたへに。ひたへに。うちたへに。ひたすらに。萬葉「祢樹(かむき)にも手は觸るちふをうちたへに人妻といへば觸れぬものかも」

○歌めきて。歌らしく。

○三十文字あまりなりけり。「三十文字あまり一文字なりけり」といふを、略して言うたもの。

○なたちそ。「な……そ」は、間に動詞を挿んで禁止の意を示す助詞。

○よろこびのあまりに。喜びの餘勢で。

○いのりくる云々。只今は風浪のたゝぬやうにと、神佛に祈りつゝ漕いで行く、その風の絶間であると喜んでゐるのに、なぜ理窟もなく、鷗までさへ浪と見えて、自分達の心を暗くするのであらうか。「風間」は風の絶間。「風間と思ふを」は「風間を」の意、思ふは輕く添へた詞、萬葉「大伴の御津の濱なる忘貝家なる妹を忘れて思へや」とあるも、たゞ「忘れんや」の意。「あやなく」は、條理の立たぬこと、譯のわからぬこと。古今集「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ」

○石津。和泉國泉南郡。堺市の南にある。

○濱邊とほし。汀の遠く連つてゐるをいふ。

○住吉。攝津國住吉郡。此地名を須美與志と唱へるは後世の事で、奈良朝頃迄は須美乃延とよんだ、古今集に「住ふしと海人は告ぐとも長居すな、人忘れ草生

ふといふなり」とあつて、此前後から住吉と云ひそめたものである。住吉神社は、表筒男・中筒男・底筒男の三神を祭つてある。攝津國風土記「所三以稱二住吉一者、昔息長足比賣天皇世、住吉大神現出而、巡二行天下一覓二可レ住國一時、到二於沼名掠之長岡之前一、乃謂、斯實可レ住之國、遂讃稱之云二眞住吉國一、乃是定二神社一、今俗略之直稱二須美乃叡一」とある。又、書紀の息長帶比賣命が西國から海路を歸り上り給ふ所に、「忍熊王引レ軍更返屯二於住吉一時、皇后聞二忍熊王起レ師以待レ之、命三武内宿禰懷二皇子一、横出二南海一、泊二于紀伊水門一、皇后之船直指二難波一、于時皇后之船廻二於海中一、以不レ能レ進、更還二務古水門一而卜レ之、於レ是……表筒男中筒男底筒男三神一、誨下之曰吾和魂宜レ居二大津渟中倉之長峽一、便因看中往來船上、於是隨二神教一、以鎭坐焉、則平得度海」とあり、海路の守神である、だから萬葉集廿卷に「墨江の、あが皇神に、幣まつり、祈り申して、難波津に船を浮けすゑ」などあつて、海路の平安を此大神に祈つたものである。

○ある人。貫之をさす。

○今見てぞ云々。今住吉の松を見てはじめて住吉の松の若さも、又吾身の年老いた程合ひをも知つた、住吉の松は遠い昔からあるもので、だいぶ年數を經過し

てゐるものと思つてゐたが、その住吉の松は依然として青いのに、自分の頭は白くなつて終つた。住吉の松の永久に翠である姿に對して、自己の老いゆく感慨を寄せて終つた。住吉の松は古來有名なもの、萬葉集卷一「霰打ちあられ松原住吉の弟日をとめと見れど飽かぬかも」とあり、和泉の灘から小津石津にかけて、長汀曲浦の間に、青松白砂が映帶し、それが住吉の濱に至つて盡きてゐる。古今集「われ見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松幾代經ぬらむ」「住吉の岸の姫松人ならば幾代か經しと問はましものを」などと詠み、「住の江のまつ程久になりぬれば芦たづの音に泣かぬ日はなし」といふやうに、待つ事の久しい譬喩に詠まれてもゐる。

○むかしつ人の母。昔の人、卽ち亡兒の母。貫之の妻。

○わすれれば。亡き子の事を忘れないから。

○住の江に云々。住の江に舟を漕ぎ寄せよ、その岸にあるといふ忘草をば、亡き子供を戀しく思ふ悲しい愁思を忘れる効驗があるかどうか、摘んで行かうが爲に。「わすれ草」は、萱草のこと、文選「萱草忘憂」とある所から、忘れ草と飜

【通釋】
このやうに歌を詠んで、濱邊を眺めては、憂ひに沈み〳〵して行く間に、遇然風が吹いて、漕いでも〳〵、すん〳〵後しざりして、すんでの事に沈沒して終ふであらう。舵

んだので、憂き事を忘れる草の意。然し歌に「忘れ草」と詠んであるのは、その草を正確にとらへて言うてゐるのではなく、假に設けて言うたもの。古今集「道知らば摘みにも行かむ住の江の岸に生ふてふ戀忘草」

○うつたへに云々。これは「忘草しるしありやと摘みて行くべく」と詠んだ母親の心持を忖度して、こゝに説明したものであるが、同時に之は貫之の亡き兒に對する心持であり、態度である。彼は亡兒の追憶に生きてゐた。追憶は悲しい然し全然忘れ果てることは、より以上に彼には堪へられない苦しみであつた。亡兒に對する愛は、追憶となつて、彼に慰安を與へた。美しいもの愛らしいものに對する追憶の世界はやがて詩の世界である。

かくいひて眺めつゝ來る間に、ゆくりなく風吹きて、こげども漕げども、しりへにしぞきにしぞきて、ほと〳〵しくうちはめつべし。舵取のいはく、「此のすみよしの明神は、れいの神ぞかし。ほしき物ぞおはすらむ」とは、今めくものか。さて「幣をたてまつり給へ」といふに隨ひて、幣たいまつる。かくたいまつれど、

取の言ふことに、「この住吉明神は、いつも物を欲しい時は風を立てゝ舟を進ませぬ神である。だから今日も何か欲しい物がおありなさらう」といふのは、當世風な欲深い神である事よ。さうして「幣を獻上しなさい」と言ふにまかせて、幣を奉る。このやうに幣を獻上するけれど、風が少しも息まないで、いよ〳〵吹きに吹き、いよ〳〵立ちに立ち、風や波が危險であるから、舵取がまた言ふ事に、幣では神樣の御心が滿足しないから、御舟も進まないのであるやうだ。矢張嬉しいと思ひなさらもはら風やまで、いや吹きにいや立ちに、風波の危ければ、舵取またいはく、「幣には御心のゆかねば、御舟も行かぬめり。なほ嬉しと思ひ給ふべき物、たいまつり給へ」といふ。又いふに隨ひて、「いかゞはせむ」とて、「眼もとそ二つあれ、たゞ一つある鏡をたいまつる」とて、海にうちはめつれば、いとくちをし。さればうちつけに、海は鏡のおもてのごとなりぬれば、ある人のよめる歌、

千早ぶる神の心を荒るゝ海に
　鏡を入れてかつ見つるかな

いたく住の江の忘草、岸の姫松などいふ神にはあらずかし。目もうつら〳〵、鏡に神の心をこそ見つれ。舵取の心は、神の御心なりけり。

う品物を獻上しなさい」と言ふ。また言ふにまかせて、「致方ない」と言うて、「人間には眼は大切なものだが、その眼でさへも二つある、然るにそれをばやめて、たつた一つの鏡を奉る」と言うて、海に投げ込んだから、甚だ殘念である。鏡を投げ入れたから卒爾に海は鏡のやうに平らになつたから、或人の詠んだ歌、

千早ぶる神の心を荒るゝ海に鏡を入れてかつ見つるかな

住吉の明神は、甚だ、歌に詠まれる「住の吉の忘草」とか「岸の姫松」などいふ優雅なやさしい神

【語釋】

○ながめつゝくる。住吉の濱邊を見渡し〳〵してゆくといふ意に、亡兒の事を想出して物思ひに沈みつゝ行く意を言懸けてある。

○ゆくりなく。雄略記に「不意（ゆくりなく）」と訓んである。端なく、思ひがけなくの意。源氏・夕顔「いざよふ月にゆくりなくあくがれん事を」

○しりへ。尻方の義。後方。

○しぞきにしぞき。すん〳〵退く。枕草子「涙をたゞ落しに落す」などいふやうに、同じ動詞を「に」といふ助詞で二つ重ねる時は、其意味が一層強くなる。

○ほと〳〵しく、「ほとほと」は、逐々（ほとり〳〵）で、其近き邊りまで至る意、俗に、すんでのこと、又は、もちつとでなどいふに同じ。萬葉「わが盛りまた變（を）ちめやもほと〳〵に奈良の京を見ずかなりなむ」とあるは、奈良の都を見なくなるにちかからんかとの意。「ほと〳〵し」は、「ほと〳〵」に形容辭（はぶりいは）「しく」の添つたもので、意は同じであるが、然し萬葉「み幣（ねさ）とり神の祝が齋ふ杉原、薪伐りほとほとしくに手斧取らえぬ」拾遺集「宮造る飛彈の匠の手斧音ほと〳〵しかる目をも見しかな」「歎きこる人いる山の斧の柄のほと〳〵しくもなりにけるかな」後選集「人の許より久しう心地煩ひて、ほと〳〵しくなんありつるといひ

て侍りければ」宇津保物語「ちひさくて病してほと〳〵しかりけるに」などある「ほと〳〵し」は、すべて危い事に言うてゐる。

○うちはめつべし。船を海にはめ込んで終ふであらう。

○明神。靈驗の明かに現れ給ふ神の意であるとも、又、名ある神の義であるともいふ。

○例の神。いつもの神。何時も物を欲しく思ふ時は風を起し給ふ神であるとの意。

○今めくものか。當世風である事よ。「住吉の明神は、いつもの、物を欲しい時には風を起す神である。何か欲しい物があらせられるであらう」と言つた舵取の詞を受けて、「さては明神も當世の人心と同じく慾心の深い事よ」と驚嘆したもので、作者の詞である、「ものか」は、驚き怪しむ意の嘆辭。

○たいまつり。「たてまつり」の音便。献上すること。

○もはら。全く。「もはら風やまで」は、風が全然息まぬこと。

○いや吹きにいやたちに。「いや吹きに吹き、いや立ちに立ち」の略。いよ〳〵烈しく吹き、いよ〳〵甚しく立つ。

○御心のゆかれば。神の御心が滿足しないから。さて爰は、「御心のゆかれば御

舟もゆかぬめり」と、同音意義の語であやなして、諧謔を弄したのである。

○いかゞはせん。何としようぞ仕方がないとの意。

○まなともこそ二つあれ云々。人間の大切な物としては、眼である、その眼でさへも二つあるが、それをばやめて、たつた一つの鏡を献上するとて。「まなともこそ二つあれ」は、眼も二つあるにもせよと、下につゞく意を持つてゐて、下に反對の意を述べる時に用ゐる句法である。古今集「仇なりと名にこそ立てれ」とあつて、下に「櫻花年に稀なる人も待ちけり」（年の内にもたまさかにしか來ない人も散らすに待ちつけた、だから仇どころではない）といふ反對の意を述べてゐる。爰も、「眼もこそ二つあれ」の下に、「それをば奉らないで」といふ意の句が省かれてゐるのだ。眼と鏡とを對照し、眼は二つあるがたつた一つの鏡を奉るといつて、眼、卽ち命よりも鏡を大切らしく言ひなしたのは例の滑稽である。

○うちつけに。卒爾に。たゞちに。

○ちはやぶる云々。一方では涙の荒れる海に鏡を投げ入れ、一方では、神がはたして物を欲しがるかどうか、その神の心を見た事であるよ。「かつ」は、かれとこれと事の二つ交る時にいふ詞、鏡を入れるといふ事と、神の心を見るといふ

事との二つが交る意を表はすので、萬葉「世の中し常斯くのみと且知れど痛き心はしぬびかねつも」は、一方に世の中は果敢ないものと知つてゐるが、一方に悲しい情が堪へられないとの意。萬葉「秋風の寒き此頃下に着る一方では、いとしい人の形見とかつもしぬばむ」は、秋風の寒い此頃下に着る一方では、いとしい人の形見として、なつかしく思ひ出さうとの意。「鏡をいれて」は、鏡を海に投げ入れたことであるが、同時に海の面が鏡のやうに靜かになつた意を添へて、「海面の鏡の如くなつた事によつて神の心を見た意を含め、「かつ見つるかな」の「見る」は、萬葉集にも、「眞澄鏡手に取り持ちて見れど飽かぬ君におくれて生けるともなし」「眞澄鏡直にし妹を相見すば我が戀止まじ年は經ぬとも」など、「眞澄鏡」を「見る」の枕詞としてゐる程で、鏡の緣語に用ゐたものであるが、更に、神の心を鏡に映して見たと云つた心持を添へて、例の諧謔を弄したもの。「ちはやぶる」は、「いちはやぶる」の略、神の枕詞。「いち」は、「稜威」と通うて、猛き勢をいひ、「はや」は、たけく疾きこと、「ぶる」は形容辭である。

○いたく。「あらすかし」につゞく副詞。

○住の江の忘草岸の姫松などいふ神。「住の江の岸におふてふ戀忘れ草」「住の江の岸の姫松幾代經ぬらむ」などと歌に詠まれてゐるやうな優美な神ではなく、

ある人の歌に「ちはやぶる神」と詠んだ如く、猛く恐しいあらぶる神であるとの意。卽ち歌に「ちはやぶる神」といつた意味を肯定したものである。「ちはやぶる」は、古事記「以二爲於此國道速振荒振國神等之多在一」書紀「慮レ有ニ殘賊强暴橫惡之神者一」などあり、猛く强い意で、あらぶる神をいふのが本で轉じて一般に「神」の枕詞となつたもの。「ちはやぶる人」(猛く烈しい人)「ちはやぶる金の御崎」(浪暴く恐しい意)などとも用ゐる。一說に「風波の靜まつて海面の澄むを住みにかけ、其の澄と姫松の姫とは共に荒きには似つかはしからねば、かく綾なして書けるならむ」と言うてゐるが、「住の江」に特にその樣な意味を持たせたものでなく、單に歌に讀まれてゐる忘草と姫松とに優美の意を代表せしめたものである。

○目もうつら〳〵。「うつら〳〵」は「つら〳〵」と同じで、「う」は接頭語、「つら〳〵」は、連々で、絶えず打續く意、異心もなく心を入れて物を見るのを、「つら〳〵見る」といふ。萬葉「撫子が花取り持ちてうつらうつら見まくの欲しき君にもあるかも」また「目もうつら〳〵」は、「目もあやに」「目も遙に」などいふと同じで、見る目も熱心にの意。

○鏡に神の御心云々。鏡を投げ入れる事に依つて、神の御心の樣子を見たのを、

鏡は物の姿を映して見るものであるから、見る眼も熱心に鏡に向つて見る事によつて、其處にうつる神の御心のさまを見た事であると、言ふやうに言ひなし、同時に、鏡のやうに靜かに和ぎた海によつて神の御心のある所を見たいふ意を添へて、海の平らかになつたのを喜ぶ意を匂はしてゐる。

○舵取の心は神のみ心なりけり。海のさまが舵取の言うたまゝになつたから、舵取の心はやがて神の御心に一致してゐるよと、表面に舵取を讃め上げ、裏面に神の御心も矢張舵取と同じ慈深い御心であつたといふ意をほのめかして、揶揄したもの。

六日　みをつくしのもとより出でゝ、難速の津を來て、川尻に入る。皆人々、おんなおきな、額に手をあてゝ喜ぶ事二つなし。かの舟ゐひの淡路の島の巨子、都近くなりぬといふを喜びて、舟底より頭をもたげて、かくぞいへる。

いつしかといぶせかりつる難波潟

【通釋】六日、みをつくしのある所から出て、難波津に來て、淀川の河口に入る。皆の人達女や翁が額に手をあてゝ喜ぶ事が比類ない。かの船醉ひの淡路の島の巨子が、都に近くなつたといふのを喜んで、舟底から頭を持ち上げて、次のやうに詠んだ、

いつしかといぶせかりつる難波潟蘆こぎそけてみ舟來にけり。

甚だ案外な人が詠んだから、人々が不思議に思ふ。その中でも、心持のわるい舟君が、ひどく怒心して、「船醉ひをして青くなつて居られた御樣子には、不似合な上出來な歌であるよ」と言うた。

蘆漕ぎそけてみ舟來にけり

いと思ひの外なる人のいへれば、人々あやしがる。これがなかに、こゝちなやむ舟君いたくめでゝ、「舟ゐひしたまひし御顏には、似ずもあるかな」といひける。

【訪釋】

○みをつくし。水脈津籤で、江海の深い水脈に杙をたてゝ、往來の舟がその杙を目當に漕ぐ料とするもの。水脈は河の中で水の深く流れる筋。爰にいふのは、海の中にたてゝある、みをつくしである。萬葉「みをつくし心盡して思へかも、こゝにも本名夢にし見ゆる」

○難波の津をきて。「難波の津」は攝津國難波の港で、昔は西國から上る船は皆此處に泊つたものである。「を」は、後撰集「人をいひわづらひてつかはしける」又は、俗に「あの人をせいく言うた」などいふ「を」と同じく、強く言ふ詞「に」の意。

○河尻。河の海に入る所。河口。爰は淀川の河口である。

○額に手をあてゝ。ひどく悅ぶ時のさまであらう。源氏、玉葛「ひたひに手をあてゝ念じ入りて居り」榮華物語「よる晝額に手をあてゝ念じ奉りたり」などあるは、祈るときのさまであり、源氏、手習「額に手をあてゝ、怪しこれは誰そと、しうれげなる聲にて見おこせたる」とあるは。物を見る時のさまである。

○二つなし。類ひないこと。宇津保物語「心のさがなき（意地のわるい）ことふたつなし」

○かの船醉の淡路の島の巨子。「船醉のかの淡路の島の巨子」といふ意で、廿六日の條に、「此の中に淡路のたうめといふ人のよめる歌」とある、その淡路のたうめがさしてゐるのだ。この老女は人々の中で一番舟に弱かつたのであらう。だから「船醉の」といふ有難い形容詞を頂戴したのである。一月九日の條に、「かく行きくらして、泊にいたりて、おきな人ひとり、たうめひとり、あるが中に心地あしみして、ものも物し給はでひそまりぬ」とあるも、船醉の結果であつた事は想像されるが、然し爰に「かの船醉の」とあるを、直に九日の條にある「心地あしみして」とあるのを指してゐるものと解するのはよくない。「かの」は「淡路の島の巨子」にのみかゝるので、その卽ち船醉の常習者である、かの「追風の」歌を詠んだ淡路の島の巨子の意。「巨子」は、「おほいぎみ」と同じで、第一の姉君のこと、男では太郎といふに同じ、大和物語「故御息所の御姉、おほい子にあたり給へるなむ、いとらうしうしう」とあるも、第一の姉君の意。然し爰は尊稱に用ゐたものであらう。この老女は貫之に仕へてゐた女であるが、わざと鄭重に取扱つて、過分の敬意を拂ひ、法外な尊敬から生ずる滑稽を見せたもの。「翁人ひとりたうめひとり」と並べ、貫之と同列に置いて、恰も貫之の妻であるかのやうに見せかけ、或は「淡路のたうめといふ人」といひ、又爰に、淡路を淡路島に言ひかけ、「淡路の島の巨子」と崇め奉つてゐる。

○船底より云々。船に醉うて船底に臥してゐたが、その船底から頭を持ち上げて次のやうに詠んだとの意。

○いつしかと云々。いつか早くと待ち遠に思つてゐた難波潟に、其處の蘆を漕ぎ除けて、御舟が來た事だ。「いぶせし」は、欝悒で、心の結ぼれ塞ること、轉じて、おぼつかない事、ゆかしい事、戀しく思ふ事などの意に用ゐる。爰は、心もとなく待遠に思ふ意。蘆は難波の名物で、萬葉「海原の豊けき見つゝ蘆が散る難波に年は經ぬべくおもほゆ」など詠まれ、堀川百首「難波潟蘆の穗末に風吹けば立寄る浪の花かとぞ見る」ともある。「こぎそけ」は、漕き退けで、蘆を退け靡かせて舟の通ること。

○おもひの外なる人。案外な人。今まで船底に呻吟して、歌など詠む元氣もなさそうに思はれてゐた老女が、突然詠み出したので、意外に感じたのである。
○こゝちなやむ舟君。船酔の爲に心持をわるくしてゐた舟君。貫之のこと。
○いたく愛でゝ。ひどく感心して。
○船ゑひしたまひし御顏云々。船酔をなさつて、青く萎れかへつて居られた御樣子には、不似合な上出來の歌であるよ。「したまひし御顏」といつたのは、聽き尊んで言うたもの。

七日　今日河尻に舟入り立ちて漕ぎ上るに、川の水ひて、惱みわづらふ。舟の上る事いとかたし。かゝる間に、舟君のやまうど、もとよりこちゝくしき人にて、かうやうの事更に知らざりけり。かゝれども、淡路のたうめの歌にめでゝ、都ぼこりにもやあらむ、からくしてあやしき歌ひねり出せり。其の歌、

きと來ては川の堀江の水を淺み
舟もわが身もなづむ今日かな

【語釋】
○入りたちて。入り込んで。
○川の水ひて。川の水が減つて。
○惱みわづらふ。舟の進むことが困難で、苦しむこと。「惱み」も「わづらふ」も、共に同じ意の語で、昔は、意味は同じくとも言語が違へば重れて用ゐたもので、

【通釋】七日、今日、河口に舟が入り込んで、川を漕ぎ上るに、川の水が涸れて、進むに困難辛苦する。舟の上ることが甚だむつかしい。かうしてゐる間に、病人の舟君は、本來不風流な人で、このやうな歌詠むなどいふ事は、少しも知らなかつた。けれども「淡路のたうめ」の歌にほれ込んで、都に近づいた事の悅びからであらうか、やうゝの事で、まづい歌を考へ出した。その歌、

きと來ては川の堀江の水を淺み舟も我が身もなづむ今日かな

この歌は病氣をしてゐるから、かう讀んだのであらう。一首で滿足しないから、もう一首、

きと思ふ舟なやますはわが爲に水の心の淺きなりけり。

此の歌は、都の近くなつた事が嬉しくてたまらないで、讀んだのであらう。これは、病をすればよめるなるべし。ひと歌に事の飽かねば、今一つ、

きと思ふ舟なやますはわが爲に
水のこゝろの淺きなりけり

此の歌は、都ちかくなりぬる喜びに堪へずして、いへるなるべし。淡路の御の歌に劣れり。「ねたく、いはざらましものを」とくやしがる中に、夜になりて寢にけり。

淡路の御の歌よりはまづい。「殘念に、詠まずに居らうのに」と後悔する中に、夜になつて、寢て終つた。

「嵐の風」「豫めかれて知りせば」「鳴くなる聲の音のはるけさ」など、その例である。

○やまうど。病人の音便。

○こちゝくしき人。無骨な人。無風流な人。源氏・玉鬘「容貌はいとかくめでたく清げながら、田舍びこちゝくしうおはせましかば、如何に玉の疵ならまし」

○かうやうのこと。歌を詠むといふ風流なこと。

○みやこぼこり。都に近づいた悅び誇り。萬葉「水江の、浦島の子が、鰹釣り、鯛釣り誇り、七日まで家にも來ずて」とある「鯛釣り誇り」も、釣りの利得のあるを悅び誇る意。

○あやしき歌。貫之が自らの歌を謙遜して言うたもの。拙い歌。

○きときては云々。長い舟路をやう〳〵の事で此處までやつて來ては、また堀江の川の水が淺い爲に、舟も澁滯し、我身も病の爲に艱難苦勞する今日である。「きときき」は、來といふ動詞を二つ、「と」といふ助詞で重れたもので、單に「來」といふよりも意味が強い。古今集序「生きとし生けるもの」とあると同じ造句である。「川の堀江」は、「堀江の川」に同じい。「川のぼり江」「川のぼり路」などゝ解く說もある。「水が淺み」は、水が淺さにの意、「を」は詠嘆。「み」は「さに」といふ意の接尾語、「風を痛み」「瀨を早み」「苦を荒み」などと同じ造句である。「なづむ」は、澁滯する意、又は艱難苦勞すること、萬葉「ますらをの心は無しに秋萩の戀にのみやもなづみてありなむ」「卷向の檜原に立てる春霞おほにし思はゞなづみ來めやも」などは、苦しみ惱む意。爰は、此兩意を同時に言懸けて、舟の方には澁滯する意、人の方には苦惱の意に用ゐたもの。即ち「なづむ」の一語に兩意をきかせたのが此歌の技巧である。

○これは病をすれば云々。これは作者が右の歌を詠したのである。

○ひと歌。一首の歌。

○ことの飽かれば。十分と思はぬから。

○とくとおもふ云々。早くと思ふ我が舟を惱み苦ませて進ませないのは、自分にとつて、水が親切心がないからであるよ。水底の淺い事を心の淺い意にとつて詠んだ點に、此歌の技巧がある。

○淡路の御。「御」は貴人の尊稱。「淡路の島の巨子」と云うたと同じ意味で尊んだもの。

○れたく。殘念なこと。

○いはざらましを。歌ますに居らうものを。

【通釋】八日、矢張り川邊に滯留してゐて、鳥養の御牧といふ所にとゞまる。今晩、舟君がいつもの持病が起つてひどく苦しむ。或人が僅かの魚を持つて見舞に來た。米で返禮をする。それたば「飯粒で魚を釣ると言はうか」など、從者の男どもがひそ〳〵言ふのだ。このやうな事が、所々である。今日は節日の物忌みをするから、魚を食はない。

八日　なほ川のほとりになづみて、鳥養の御牧といふところにとゞまる。こよひ舟君、例の病おこりていたく惱む。或人いさゝかなる物もて來たり。米してかへりごとす。男どもひそかにいふなり、飯粒してもつるとや。かうやうの事所々にあり。今日せちみすれば、魚用ひず。

【語釋】
○鳥養の御牧。攝津國三島郡鳥飼村。昔此處は馬を放飼した牧野であつた。
○例の病。いつもの病氣。持病。
○いさゝかなる物。僅かの魚を持つて見舞に來たのである。一本に、「あざらかなる物とある。新鮮な魚の意。
○米してかへりごとす。米で返禮をする。
○男どもひそかにいふなり。此句は下の句にかゝるので、「飯粒してもつるとや と男どもひそかにいふなり」といふに同じ。「男」は從者の男をいふのであらう。
○飯粒してもつるとや。飯粒で魚を釣るといはうか。古事記、神功皇后の條に、「また筑紫の松浦潟の玉島の里に到りまして、その河の邊に御食せす折しも、卯月の初の頃なりしかば、その河中の磯にまして、御裳の糸を抜き取り、飯粒を餌にして、其河の年魚をなも釣らゝける。」とある故事から、鮮魚の返禮に米をやつたのを、酒落て斯く言うたもの。「も」は詠嘆。「とや」は、「とや言はん」の意。さて此句は「飯粒してもつるとや」全體が男どもの言うた詞である。
○かうやうのこと。魚の返禮に米をやること。
○今日節忌すれば。八日は、潔齋日で、六齋日の一つである。

【通釋】九日、待遠しいので、夜の明けないうちから、舟を曳き〳〵して川を上るけれど、水がないから、極めて僅かづゝ進む。此の間に和田の泊のあがれ

九日　心もとなきに、明けぬから舟を曳きつゝ上れども、川の水なければねざりにのみぞねざる。此の間に、和田の泊のあがれの所といふ所あり、米魚など乞へばおこせつ。かくて舟曳き上るに、渚の院といふ所を見つゝ行く。其の院、昔を思ひやりて見れば、おもしろかりける所なり。後なる岡に、松の木ども

の所といふ所がある。所の人に米や魚などを求めると、寄越した。このやうにして舟を曳いて上るに、渚の院といふ所を見い〳〵してゆく。その院は、昔の事を想像して見ると、面白いつた所である。院の後の岡に松の木などがある。中の庭には梅の花が咲いてゐる。この時、人々の言ふ事は、「これは昔有名であつた場所である。惟喬親王の御供に仕へた在原業平中將が「世の中にたえて櫻の咲かざらば春の心はのどけからまし」といふ歌を讀んだ所であるよ。いま感興の湧いた人が、

あり。中の庭には、梅の花咲けり。こゝに人々のいはく、「これむかし名高く聞えたる所なり。惟喬の親王の御供に、在原の業平の中將の、「世の中にたえて櫻の咲かざらば春の心はのどけからまし」といふ歌よめる所なりけり。いま興ある人、所に似たる歌よめり。

千代へたる松にはあれど古の
聲のさむさはかはらざりけり

又ある人のよめる、

君戀ひて世をふる宿の梅の花
むかしの香にぞなほ匂ひける

といひつゝぞ、都の近づくを喜びつゝ上る。かく上る人々の中に、京より下りし時に、皆人子どもなかりき。至れりし國にてぞ、

所に似合はしい歌をよんだ。

千代へたる松にはあれど古の聲のさむさはかはらざりけり。

又、或人の詠んだ歌。

君戀ひて世をふる宿の梅の花昔の香にぞなほ匂ひける。

と讀み〳〵して、都の近くなるのを喜び〳〵漕ぎのぼる。このやうに漕ぎ上る一行の人々の中で、初め京都から任國に下る時には、皆子供がなかつた。滯在してゐた國で、子供を生んだ者が幾人もあつた。その人々が皆舟の泊る所で、子供を抱いて、舟からおりたり、舟

子生める者どもありあへる。みな人舟の泊る所に、子を抱きつつ下りのぼりす。これを見て、昔の子の母、悲しきに堪へずして、

無かりしもありつゝ歸る人の子を
ありしもなくて來るが悲しさ

といひてぞ泣きける。父もこれを聞きて、いかゞあらむ、かうやうの事、歌好むとてあるにしもあらざるべし。もろこしもこも、思ふ事に堪へぬ時のわざとか。こよひ宇土野といふ所にとまる。

【語釋】

○心もとなきに。待遠しく思はれるので。氣が氣でない爲に。「に」は、に因つて、の爲になどいふ意。

○明けぬから。夜の明けぬうちから。貫之「藤の花咲きぬるを見て時鳥、まだ

にのぼつたりする。この様子を見て、亡き女兒の母が、悲しくてたまらないで、

無かりしもありつゝ歸る人の子をありしも無くて來るが悲しさ。

と詠んで泣いた。

父なる人もこの歌を聞いて、どうあらうか、さぞ悲しい事であらう。このやうな歌は、歌がすきだからとて讀むのでもなからう。唐土でも我國でも、歌といふものは、感に堪へない時に詠むものだと言ふことだ。今晩、宇土野といふ所にとまる。

鳴かぬから待たるべらなり」「惜しむから戀しきものを白雲の立ちなん後は何心地せむ」とあるも、鳴かぬうちから、別を惜しんでゐるうちからの意で、同じ語法である。一説に「心もとなきに明けぬ」で文を切り、「から(空)舟を」と下につゞけて解いてゐるのもある。

○船をひきつゝ。例の綱手を曳いて淀川を溯るのである。

○ゐざりにのみぞゐざる。「ゐざる」といふ意を強く言うたもの。たゞ〳〵膝行ばかりだ。

○和田のとまり。鳥飼と渚との間に此地名は今日殘存して居らぬ。多分今の牧方あたりだらうといふ。「とまり」は、船の行き着いて泊る處。萬葉「眉のごと雲居に見ゆる阿波の山懸けて漕ぐ舟泊知らずも」さて「和田の泊のあがれの所」とあるは、「あがれの所なる和田の泊」といふに同じで、「あがれ」は「和田の泊」の形容詞である。

○あがれの處。「あかれ」は「別る」の古言、和田の泊は難波と京とに旅客の別れる場所であるから、あがれの所といふのであるとと。創見には「こは物を召し上れといふあがれにて、水陸の旅人に、貨食をひさぎて、あがれ〳〵と呼ばふより、あがれの所といひならせる俗稱を、わざと例の書き出でられしなるべし。實にあがれと呼ぶ所の名ならば、あがれの所とはいふまじきなり。石津といふ所、鳥飼の御牧といふ所などの如く、あがれといふ所と書くべし。石津の所、鳥飼の御牧の所といひては、聞えぬが如し。……もしこの被食(あがれ)の意ならずば舟の人を呼び上ぐるのあがれにて、陸より、あがれ〳〵と呼ばふ故の名にてやあらん、いづれにてもあるべし」と言うてゐる。

○米魚などこへばおこせつ。貫之一行の舟の人が、所の者に、米や魚を求めたれば、寄越したといふ意か。創見には「米をやりて魚など乞へば」の誤であらうと言つてゐる。

○渚の院。伊勢物語「昔、惟喬のみこと申す親王おはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬といふ所に宮ありけり。年毎の櫻の盛りには、その宮へなむおはしましける。その時、右の馬の頭なりける人を、常にゐておはしましけり。時世へて久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩はねんごろにもせで酒を飲みつゝやまと歌にかゝれり。今狩りする交野の渚の院の櫻ことに面白し。この木のもとにおり居て枝を折りてかざしにさして、かみなかしも、皆歌よみけり。馬の頭なりける人のよめる。世の中にたえて櫻のさかざらば春の心はのどけからまし、となんよみたりける云々」

○昔を思ひやりてみれば。惟喬親王が交野に狩獵に行き渚の院に逗留せられた當時を想像してみると。

○こゝに。此語は今日俗に「そこで」などいふと同じ意で、下の句を起す發語のやうに用ゐられたものであらう。下の十一日の條にも「こゝに相應寺云々」とある。

○名だかくきこえ云々。評判の高かつた所である。

○惟喬親王。文德天皇第一皇子。

○御ともに。「御供に仕へた」といふほどの意。

○世の中に云々。世の中に全く櫻が咲かないならば、春に於ける人の心は、のんびりとしたものであらうといふので、春は櫻ゆゑに、風につけ雨につけ、人は心を惱ます、花の美しいだけに、散るを惜しむ心も深く、恨も長い、だから全く櫻がなかつたならばと、嘆息したのである。然し此歌は、裏面に寓意があるので、惟喬親王を櫻に譬へたものであらうといふ。卽ち惟喬親王は文德天皇の第一皇子でありながら、外戚に勢力がない爲に、第二皇子惟仁親王に引越された。當時藤原氏の專横跋扈を憤る人々は、この惟喬親王に同情したもので、業平はその隨一であつた。そして惟喬親王故に色々と心を碎き悶々の日を送つたのである、その感慨を櫻の花に托して詠んだものであらう。

○興ある人。感興を催した人。貫之をさす。

○千代へたる云々。千年も經過した舊い松ではあるが、吹く風に颯々と音たてゝ鳴る聲は、惟喬親王の昔と同じで、その響の清爽な感じは今も變らないわい。「聲のさむさ」とは、松風の音の清爽な感じを、感覺的に言うたもの。新古今集の櫻色の庭の春風」とか「嵐も白き春の曙」といつた言ひ方と同じく、當時に在つては新しい言ひ方であつたらう。

○君戀ひて云々。渚の院に度々來て留まられた惟喬親王を戀ひ慕うて、幾年かを經て久しく立つてゐる、舊るき宿の梅の花は、今でも昔の通りの香に、矢張匂うてゐる事だ。「世をふる」に「年を經る」と「舊る」の兩意を言懸けてある。

○かくのぼる人々の中に。このやうに都に上る一行の人々の中で。此句は、「いたれりし國云々」に續くのである。

○みな人。紀氏の屬官の人々。

○いたれりし國。行つて居つた國。

○ありあへる。「あふ」といふ語は、他の動詞に續けて、その動詞が示す動作を、互に又は共々に行ふ意を示す接尾語。「誘りあふ」は、互に又は共々に誘り合ふ

こと。爰は、子を生んだ者が一人ではなく、幾人も有り合はせたこと、あちらにもこちらにもあつたこと。

○船のとまるところ。船つき場。

○おりのぼり。舟から陸におりたり、陸から舟にのぼつたりすること。

○むかしの子の母。亡兒の母で、貫之の妻。

○なかりしも云々。子供のなかつた者も、子供が出來て歸るものを、有つた子供も死に失せて歸り來るのが悲しい事よ。「人の子」は、單に「子」といふ意、人の」は輕く添へた詞。古今集「世の中にさらぬ別のなくもがな千代もと祈る人の子のため」後撰集「人の親の心は闇にあられぐも、子を思ふ道にまどひぬるかな」などある「人の子を」は「人の子なるものを」の意。

○いかゞあらん。どうあらうか、さぞ悲しい事に思つたであらうと の餘意を含めてある。

○かうやうのこと。このやうな歌よむ事。

○歌このむとて云々。歌を好むとて詠むのでもなからう。歌は單に歌が好きだからと言うて、智識的に言語を羅列するのではない。

○思ふ事に堪へぬ時のわざとか。歌や詩を詠むといふ事は、內部に情緒の興奮があつて、感に堪へぬ時に、する仕業であるとか言ふ事だ。詩の序「情動ニ於中ニ而形ニ於言ニ、言レ之不レ足、故嗟ニ歎之ニ、嗟ニ歎之ニ不レ足、故詠ニ歌之ニ」古今集序「やまと歌は人の心を種として、萬(よろづ)の言の葉とぞなれりける。世の中にある人、事業(ことわざ)しげきものなれば、心に思ふ事を、見る物聞く物につけて、いひ出せるなり。花に鳴く鶯、水に住むかはづの聲を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける」

○宇土野。攝津國三島郡五領村に在る。

十日　さはる事ありて、上らず。

【語釋】

○さはること。差支へ。

十一日　雨いさゝか降りてやみぬ。かくてさし上るに、東の方に山のよこほれるを見て人に問へば、「八幡の宮」といふ。これ

【通釋】

十日、故障があつて、漕ぎ上らない。

【通釋】

十一日、雨が僅か降つて止んだ。このやうにして

棹さして漕ぎのぼるに、東方に山の横に長くつゞいてゐるのを見て、人に尋ねると。「男山八幡宮である」と答へる。これを聞いて喜んで、人々がをがみ申す山崎の橋が見える。嬉しい事が此上もない。こゝで相應寺の邊に暫く舟をとめて、色々と相談する事がある。この寺のある岸の邊に、柳が多くある。或人がこの柳の影が川の底に映つてゐるのを見て、詠んだ歌、

さゞれ涙よするあやをば青柳のかげの糸して織るかとぞ見る。

を聞きて喜びて、人々をがみ奉る。山崎の橋見ゆ。うれしき事かぎりなし。こゝに相應寺のほとりに、しばし舟をとゞめて、とかく定むる事あり。此の寺の岸のほとりに、柳多くあり。或人この柳の影の川の底にうつれるを見て、よめる歌、

さゞれ波よするあやをば青柳の
かげの糸して織るかとぞ見る

【語釋】

○さしのぼる。舟に棹さして漕ぎのぼること。
○よこほれる。横たはつてゐること。
○八幡の宮。男山石清水の八幡宮。
○山崎の橋。山城國乙訓郡にある。此橋は當時有名なもので、聖武天皇の神龜三年に、行基菩薩が此橋を造り、橋上に法會を設けて供養した事が、水鏡に見えてる、續日本紀には「延曆三年七月癸酉、仰二阿波讃岐伊豫三國一、令レ造二山崎橋斷材一」といふことが見えてゐる。

○こゝに。そこで。下の句を起す爲の發語に用ゐたもの。
○相應寺。山崎の橋の西詰にある。權僧正壹演の開基した寺。「こゝに」を「此處で」の意だとすると、次にまた「相應寺のほとりに」と重れ言うたのは、最初は漠然と言ひ、再び具體的に言ひ換へたもので、方丈記に「さびしきすまゐ、一間の庵」と重れ言うてゐるのと同じものと見られるがさうではなからう。
○とかくさだむること。色々と相談する事。京に入るについて、色々の用意手順を相談したのである。
○寺の岸のほとり。相應寺が川に臨んでゐる、その相應寺のある岸邊の意。
○さゞれなみ云々。さゞれ波が寄せて水面に波紋が出來る、その水面に生ずる模樣をば、青柳の水に映る細い枝で、織るのかと思つて見る。水面に映る芽の生えそめた柳の枝を青色の糸に譬へ、水面に生ずる波紋をば綾織物に比し、兩者の間に、材料と製品との關係をつけたもので、かうした着想はそれが實感に即したものでなく、頭の中で作り上げた技巧的のものである。柳の枝を糸に譬へた歌に、伊勢女「青柳の枝にかゝれる春雨は糸もてぬける玉かとぞ見る」古今集「青柳の糸よりかくる春しもぞ亂れて花の綻びにける。」「淺緑糸よりかけて白露を玉にもぬける青の柳か」などある。「さゞれなみ」は、小さな涙、「さゞれ」

【通釋】十二日、山崎に逗留してゐる。

【通解】十三日、やはり山崎に居る。

【通釋】十四日、雨が降る。今日牛車を京の家へとりにやる。

はさらさらと音のするのをいふ詞、細涙・小涙など書いてあるのは、皆意味によつて書いたもので、「さゝ」は、細小な意ではない。

十二日　山崎にとまれり。

【語釋】○とまれり。「り」は現在完了の助動詞で、四段活用の已然形、佐行變格の未然形にのみ連る。

十三日　なほ山崎に。

【語釋】○山崎に。「山崎にとまれり」の意。

十四日　雨降る。けふ車、みやこへとりにやる。

【語釋】○車。牛車をさしていふ、牛に牽かせる屋形車である。
○みやこへ。京の言葉へゝの意。

十五日　今日車ゐて來たり。舟のむつかしさに、舟より人の家に移る。此の人の家、よろこべるやうにて、あるじたり。此の主人のまたあるじのよきを見るに、うたておもほゆ。いろいろにかへり事す。家の人のいでいり、にくげならずゐやゝかなり。

【語釋】○車ゐて來たり。車を持つて來た。凡て「率」とは、身に副へ附けるをいふ、例へば「率てゆく」は、身に副へて行くこと、「ひきゐる」は、引き隨へて身に副へること。
○むつかしさ。むさくるしさ。「むつかし」は、むさい意、又はうるさく煩はしい意。枕草子「むつかしげなるもの、縫物の裏、猫の耳のうち。」
○よろこべるやうにて。心の中はどうかわからぬが、表面は嬉しく思つてゐる樣

【通釋】十五日、今日牛車を持つて來た。舟の中がむさくるしいので、舟から人家に引き越す。此の人の家では、表面は喜んでゐるやうな態度で御馳走した。この家の主人の饗應のよいのを見るにつけて、いよ〳〵丁寧に思はれる。色々に返禮をする。家人の立居振舞が上品で禮儀正しい。

子で。

○あるじ。饗應。御馳走。

○またあるじのよき。自分達を好意で迎へて矣れたその上に、また御馳走振りのよいのを見るにつけ。

○うたておもほゆ。餘りに丁寧に思はれる。「うたて」は、本からある事のいよ／＼進んで殊に甚くなるといふ詞で、萬葉集「何時はなも戀ひずありとはあられどもうたて此頃戀の繁きも」「我宿の毛桃の下に月夜さし下惱ましもうたて此頃」「三日月のさやにも見えず雲隱り見まくぞ欲しきうたて此頃」など、皆いよ／＼甚しくなる意。轉の字を書くのも、移り進む意をとつて用ゐたもの。さて右の意から一轉して、事の平隱尋常でなく怪しく善くない意に用ゐる。書紀、武烈天皇の所行を言ふ所に、設二奇偉之戲一」とある。枕草子「花も散りたる後は、うたてぞ見ゆる」は、物憂く厭に見えること。また「老いばみうたてある者こそ」とあるも、疎ましく厭な樣子をした者の意。然し爰は、單に度に過ぎて甚しい意に用ゐたのである。

○家の人のいでいり。家の人の立居振舞をいふ。

○にくげならず。下卑て居らぬこと。源氏帚木「父の年老い、物むつかしげにふとり過ぎ、兄人の顏にくげに」とあるも、下卑て可愛くないこと。

○ゐやゝか。「ゐや」は禮で、「やか」は形容辭。禮儀正しく恭々しいこと。さてこの「ゐやゝか」は、「うやなし」「うやまふ」「うや〳〵し」の「うや」と同じで、書紀景行天皇の卷に「無禮」ともある。

【通釋】

十六日　今日ゆふつ方、京へ上る。ついでに見れば、山崎のたなゝる小櫃の繪も、まがりのほらのかたも、かはらざりけり。

「賣る人の心をぞ知らぬ」とぞいふなる。かくて京へ行くに、島坂にて人あるじしたり。かならずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、かへる時ぞ、人はとかくありける。これにもそれにもかへり事す。

夜になして京には入らむと思へば、急ぎしもせぬ程に、月出でぬ。桂川月のあかきにぞ渡る。人々の曰く、「此の川飛鳥川にも

【通釋】十六日、今日夕方、都へ上る。そのついでに見ると山崎の店にある小櫃の繪も、勾餅の法螺貝の形も、以前と變らないわい。然し「それを賣る人の心ははたして元通りかどうかわからない」と云ふのである。このやうにして都へ行くに、島坂で人が御馳走した。こんな事は必ずあるとは極つて居ら

ぬ事だ。赴任の時よりは、歸る時の方が、人はいろいろと饗應した。それらの饗應をうけた人々に返禮をする。

夜になつて都に入らうと思ふから、急ぎもしないでゐる間に、月が出た。桂川をば月の光で渡る。人々の言ふことに、「この川は飛鳥川でもないから、淵瀬が少しも變らないわい」と言うて、或人の詠んだ歌、

久方の月に生ひたる桂川
底なる影もかはらざりけり

又、或人の詠んだ歌、

天雲のはるかなりつる桂川
袖をひでゝも渡りぬるかな

又ある人のよめる、

桂川わが心にも通はねど
同じふかさに流るべらなり

又ある人のいへる、

天雲のはるかなりつる桂川
袖をひでゝも渡りぬるかな

あらねば、淵瀬さらにかはらざりけり」といひて、或人のよめる歌、

久方の月に生ひたる桂川
底なる影もかはらざりけり

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜ふけてくれば、所所も見えず。京に入り立ちてうれし。

ぬるかな。

又、或人の詠んだ歌、

桂川わが心にも通はねど同じふかさに流るべらなり。

都に歸り着かうとする喜びの餘勢で、詠んだ歌もあんまり多い。夜が深くなつてゆくと、所々も見えない。都に入り込んで嬉しく感じる。

【語釋】

○山崎のたな。山崎のみせ。「たな」は「店肆也所ニ以置レ貨鬻ヲ物也」（崔豹古今注）とある。宇津保物語「これはてゝ、たなに女ぞりつゝ物うる」

○小櫃の繪。小櫃は繪櫃のこと、檜の曲げ物で作り、櫻など畫いて、色彩（いろどり）である。三月雛祭の折に用ゐるもの。

○まがりのほらのかた。「まがり」は、勾餅（まがりもち）の略、和名抄に「勾餅、形如ニ藤葛一者也、和名萬加利」とある。米・麥の粉を餅で練りかため、藤や葛の形にねぢ曲げて、油で揚げたもの。「ほらのかた」は、法螺貝の形の意。

○かはらざりけり。五年前に土佐國に赴任する時と、今も變つて居らないよ。久し振りで歸京して見ると、嘱目みな昔の儘で、一種なつかしさの情に堪へられない、世上の事物の依然として舊態を存してゐるを見るにつけても、思ひ出す所のものは、亡き愛兒である。愛兒をなつかしく思ふ情は、やがて愛兒の玩んだ調度や食物に眼を奪はれる。そしてなつかしい哀感を誘はれるものだ。「小櫃の繪」「まがりのほらのかた」の二つを特に取出したのも、愛兒を慕ふ心からである。

○賣る人の心云々。繪櫃や勾餅は變らなくても、それを賣る人の心は、果して昔

の儘かどうかわからぬと言ふのであるといふ意。下に「家をあづけたりつる人の心も荒れたるなりけり」とある文の豫備である。此句は、著者以外の他の人が言うた詞のやうに裝うて書いてはあるが、實は貫之の心持を述べたものである。古今集「人はいさ心も知らず故郷は花ぞ昔の香に匂ひける」

○島坂。山城國、乙訓郡、石塔寺の南にある。

○かならずしもあるまじきわざなり。屹度あるとはきまつて居らぬ事である。即ち、するには及ばぬ餘分の事だとの意。當時國司は田舍者として嘲られてはゐたが、官吏の中では一番役得が多く、物持ちであつた。だから、役人は藏人を下りて、國司になる事を望んだもので、枕草子「昔の藏人は今年の春よりこそ泣きたちけれ、今の世には走りくらべをなんする」と云つて、藏人が叙爵されて、さて地方官にありつかうと競爭をするのを惡く言つてゐる。今貫之の歸京を見て、何の緣故もない人達まで饗應した。それは貫之が物持になつて歸つたものとしての阿諛迫從である。だから爰に「必ずしもあるまじきわざ」と皮肉を言つたのである。

○人はとかくありけける。人は色々ともてなした。

○よろにになして。夜になるのを待つて。

○桂川。西河ともいふ。保津川の下流。保津川は嵐山の下で大堰川となり、更に梅津の邊で桂川となり、京の西南を流れて淀川に合流する。

○月のあかきにぞわたる。明かな月の光によつて渡る。

○飛鳥川。大和國高市郡飛鳥を流れる川で、古今集、雜、「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる」など詠まれ、無常な事の譬喩に用ゐられてゐる。

○ひさかたの云々。天上にある月に生えてゐる桂といふ名を持つてゐる桂川は、水底に映る月影も、又、水底の淵瀬も昔と變らないわいと言ふので、桂川の桂に月中の桂樹の意を言懸け、それによつて、月と相即不離の關係を持たせ、「底なる影もかはらざりけり」といふ事の當然性である意を匂はせてゐる。且「底なる影も」と言うて、水底の淵瀬も變らないといふ餘意を含めてゐる。例の複雜を單純化した言ひ方である。「ひさかたの」は、「天」の枕詞で、轉じて、日・月・雨・雲・星など天象の物の枕詞に用ゐる。一說に「ひさかた」は、天の枕詞から轉じて天の意に用ゐたもので、「久方の雨も降らぬか雨つゝみ君にたぐひて此日くらさむ」「久方の月は照りたり暇無くあまの漁火はともしあへり見ゆ」(以上萬葉集)など、天の雨、天の月の意のつゞけであるといふ。

○あまぐもの云々。土佐國から思ひやると、恰も天に浮ぶ雲の如く遠くに思はれた桂川をば、今は釉をひたして渡つた事であるよといふので、桂川に月中の桂の意を含め、「天雲の」といふ語に緣を持たせて詠んだもの。「天雲（あまぐも）」は、「遙か」の譬喩に用ゐた枕詞。

○かつら川云々。桂川は桂といふ名を持つてゐて、少しも人らしくなく、吾が心と似通はないけれど、京に近づいた事を喜ぶわが心の深さと、同じ深さに流れてゐるやうだ。

○京のうれしきあまりに。京に歸り着かうとする喜びの餘勢で。

○あまりぞおほかる。度に過ぎて多い。あんまり多い。

○夜ふけてくれば。夜がふけてに、來たから。

○京に入りたちて。京に入り込んで。

家に至りて門に入るに、月あかければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなくぞこぼれ破れたる。家をあづけたりつる人の心も、荒れたるなりけり。中垣こそあれ、一

【通釋】家について門に入るに、月の光が明るいから、大層よく樣子がわかる。聞いてゐた以上に、言うてもしるしのない程ひどく破損してゐる。家を預けた人の心も、疎遠になつたのであるよ。預けた人の家とは、中垣はあるが、同じ家のやうであるから、先方から望んで預かつたのだ。さうであるから、幸便のある度毎に金もしよつちう贈つた。然し今晩は、このやうに荒れはてゝゐる事よ、なぞ從者の人々に高い聲で喋らせない。先方の仕打ちが、甚だどうよくには見えるが、謝禮はしやうと思ふ。

さて昔の池も埋まつて終つて、單に池の跡をとゞめてゐるといふだけで、つ家のやうなれば、望みてあづかれるなり。されば便（たより）ごとに、物もたえず得させたり。こよひかゝる事と、聲高（こわだか）に物もいはせず。いとはつらく見ゆれど、こゝろざしはせむとす。

さて池めいてくぼまり、水づける所あり。ほとりに松もありき。五年六年の中に、千年や過ぎにけむ、片枝はなくなりにけり。今生ひたるぞまじれる。大方みな荒れにたれば、哀れとぞ人々いふ。思ひ出でぬ事なく、戀しきが中に、此の家にて生まれし女子の、もろともに歸らねば、いかがは悲しき。船人も皆子抱きてのゝしる。かゝる中に、なほかなしさに堪へずして、ひそかに心知れりける人と、いへりける歌、

生れしも歸らぬものを吾が宿に
小松のあるを見るが悲しさ

窪くなつて、水のついてゐる所がある。そのほとりに松もあつた。それがこゝ五六年の間に、千年も經過したであらうか、片枝はなくなつて終つた。新しく生えたのも交つてゐる。大體皆荒れて終つてゐるから、歎かはしい事だと人々が言ふ。家に歸つて見ると、一つとして追憶の種でないものとてはなく、昔の事が懇しく思はれる中で、此家で生れた女の子が、ともゝくに歸らないから、どうして悲しくない事があらうぞ、非常に悲しい。舟に乘つて來た一行の人々も、皆子供を抱いて喧

とぞいへる。なほ飽かずやあらむ、又かくなむ、

見し人を松の千年に見ましかば
遠くかなしきわかれせましや

忘れ難くくちをしき事多かれど、えつくさず。とまれかくまれ、疾くやりてむ。

【語釋】

○家にいたりて。自分の家に到着して。
○ありさま。屋敷の内の樣子。
○聞きしよりもまさりて。耳に聞いてゐたより以上に。
○いふかひなく。言うてもしるしのない意。言うても役に立たぬ程に甚しいのをいふ。
○家をあづけたりつる人。留守中家の管理を賴んで置いた人。
○心もあれたるなりけり。「心も」の「も」事柄を二つ以上重ねる時に用ゐる助詞で、家も荒れたし、同時に、人の心も自分に疎くなつたのであつたとの意。「あしく言うてゐる。かうした中で、矢張悲しくてたまらないで、ひそかに子を亡くした親心を知つてゐる人と、詠んだ歌、

生れしも歸らぬものを
吾が宿に小松のあるを
見るが悲しさ。

と詠んだ。矢張十分と思はなかつたのであらうか、又、次のやうに詠んだ。

見し人を松の千年に見
ましかば遠く悲しき別
れせましや。

亡兒に關しては、忘れ難く殘念に思ふ事が多いけれど、書きつくすことが出來ない。何れにしても、此日記は、人に見せる

る」は、竹取物語「あなゝひにおごろ〳〵しく二十人のぼりて侍れば荒てまうでこず」萬葉「筑紫船未だも來ればあらかじめ荒ぶる君を見んが悲しさ」などあると同じで、疎び荒びて善愛くない意、又萬葉「島の宮勾の池の放ち鳥荒びなん行きそ君まさずとも」とあるも、人疎く遠ざかりゆく意。

○中垣こそあれ。境界の垣はあるにもせよと下につゞく意。「中垣」は、隣家との隔てにある垣。
○物も絶えず得させたる。金錢も絶えずとらせた。「物」は、家を修繕する費用の金錢であらうといふ。
○こよひかゝることゝ云々。今晩は、從者どもに、「このやうに家が荒れはてゝゐる事よ」などと、高い聲で物を言はせない。兎に角、世話になつたのだから、從者どもを制して、禮を缺く振舞をさせなかつたのであらう。
○いとはつらく見ゆれど云々。「いとつらくは見ゆれど」とある「は」を上に置いたもの。先方の仕打が甚だどうよくに見えるが、こちらからの謝禮はしようとする。
○池めいて。池らしくなつて。
○くぼまり。くぼくなる。中が低くなる。

○水づける所。水のたまってゐる所。さて「池めいて云々」とあるは、元は池であつたが、今は荒れ果てゝ、淺くなり、草が生えなどして、庭とも池ともつかぬものになり、僅かに水のついてゐる所のあるさまを言うたもの。

○千年やすぎにけん。松の片枝がなくなつてゐる事を、白氏文集「松樹千年終是朽、槿花一日自爲榮」などある句の意から、揄揶したもの。

○今生ひたるぞ。新しく生ひたつたのが。「今」は、新參を「今參り」新造の內裏など、「今內裏」などいふ「今」と同じく、新しい意。「生ふ」は生ひ殖つこと、「はゆ」は芽の初めて萌え出ること。

○おほかた。大概（十のもの八九）、おしなべて、などいふ意。

○あはれ。身に泌みて歎かはしい意。

○おもひ出でぬことなく云々。家に歸り着いて庭などの荒れてゐるのを見るとあれにつけ、これにつけて、何一つ昔を思ひ出さぬといふ事がなく、凡てが皆思ひ出の種となつて、昔が戀しい中で。一說に、あらゆる昔の事を思ひ出す意に解いてゐる。

○いかゞは悲しき。「いかゞは悲しからざらむ」の意であらう。どうして悲しくなからう、非常に悲しい。萬葉集卷四「吾が戀に豈まさらじか」とあるも、

爲に記したのではないから、早く破つて終はう。

「豈まさらむや」といふ意である。

○船人。船に乘つて來た一行の人々の意。

○心しれる人。子供を亡くした親の心を知つてゐる人。貫之の妻をさして言うたものであらう。

○生れしも云々。此處で生れた子供すら歸らないのに、そのわが家の庭に小松の生えてゐるのを見るが悲しい事よ。「やど」は、庭前の意味で、生れた子供は旅で死んだ、家には留守の間に小松が生えた、それは悲しみの親にとつては、皮肉な惡戲であり、同時に一層の悲哀を誘ふものである。

○なほ飽かずやあらん。一首の歌では、まだ滿足しなかつたであらうか。

○見し人を云々。昔見たいとしい子供を、千年の齡を保つ松の如く、永久に見るであらうならば、このやうな悲しい死別をしようか、しはすまい。「遠くかなしき別」は、死別の事、同時に、亡兒の骸をば遠く土佐國に葬つて置いて、自分達だけが別れて都に歸つて來たその別れの意味をも含めてある。

○忘れがたく云々。亡兒の事について、色々と忘れ難く、殘念に思ふ事が多いが、筆に盡すことは出來ない。

○やりてん。破り棄てゝ終はう。

新釋土佐日記終

新釋土佐日記

著者檢印

定價金壹圓

昭和二年十月廿七日印刷
昭和二年十一月一日發行

著者　竹野長次

東京府戸塚町下戸塚十三、十四
發行者　上田榮吉

東京府戸塚町下戸塚十三、十四
印刷者　上田榮吉

東京府戸塚町下戸塚十三、十四
印刷所　泰文堂印刷部

發行所　東京府戸塚町下戸塚十三、十四
振替東京五五九四一
上田泰文堂
電話牛込四〇〇五番